2011.3　静教組立教育研究所　所報 No.144

子どもの人間関係づくりに関する調査

子どもたちの健やかな成長のために、大人は何ができるのだろうか…

静岡県教職員組合立教育研究所
調査部

index

はじめに …… P.1～

第１部　子どもたちの意識と行動　～調査結果の集計から～

（１）子どもたちの環境・自己肯定感 …… P. 3～

（２）友だちの人数・友人関係の維持 …… P. 7～

（３）自己表現・発表に対する意識 …… P.11～

（４）「いじめ」にあった経験・不安・相談相手 …… P.15～

（５）休日の過ごし方 …… P.16～

（６）家族・学校の先生・近所の人とのかかわり …… P.17～

（７）携帯電話の所持率・使い方・携帯電話に対する意識 …… P.19～

第２部　子どもたちの人間関係づくり　～クロス集計の結果から～

（１）自己肯定感を育むもの …… P.25～

（２）自己肯定感と自立した人間関係 …… P.32～

（３）いじめ …… P.37～

（４）子どもたちの友人関係 …… P.40～

（５）子どもたちの友人関係とケータイ …… P.44～

「子どもの人間関係づくりに関する調査」調査結果 …… P.48～

はじめに

調査の目的

静教組立教育研究所は、子どもたち、保護者、教職員の意識についての調査を継続的に行い、結果について分析し、考察を加え発信してきた。最近では、2004 年に教員を、2008 年には保護者を対象に調査を行い、その結果を『多忙化の中の教員 2997 人の現状に対する意識とメッセージ』、『子育てと学校教育に対する保護者の意識調査』として発信した。今回の調査は、前２回の調査を踏まえ、以下の仮説をもちながら、子どもたちの「意識と行動」特に「子どもたちの人間関係づくり」に焦点を当てた調査を実施することとした。

① 「子どもたちの考えていることがつかみにくい」「子どもたちの行動が予測しにくい」という声を聞くことが多い。このような声は、教職員だけでなく、保護者からも懇談会や家庭訪問の際に聞かれる。子どもたちが何を感じ、どのような行動をしようとしているのか、その実態を把握し子ども理解を深めることによって、適切な指導や支援の仕方について見通しをもつことができるのではないか。

② 「いじめ」をはじめ、子どもたちの人間関係についての言説が大量に情報化され、子どもたちにも流布されている。子どもたちはこのような情報をどのように受けとめているのか、またこれらの情報は子どもたちの人間関係づくりにどのような影響を与えているのか。子どもたちの実態を把握することによって、人間関係づくりの支援の方法が明らかになるのではないか。

③ コミュニケーション力を育てることの必要が様々な場面で言われている。これは、コミュニケーションがただ自分の考えを述べることに留まらず、広い人間関係づくりや、人間としての成長に大きなかかわりをもっているという認識が広がったことと、多様化・多層化する社会が子どもたちの人間関係に様々な影響を及ぼしているのではないかという「危機感」が背景にあると考える。子どもたちのコミュニケーションに対する意識と行動を知ることによって、子どもたちとのかかわり合い方やコミュニケーションスキル向上の方法が明らかになるのではないか。

また、近年問題となっているケータイ（携帯電話）という情報交換のツールが子どもたちの人間関係づくりに及ぼす効果についても把握できると考えた。

調査の計画と実施

今回の調査は、静岡県内の小学５年生（558 名）と中学２年生（489 名）を対象に、質問紙に答える方法で行った。小学５年生と中学２年生を選んだのは、発達段階によって意識や行動にどのような変化が現れるかを知ることと、その変化の様子を思春期前期の前後で比べたいと考えたからである。小中学生それぞれ 500 名という調査対象者数は、調査結果の客観性を担保する上で十分な数であると判断した。

調査対象は学級を単位に抽出した。学級の抽出に当たっては、県内全域から選ぶことや、学級規模、学校の立地条件に偏りがないことにできるかぎり配慮した。また、学級単位で調査を実施することによって、男女による違いの比較を行う際に条件が統一されると考えた。調査は 2009 年 10 月から 11 月に行い、欠席者を除く調査実施者から調査用紙の回収ができた。

調査結果の数値化を行い、単純集計結果として分析するとともに（子どもたちの意識と行動：第１部）、調査目的に掲げた課題を明らかにするために各調査項目間のクロス集計を行い、分析を行った（子どもたちの意識と行動：第２部）。

第１部　子どもたちの意識と行動～調査結果の集計から～

「子どもたちの人間関係」に関する調査は、「自分のことについて」から「携帯電話に関すること」まで、７つの質問グループから成っている。第１部では７つの質問グループごとに単純集計結果をもとに、子どもたちの表れについて概観する。なお、グラフの数値はすべてパーセンテージを示している。ここで扱うパーセンテージについては、報告書の読みやすさを考慮し、小数第１位を四捨五入し整数で表している。詳細な集計結果は巻末に載せた。

調査結果の概要

（１）はじめにあなたのことを教えてください…**子どもたちの環境・自己肯定感**

P. 3

＊家族が４人以下という家庭が約７割。家族の少人数化の中で、小学生の約８割、中学生の約９割が子ども部屋という自分専用の空間をもっている。

＊自分のことが好きな小学生は約６割、中学生では約３割。中学生は「どちらでもない」との回答が５割を占める。勉強や運動・部活動など頑張っていると評価している小中学生はともに７割を超える。

（２）あなたの友だちのことを教えてください…**友だちの人数・友人関係の維持**

P. 7

＊小中学生の約７割が同じ学校での友だちの数は８人以上と回答している一方で、悩み事を相談できる友だちは小学生の約４割、中学生の約５割が２～４人と回答している。

＊友人関係を維持するために小中学生の約５割以上が「秘密や約束を守る」「悪口を言わない」ことに気をつけている。また、仲直りの手段としては直接会って話すが約７割を占める。

＊小中学生の約５割が同じクラスの人から自分がどう見られているか気になると回答している。

（３）クラスや授業中のあなたのことを教えてください…**自己表現・発表に対する意識**

P. 11

＊小中学生の７割以上の子が自分の意見が正しいか気になると回答しているものの、８割以上が自分の意見を発表することは大切だと回答している。

＊反対意見を気にしない子、発表後に何か言われることを気にしない子が５割以上おり、クラスの中の雰囲気や友人関係を過度に気にしながら授業中の発言をする傾向はあまり認められない。

（４）「いじめ」について教えてください…**「いじめ」にあった経験・不安・相談相手**

P. 15

＊小学生の約３割、中学生の約２割がいじめられた経験をもち、小学生の約４割、中学生の約３割がいじめられる不安を感じている。いじめにあったときの相談相手としては友だちが約５割を占めている。

（５）学校生活以外のことについて教えてください…**休日の過ごし方**

P. 16

＊休日は自宅で過ごす子の割合が７割を超え、家族と過ごすことが多いとする子が４割を超える。

（６）あなたを支える人のことについて教えてください…**家族・学校の先生とのかかわり**

P. 17

＊小学生の約８割、中学生の約７割が家族からほめられていると認識し、小学生の約７割、中学生の約５割が学校の先生からほめられていると認識している。また、約８割の子が家族とその日にあったことを話したり、近所の人と挨拶を交わしたりといったコミュニケーションをしている。

（７）携帯電話について教えてください…**所持率・使い方・携帯電話に対する意識**

P. 19

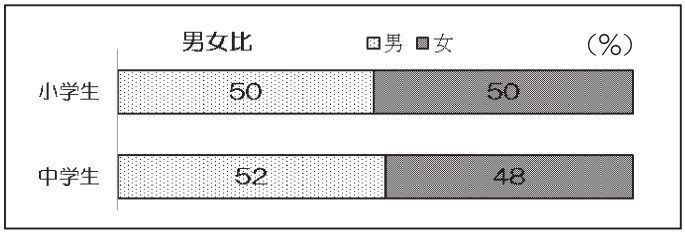
＊静岡県の中学生の携帯電話所持率は約４割。所有者の約９割はメール機能をよく使用している。携帯電話が手元にないと不安だと感じる子、メールなどが来ないと不安に感じる子、プロフや裏サイトに興味がある子はそれぞれ約２割程度である。過度な携帯電話依存が懸念されるのは、ごく一部の子どもである。

（1）はじめにあなたのことを教えてください…子どもたちが答える自身のこと

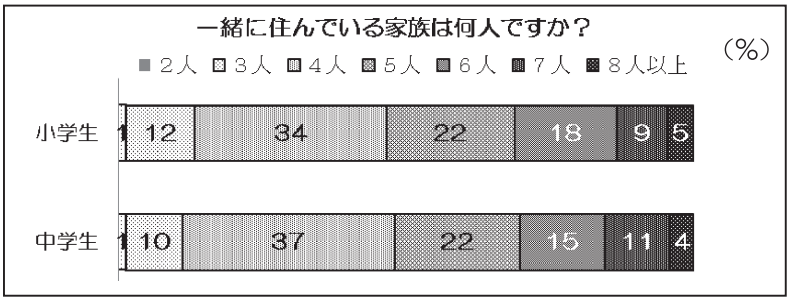
①子どもたちの環境

Ｑ１　あなたの性別は？

小学生 558 人のうち、男子は 277 名、女子は 280 名、無回答が１名であった。中学生 489 名のうち、男子は 254 名、女子が 235 名であった。



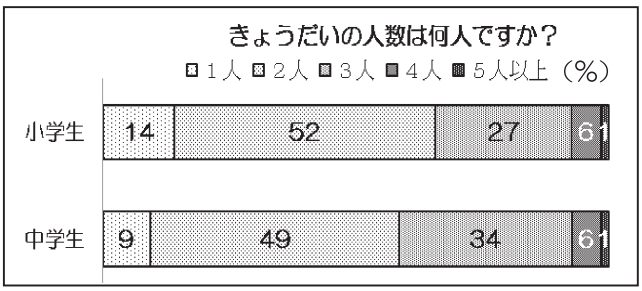
Ｑ２　一緒に住んでいる家族は何人ですか？（自分も入れて）



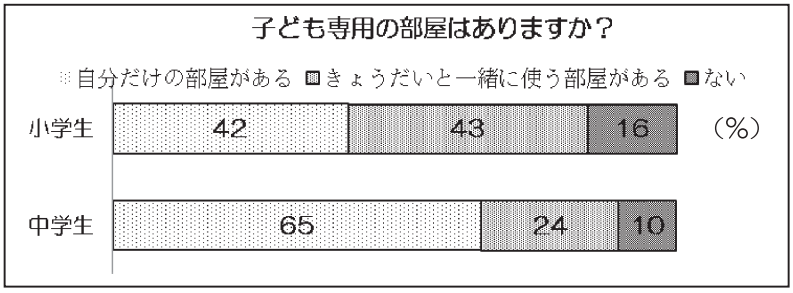
小・中ともに家族の人数は（自分を含めて）４人と答えたものが最も多く、ついで５人、６人となっている。家族は４人ないし５人という回答で全体の半数を超える。

Ｑ３　きょうだいは何人ですか？（自分も入れて）

小・中ともにきょうだいの数は２人がおよそ半数を占め、３人と答えたものを加えると８割を超える。



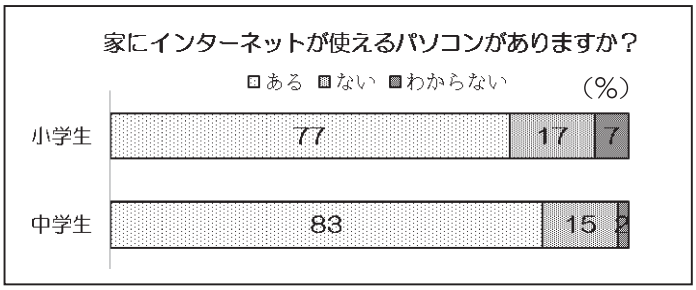
Ｑ４　あなたの部屋はありますか？



子ども専用の部屋が「ない」と答えた子どもは、小学生で 16%、中学生で 10%となっている。小学生でも４割、中学生になると 65%の子どもが自分専用の部屋をもっている。

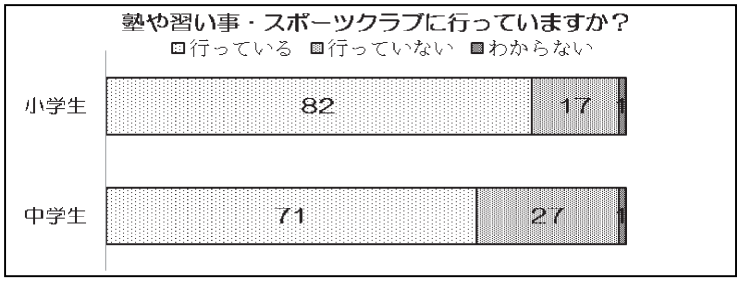
Ｑ５　家にインターネットが使えるパソコンがありますか？

小学生の 77%、中学生の 83%からインターネットが使えるパソコンが「ある」という回答があった。携帯電話のインターネット接続機能をあわせると、子どもたちのインターネット使用環境は 90%を超えていると考えられる。



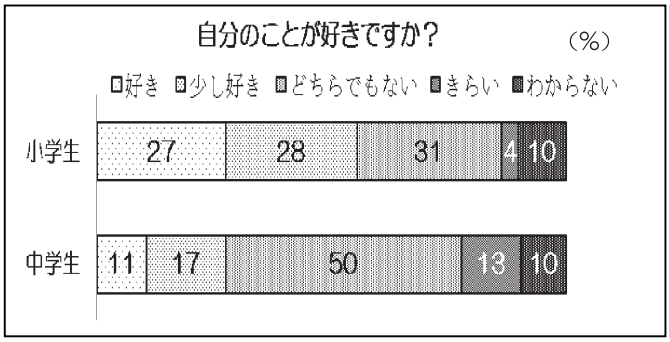
Ｑ６　塾や習い事・スポーツクラブに行っていますか？

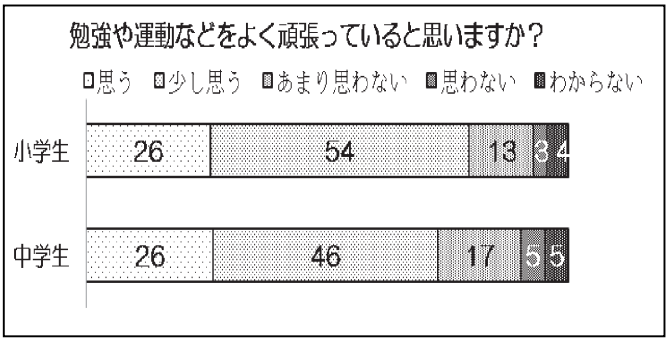
小学生の 82%、中学生の 71%が塾や習い事、スポーツクラブに通っている。中学生になると 10%以上下がるのは、中学生の場合ほとんどが学習塾であるのに対し、小学生の場合は学習塾の他にスポーツ少年団や習い事へ通うことが数字を高くしているからだと考えられる。



②子どもたちの自己肯定感

Ｑ７　あなたは自分のことが好きですか？
Ｑ８　あなたは勉強や部活などをよくがんばっていると思いますか？





自分のことは好きだけど、どちらでもない自分もいる

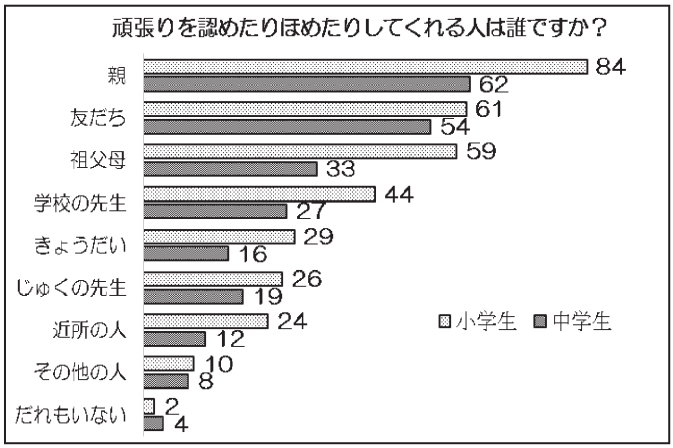
OECD の調査によると日本の子どもは自己肯定感が低いとされている。今回の調査では小学生の 55%・中学生の 28%が、自分のことを「好き」「少し好き」と答えていた。一方、自分のことが「嫌い」と答えた子どもは小学生で 4%・中学生で 13%だった。中学生で「どちらでもない」と答えた子どもが増えているのは、自分のことを見つめる機会が増えるに従って自分のことを簡単に「好き」とか「嫌い」とか言えなくなるからだろう。

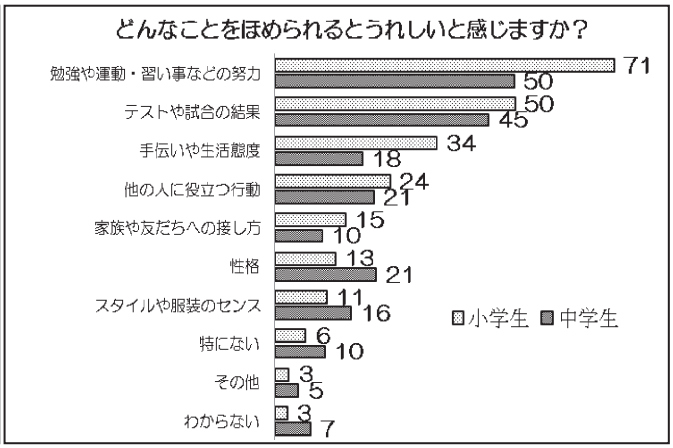
自分の頑張りについては、小学生・中学生とも同じような傾向が見られた。頑張っていると「思う」「少し思う」と答えた子どもが小学生 80%・中学生 72%と「あまり思わない」「思わない」の小学生 16%・中学生 22%を大きく上回っていた。

自己肯定感の指標

今回の調査では、 自己肯定感が子どもたちの行動や人間関係づくりに大きな影響をもっているのではないかという仮説をもって子どもたちの意識や行動の把握を試みた。 子どもたちの自己肯定感の指標として、「自分のことが好き？」「勉強や運動などをよく頑張っていると思う？」を考えた。 成績の伸びや運動技能の向上なども自己肯定感の指標となるだろうという意見もあったが、 子どもたちが成績の伸びや運動技能の向上を認識するのは、 他者との相対比較によって行われることが多いと考え、 指標としてとり上げなかった。 自己肯定感と意識や行動との関係については「第2部」において分析をすすめたい。

Ｑ９　あなたの頑張りを認めたり、ほめたりしてくれるのはだれですか？
Ｑ10　あなたは、どんなことをほめられるとうれしいと感じますか？





頑張りを認めてくれるのは家族、友だち、先生。認めてほしい、結果より努力

頑張りを認め、ほめてくれる人として、小中学生ともに「親」に次いで「友だち」を上位にあげている。子どもたちにとって「友だち」の存在が大きいことを示している。それに比べ、「学校の先生」をあげた子どもがやや少なかった。学校の先生は努力を認めながらも次の頑張りを期待して新たな目標を提示したり、中学生は教科担任制のため接する機会が少なかったりするためだと考えられる。３世代家族が減っていく中で、祖父母をあげている子どもが多い。祖父母とのかかわりが子どもたちにとって「いやし」の働きをしていると考えられる。

認めてほしいこととして、小中学生とも「結果」より、「努力」をあげている子どもが多い。日頃から「勉強を頑張れ」と言われることや努力の結果が数値化されることが多く、自己評価しやすいということに関係しているからだろう。

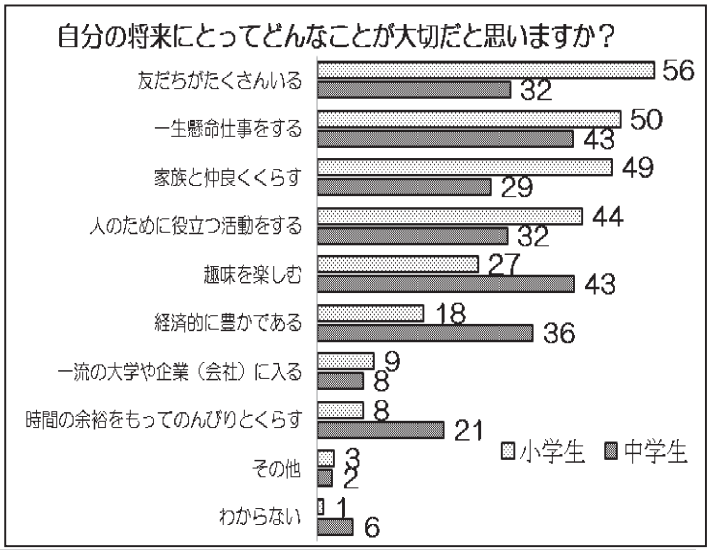
小学生は生活態度をほめられたいと思い、中学生は性格など自分の内面について目を向けてほしいと思っているのは、発達に伴う変化だと言える。また、中学生で「服装のセンスや容姿」を16％の子どもがあげているが、これも発達に伴う変化だろう。

③将来の自分、大切なものは何か

Ｑ11　自分の将来を考えるとき、
どんなことが大切だと思いますか？

小学生は「友だち」「家族」など人と人とのつながりを重視する傾向が見られる。それに対し、中学生では「趣味」「お金」などをあげる子が多かった。

「一生懸命仕事をする」「人のために役立つ活動をする」が多くの子どもに選ばれている一方、「一流の大学や企業(会社)に入る」ことを選んだ子どもは10％以下であった。



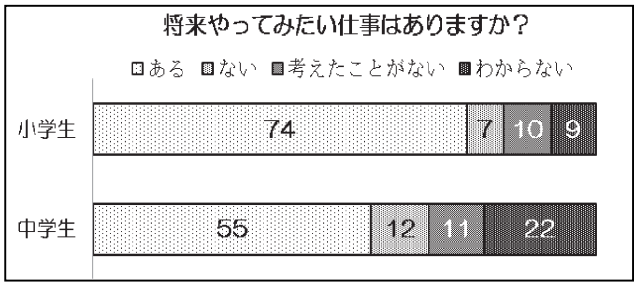
キャリア教育の影響？

小中学生とも「一生懸命仕事をする」が上位にあるのは、キャリア教育の影響が大きいと推測される。特に、中学生においては調査をした時期が職場体験活動などの終了した時期と重なったことも関係していると考えられる。キャリア教育が子どもの自己実現や価値観に対して影響を与えていることがうかがえる。趣味を大事にすることなども「生き方指導」と関係しているのではないか。「一流の大学や企業に入る」ことより「一生懸命仕事をする」や「人の役に立つ活動をする」を選んだ子どもが多いという結果は、この時点での子どもたちの価値傾向として受けとめていいだろう。今後、具体的な職業選択の場面では、この傾向が変わることが予想される。

Q12　将来、やってみたい仕事はありますか？

「将来やってみたい仕事」に対して20%を超える中学生が「わからない」と答えている。自由記述に見られる、小学生の「やってみたい職業」がテレビドラマやアニメの影響を受けながら、実現可能性についてはあまり深く考えず「夢」としてあたるのに対し、将来の職業選択を現実的な課題として捉え始めていることがうかがえる。

（巻末：「将来やってみたい仕事」（自由記述）参照）



将来やってみたい仕事（自由記述から）

将来やってみたい仕事として自由記述されたものについて幾つか注目すべきことがある。

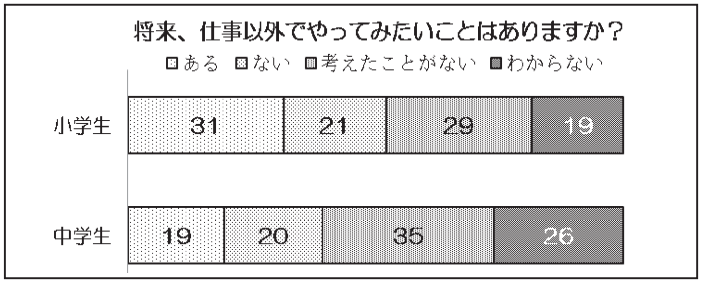
小学生の回答数 408 に比べ、比べ中学生では 267 とおよそ 2/3 に減っている。「考えたことがない」と答えた中学生 11%の中には、「夢のような希望」として「やってみたい職業」をあげることができなくなった子どもも多く含まれているのではないか。また、「わからない」と答えた 22%の子どもについても、同じことが言えるのではないか。

「〇〇に関係した仕事」という回答が、小学生６人（回答者の２%）に対し中学生では 42 人（回答者の 16%）と増えている。ストレートに「なりたい仕事」をあげる小学生に対し、夢と実現可能性の間で揺れる中学生の気持ちが「〇〇に関係した仕事」という答え方をさせていると考える。自分の「夢」をあきらめず「どこかでつながっていたい」という願いが見てとれる。

「家業を継ぐ」という答えは、小中学生とも数人だった。「家業」が子どもたちの前から消えつつあるということだろう。

Q13　将来、仕事以外で（趣味やボランティアなど）やってみたいことがありますか？

小学生の回答では、「ある」31%、「考えたことがない」29%、「ない」21%の順であった。中学生は「考えたことがない」35%、「わからない」26%、「ない」20%となっている。回答が分散したのは、まだ、趣味やボランティアに具体的なイメージが描けないためと考えられる。「ある」と答えた、小学生の内容を見ても「ごみ拾い」などの奉仕作業、「手話」などの福祉活動、「海外旅行」など広く分散していた。



column

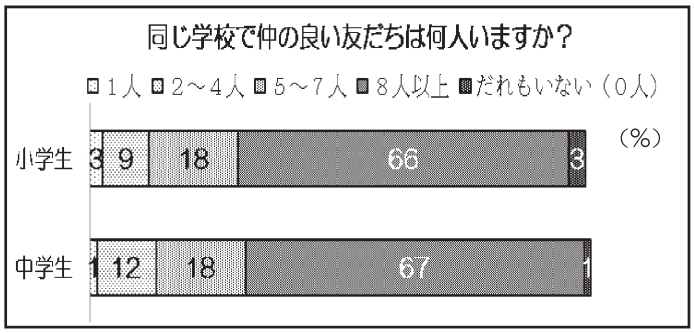
やってみたい仕事として「学校の先生」をあげた子どもは、小学生で５名(1%)、中学生で 10 名(4%)であった。（ちなみに全国調査では、「学校の先生」をあげたのは小学生男子 0.9%、女子 2.2%、中学生男子 1.6%、女子 1.8%、高校生男子 4.7%、女子 5.1%：ベネッセ第２回生活実態調査）小学生にとって教員という仕事は「そんなにも魅力がない」ものなのだろうか？ 子どもたちが人と接する仕事を嫌っているのではないことは、保育士を希望する数が多いことでわかる。地域や家庭で、教員という職業についての憧れや希望が語られることがないということだろうか。この数字が「学校」や「学ぶ」ということに対する「冷ややかさ」につながるものでないことを願いたい。

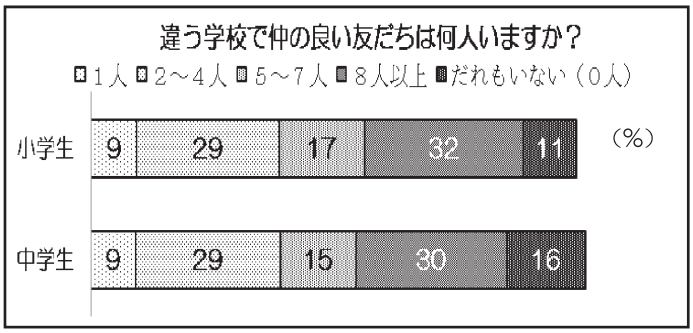
ある小学校の高学年を担任する教員が、児童から「私は先生になりたいと思っていたけど、先生って忙しいからやめた」と言われたという。帰りの会が終わると追いたてるようにして子どもたちを下校させて会議に向かう。昼休みや放課後に一緒に遊んだり、ゆっくりおしゃべりしたりすることもできない。そんな教員の姿は、子どもたちの目に「先生って忙しいから…」と映るのだろうか…。

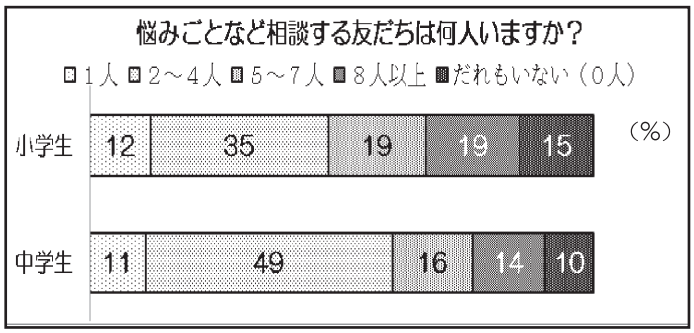
（２）あなたの友だちのことを教えてください…話したいこと、友人関係の維持

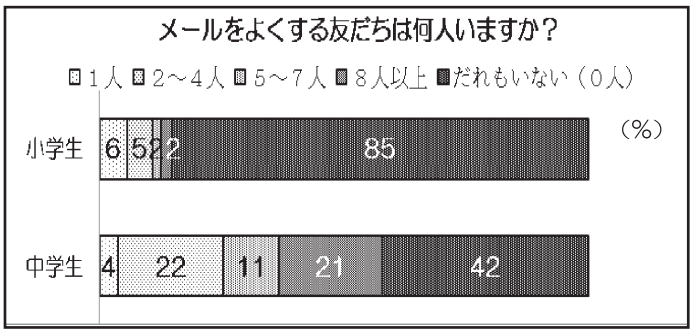
①仲の良い友だち、悩みごとを相談できる友だち

Q14　あなたは次のような友だちは何人くらいいますか？
①　同じ学校で仲の良い友だち　　②　違う学校で仲の良い友だち
③　なやみごとなど相談できる友だち　　④　メールをよくする友だち









仲の良い友だちは８人以上、悩みを相談できる友だちは２～４人

小中学生とも、同じ学校で仲の良い友だちの人数は８人以上と答えた子どもが 66%を超えている。一方、友だちの数を０人と答えた子どもが小学生で３%、中学生で１%いた。

違う学校に通っている仲の良い友だちについても、多くの子どもが「２人以上いる」と答えている。他校の子どもと仲良くなるきっかけとしては、部活(スポーツ少年団)や学習塾などが考えられる。

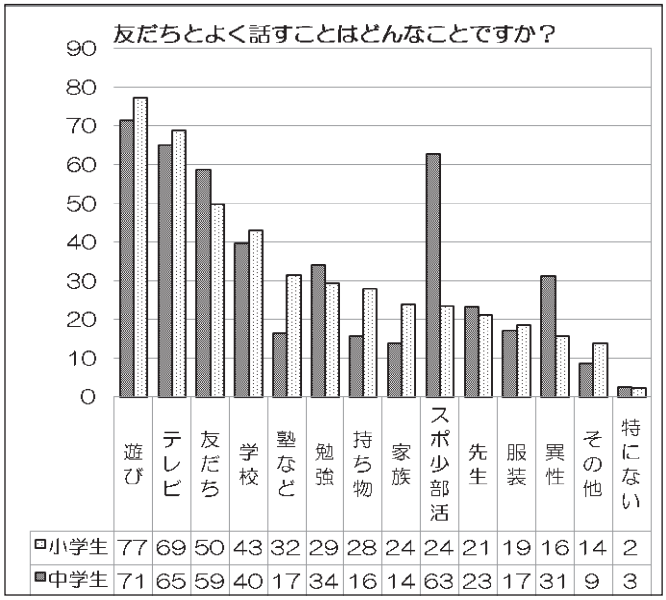
悩みごとを相談できる友だちの数については、小中学生とも２～４人を選択した子どもが多く、「仲の良い友だち」の数に比べるとかなり絞り込まれている。また、中学生においてその傾向は強くなっている。「悩みごとを相談できる友だちがいない」と答えた子どもが、小学生で 15%と中学生の 10%を上回った。「悩みを相談する友だちがいない」子どもが相当数いることは心に留めておく必要がある。

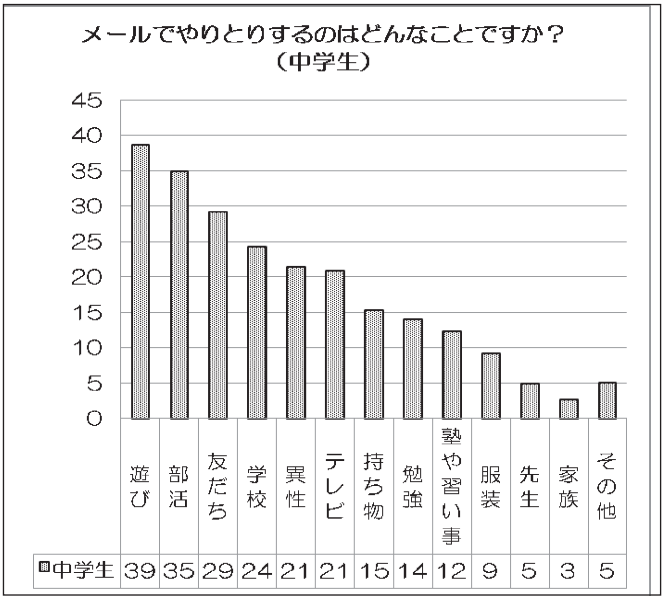
メールをよくする友だちについては、小学校の場合「だれもいない・メールをしない」が 80%を超えている。これは、小学生の携帯電話の所持率の低さによる。

中学生においても 42%の子どもが「だれもいない・メールをしない」と回答している。これを除いた回答を見ると、１人が 4%、２～４人が 22%、５～７人が 11%、８人以上が 21%となっている。それほど顕著ではないが、分散のピークが２つあることは携帯電話の利用の二極化につながるものと考えられる。

②友だちとよく話すこと

Q15　あなたが友だちとよく話すこと(直接会って話すこと)はどのようなことですか？
Q16　友だちとメールでやりとりするのはどのようなことですか？
Q17　友だちに話したくても話せないことがありますか？



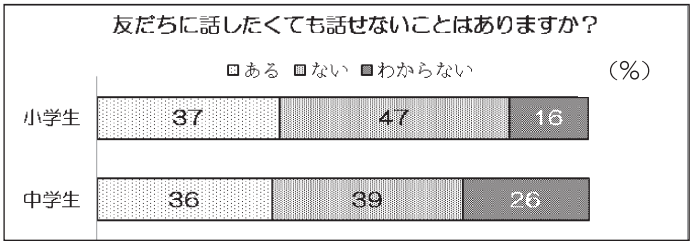


遊び、テレビ、友だちのことなどよく話すが、話したくても話せないこともある

中学生で部活動や異性についての話題が多いことを除くと、友だちとの話題は小中学生とも似たような傾向が見られる。中学校生活の中で部活動が大きな位置を占めていることがわかる。異性についての話題は、中学生が小学生のおよそ２倍の数字となっているのは発達段階によるものと言える。

顔を合わせて話をする内容とメールでやりとりする内容を、メールを使っている中学生について(小学生はメールをする数が少ないので比較できない)比べると、「先生のこと」「テレビのこと」「家族のこと」などについては、顔を合わせて話すことが多く、「塾のこと」「家族のこと」などについてはメールでやりとりすることが多かった。

「友だちに話したくても話せない」ことは「ない」と答えた子どもは小学生で47%、中学生で39%であった。過半数の子どもが、友だちと話したいが、話せないということを抱えている。



日常的な友人関係のメンテナンスは軽い話題で

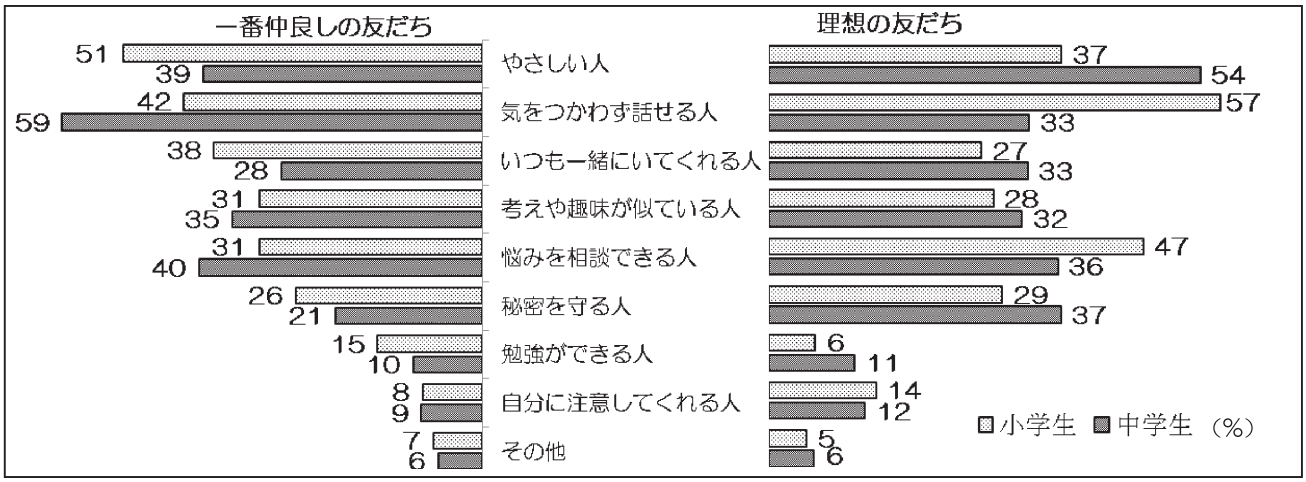
小中学生ともよく話すこととして「遊びのこと」「テレビのこと」が上位を占めている。「遊び」や「テレビ」など自我関与などを必要としない、話しやすい軽い話題が多く取り上げられることは当然のことと言える。話しやすい軽い話題は、普段交わす挨拶に似て、友人関係の確認であったり、ちょっとした関係の歪みを修整したり、友人関係のメンテナンスという役割を果たしていると考えられる。子どもたちにとっては、軽い話題で繰り返し会話を交わすことが友人関係の維持に重要な意味をもっているのではないか。

顔を合わせて話すことと、メールでやりとりすることの内容を比べると、比較的軽い内容についてメールでやりとりされている。子どもたちが話題によってコミュニケーションの手段を使い分けていることがうかがえる。

小学生で37%、中学生で36%の子どもが「友だちに話したくても話せないことがある」と答えている。今回の調査では「話したくても話せない」ことの具体的な内容については聞かなかったが、「遊び」や「テレビ」のことに比べ深刻な話題であることは想像できる。友人関係における自我関与の葛藤はすでに小学生の頃から始まっている。

③仲良しの友だち、仲良しになりたい友だち

Q18　今、一番仲良しの友だちはどんな人ですか？
Q19　どんな人と友だちになりたいと思いますか？



仲良しの友だちは「優しくて気を遣わない人」
理想の友だちは「気をつかわずに話せて、悩みを相談できる人」

仲良しの友だちについては、小学生が「優しい人」「気をつかわない人」「一緒に行動してくれる人」を上位にあげたのに対し中学生は「気をつかわない人」「悩みを相談できる人」「優しい人」の順だった。

仲良しになりたい友だち(理想の友だち)の割合が実際の友だち(今、１番仲良しの友だち)を上回ったものは、小学生では「気をつかわない人」「悩みを相談できる人」など、中学生では「秘密を守る人」「悩みを相談できる人」などである。小中学生が共に重視しているものと考えられるが、理想とする友だちと実際の友だちには若干の差異があり、その差異には実際の友だちへの不満も見え隠れする。

仲良しになりたい友だち(理想の友だち)については、「悩みの相談ができる」「忠告してくれる」など自我関与にかかわる項目をあげている子の割合が大きくなっている。また、「秘密を守る人」が友だちとして深いかかわりをもつための条件となっていることがうかがえる。

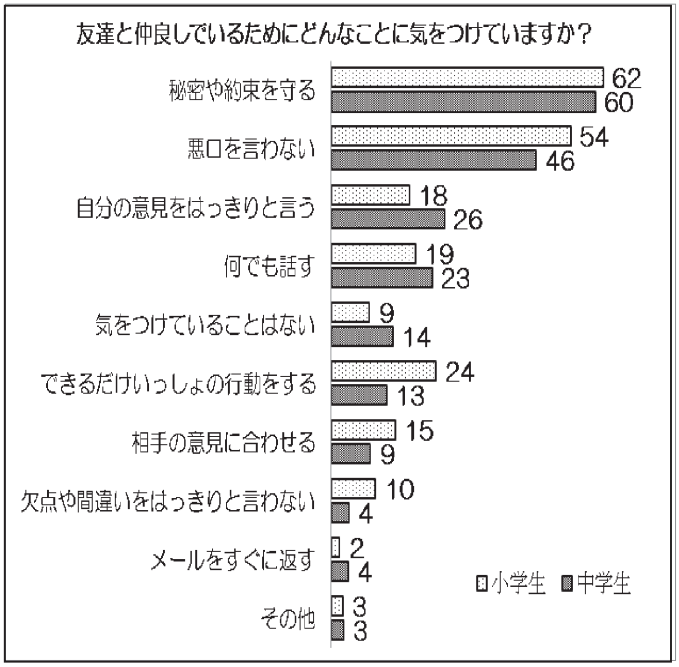
④友人関係を続けるために(友人関係のメンテナンス)

Q20　友だちと仲良しでいるために、どのようなことに気をつけていますか？

秘密や約束を守る、悪口を言わない…が基本。
中学生では自分を主張することも大事

友人関係を維持するために気をつけていることとして、小中学生とも「秘密や約束を守る」「悪口を言わない」が上位にあげられた。これらは友人関係だけでなく人間関係を築く上で基本的なことだと言える。

それに続いて、小学生では「できるだけ一緒に行動する」ことが多いが、中学生では「自分の意見をはっきりと言う」ことを26%の子どもがあげている。そのほか小学生と中学生の違いは、「相手の意見に合わせる」「欠点や間違いを指摘しない」を選んだ子どもが小学生に多かったのに対し、中学生は「何でも話す」「気をつけていることはない」を選んだ子が多い。



子どもたちは自我関与を避けているのか？

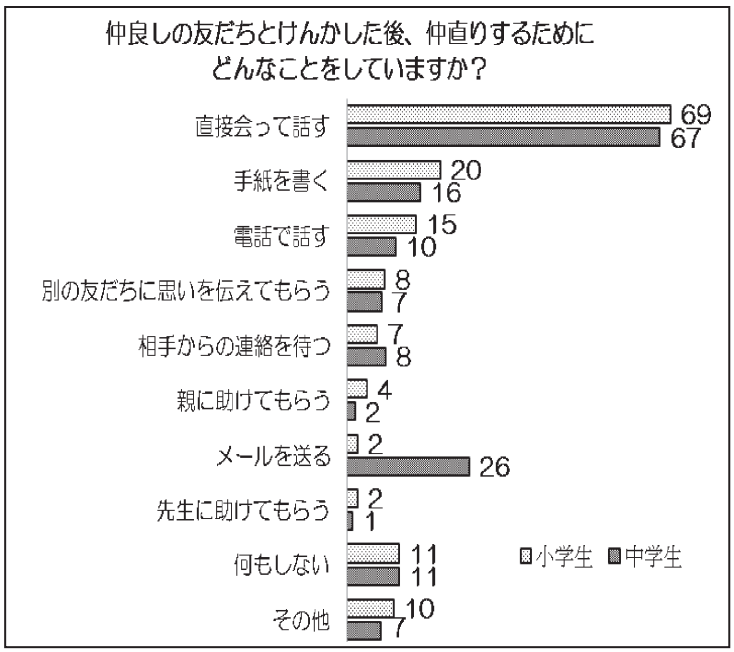
友人関係のトラブルを避けるために、「子どもたちは自我関与を避け一定の距離をおいた人間関係をつくろうとしている」という言説がある。 また、 友人関係を維持するためにメールにはすぐ返信するという暗黙のルール（15分ルール）が形成されているということもいわれている。「相手の意見に合わせる」「欠点や間違いを指摘しない」「自分の意見をはっきりと言う」「メールをすぐに返す」 等の質問に対する回答の傾向から子どもたちの人間関係づくりのベースにあるものについて検討した。

「相手の意見に合わせる」については小学生で 15%、 中学生では 9%、「欠点や間違いを指摘しない」についても小学生 10%、中学生 4%と、「自分の意見をはっきり言う（小学生 18%、中学生 26%）」を大きく下回った。また、「メールをすぐに返す」ことをあげた子どもは、 中学生で 4%であった。

今回の調査からは、 子どもたちがトラブルを避けるために極端に自我関与を避けたり、 一定の距離をおいた友人関係をつくろうとしたりしているという結果は得られなかった。 むしろ、 自我の発達がすすむ中学生において自分の意見をはっきりと言ったり、 相手の間違いを指摘したり、 積極的に自我関与しながら友人関係をつくることをめざしている様子がうかがえた。 また、 メールの「15 分ルール」についてもそれを裏付けるようなデータは得られなかった。

子どもたちは、 友人関係を日常的にメンテナンスために気をつかってはいるが、トラブルを避けるために自我関与を避け一定の距離をおいたり、「空気を読む」ことに汲々として友人関係を歪めたりすることは、 流布されているほど多くない。 むしろお互いの人間性をぶつけ合わせながら友人関係を築こうとしている子どもたちの姿が見てとれる。

Q21　仲良しの友だちとけんかした後、仲直りをするためにどんなことをしますか？



友人関係の修復は「直接会って話す」

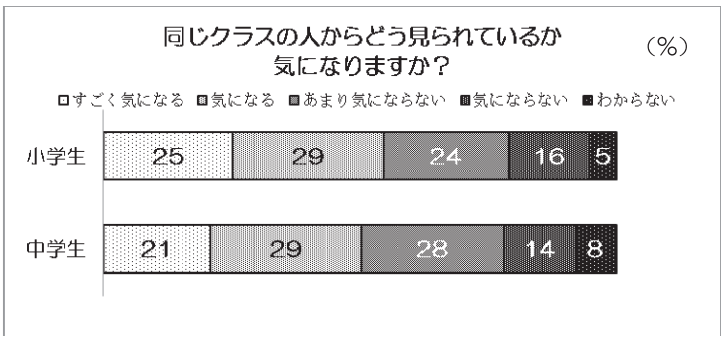
中学生が「メールを送る」（26%）を選んでいることを除くと、小学生も中学生も仲直りをするための行動は似ている。小中学生とも「直接会って話す」が群を抜いて多く、小学生 69%、中学生 67%であった。次に多かったのは「手紙を書く」だが、小学生 20%、中学生 16%と、「直接話す」に比べるとずっと少なくなっている。

第３者に仲介を求めるということを選んだ子どもは少なく、「親に助けてもらう」「別の友だちに思いを伝えてもらう」「先生に助けてもらう」はいずれも１割に満たなかった。「何もしない」と答えた子どもが、小中学生とも 11%を超えていた。

Q22　あなたは自分が同じクラスの人からどのように見られているか気になりますか？

気になる友だちの視線

小学生で 54%、中学生で 50%の子どもが、友だちの視線が「すごく気になる」「気になる」と答え、「あまり気にならない」「気にならない」と答えた数（小学生 40%、中学生 42%）を上回った。



「友だちの視線が気になる」ということを、どのように受けとめるべきなのか。友だちの視線は友人関係の維持だけでなく、社会的な価値観の形成とも関連している。

友だちの視線を気にすることはいけないことなのか

「友だちの視線を気にする」ということは、 自由な行動に対する制約としてはたらく。トラブルが生じないように人間関係（友人関係）を調整したり、思ったことを発言するこのをためらわさせたりする。 時には、視線に気づかなかったり、 それを受け入れなかったりすると、 集団から仲間はずれにされることもある。 一方、 他人の視線を無視して自分の思いのままに行動すると、 集団の規範やルールを無視した身勝手な振る舞いとして批判を受けることになる。 他人からの視線は、「自由」な言動に一定の制約を与えるが、 社会への適応という成長を促すという役割も果たしている。

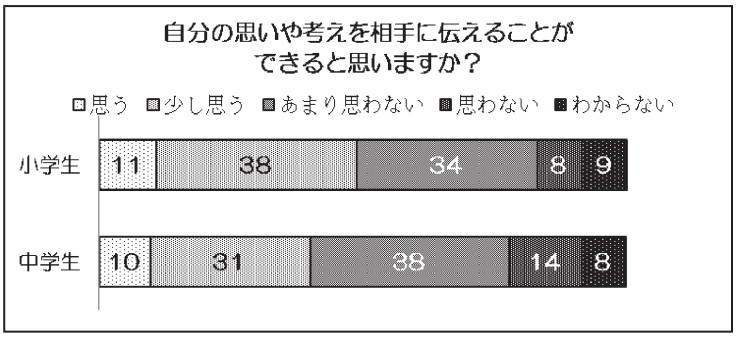
子どもたちは教室という社会で、 さまざまな人間関係を体験することによって、 自分以外の人たちとどういうふうにかかわり合いながら生きていったらいいかということを学ぶ。「友だちの視線を気にする」ことは「善し悪し」で判断すべきことではないと考える。 問題は気にすべき視線は何か、 気にする必要のない視線は何かを判断することだと思う。

気にすべき視線かどうかの判断は難しい。 友だち（ 社会 ）とのかかわり方を学んでいる途中の子どもに、 その判断をすべて任せることには無理がある。 その子に向けられている視線がどのようなものかを読み取り、 判断を助けるのは保護者や教員など大人の役目だろう。

（3）クラスや授業中のあなたのことを教えてください…周りと自分

①自己表現、学級や生徒会(児童会)の役員への参加

Q23　あなたは、自分が思っていることや考えを相手にうまく伝えることができると思いますか？



自分のことをうまく伝えることができると思っている人は約半数

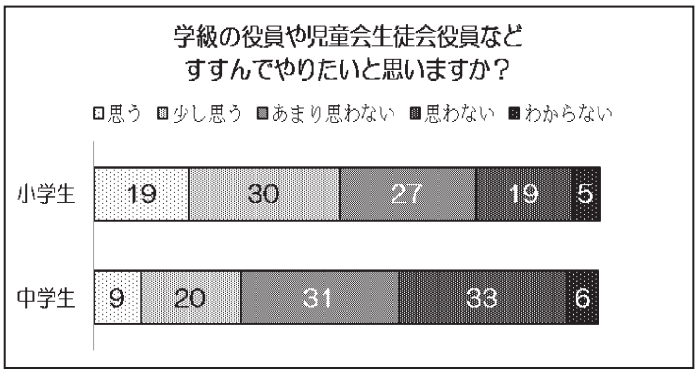
小中学生とも「思う」「少し思う」と「あまり思わない」「思わない」と答えた子どもは、ほぼ同じであった。多くの子どもが「自分のことを相手に伝えることは大切だ」(Q26①)と思っていても、いざ自分の行動としてできているかの自己評価では、半数ほどになってしまう。

中学生になると「思う」「少し思う」の割合が８％ほど下がるのは、周りの反応や相手の立場を考えたり、伝えたいことが複雑になったりすることによるものと考えられる。

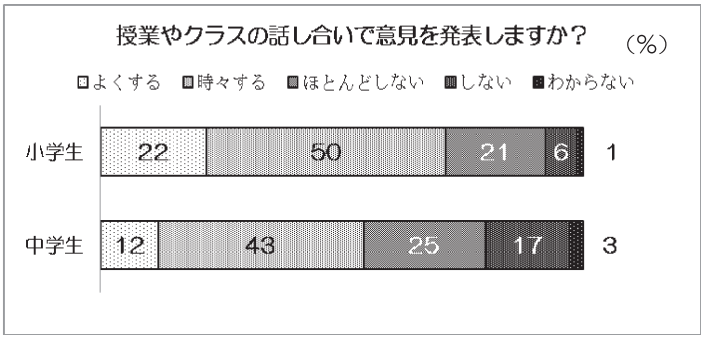
Q24　あなたは学級の役員（学級委員）や児童会や生徒会の役員をすすんでやりたいと思いますか？

学級の役員や児童会の役員に積極的な小学生

小学生の 49％が学級や児童会の役員をすすんでやりたいと「思う」「少し思う」と答え、「あまり思わない」「思わない」(46％)を上回った。中学生では逆に「思う」「少し思う」が 29％に対し「あまり思わない」「思わない」が 64％と大きく上回った。中学生の調査結果に見られる自治的活動への意欲の後退は、勉強や部活など「自分のこと」への意識が強くなったことも原因の１つとして考えられるのではないか。



Q25　あなたは授業やクラスでの話し合いなどで、反対意見を発表(発言)しますか？



自分の考えをストレートに表現する小学生、相手の立場を考える中学生

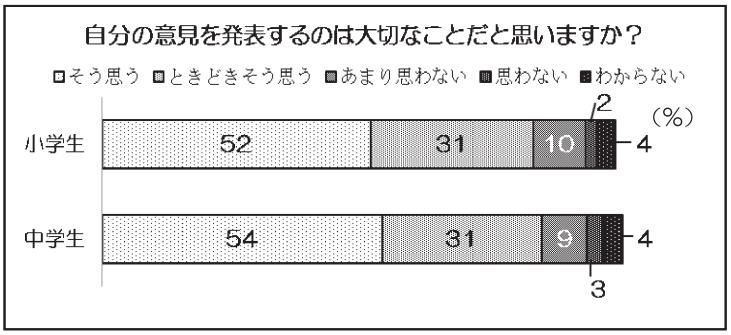
反対意見を「よく発表する」「時々発表する」と答えた小学生は72%だが、中学生になると55%と下がる。思ったことをストレートに表現する小学生に対し、中学生になると自分の発言に対し意見を言われた相手はどう思うだろう、「周りはどう思うだろう」といったことを考えるようになるのではないか。

予想より高かった「よく発表する」「時々発表する」という答え

小中学生とも「よく発表する」「時々発表する」と答えた割合は「高い」という感想をもって受けとめた。特に、中学生の55%という数字は、調査前に予想した数字を上回る結果だった。小中学校での授業改善のとりくみがすすみ「話し合い活動を通した問題解決をめざす授業が実践され、子どもたちに発言や発表を求める機会が増えていることも、高い数値につながったと考えられる。

②意見を発表することに対する意識

Q26　授業やクラスでの話し合いなどで意見を発表することについて、どのように思いますか？
①　自分の意見を言うことは大切なことだと思いますか？



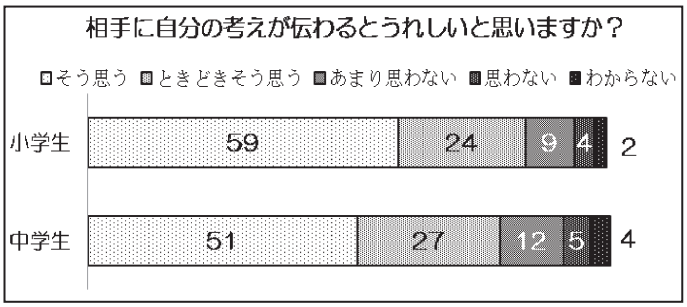
自分の意見を発表することは大切なこと

80%を超える小中学生が、自分の意見を発表することに積極的な姿勢を示している。「そう思う」を選択した中学生は54%、小学生で52%、逆に「思わない」と答えた子どもは中学生で3%、小学生で2%と若干ではあるが中学生に前向きな回答が多かった。

Q26…②　相手に自分の考えが伝わるとうれしいと思いますか？

相手に自分の考えが伝わるとうれしい

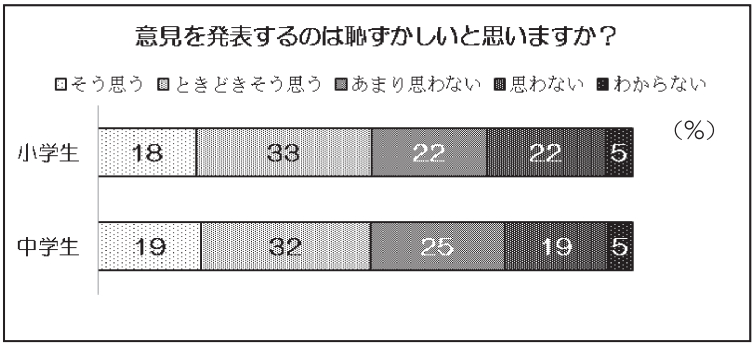
Q26①の結果からも予想されることであったが、小学生の83%、中学生の78%が「そう思う」「ときどきそう思う」と答えている。自分の気持ちや考えが相手に伝わることはコミュニケーションの最も基本的な目的であり、それが達成されたとき「うれしい」という感情を抱くことはごく自然なことだと言える。



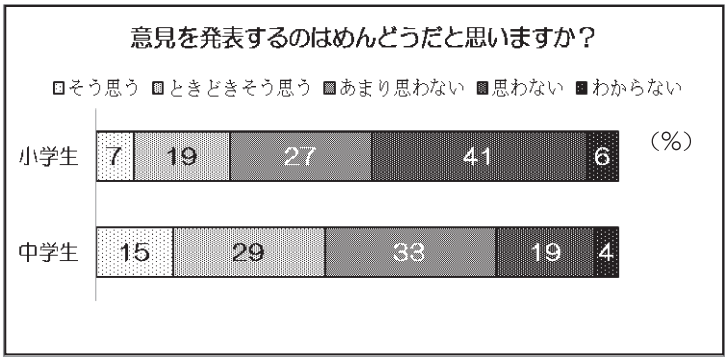
Q26…③　意見を発表するのは恥ずかしいと思いますか？

意見を発表するのは少し恥ずかしい

意見を発表することに対し、小学生より中学生に「恥ずかしい」という意識が強いのではないか、と予想していたがそのような傾向は認められなかった。恥ずかしいという気持ちは、自分の意見が「正しいかどうか」(Q26⑤)ということと関係していると考えられる。



Q26…④　意見を発表するのはめんどうだと思いますか？

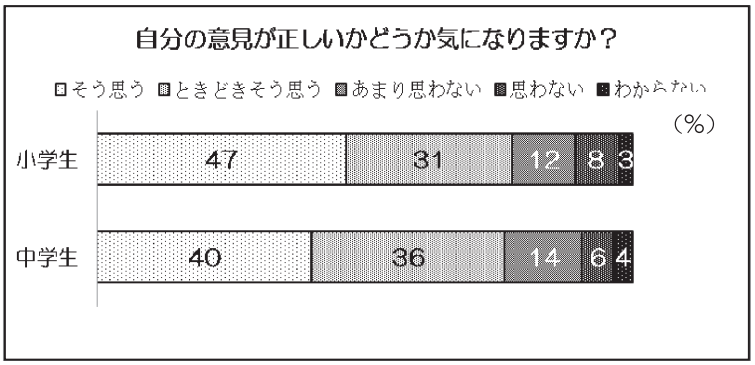


過半数の子どもが、意見を発表するのは「めんどう」とは思っていないが…

意見を発表することが「めんどう」だと感じている小学生は26%程度に対し、中学生では44%と多くなる。この数字を多いと捉えるか、「めんどうと感じていない子どもが50%以上いる」と捉えるかについては意見が分かれるところだろう。

Q26…⑤　自分の意見が正しいかどうか気になりますか？

自分の意見が正しいかどうか、70%以上の子どもが気にしている



授業中の話し合いは「正解」を導き出すことを「目的」として行われるのだから、自分の意見が「正しいかどうか気になる」のは当然の感情だと思う。「正しい」という結果にかかわらずに自分の考えを述べることを肯定する「思わない」「あまり思わない」という答えが小学生、中学生ともに20%であった。「間違えることを気にしない」と答えた子どもが2割いることを積極的に捉えたい。

間違っていてもいい、自分の意見を言うことが大事なことという意識

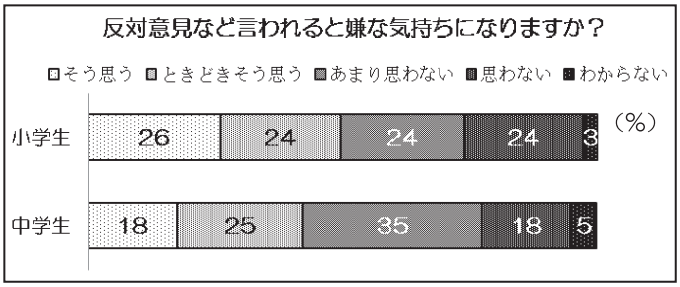
子どもたちは、意見を発表することに恥ずかしさを感じながらも「自分の意見を発表することは大切なこと」という意識をもっている。この意識は調査結果Q26①の結果に見られるように、小中学生ともにかなり根付いていると判断できる。

授業やクラスの話し合いの場面では「自分の考えを発表し、話し合いに参加する」ことの大切さが指導され、話し合い活動を通した問題解決的な学習場面の工夫や「間違えることを気にせず、学び合いに参加する」という普段の授業づくりなど、指導法改善の努力の積み重ねが子どもたちの意識形成に大きくかかわっているものと考えられる。

Q26…⑥　反対意見など言われると嫌な気持ちになりますか？

反対意見を言われることはあまり嫌なことではない

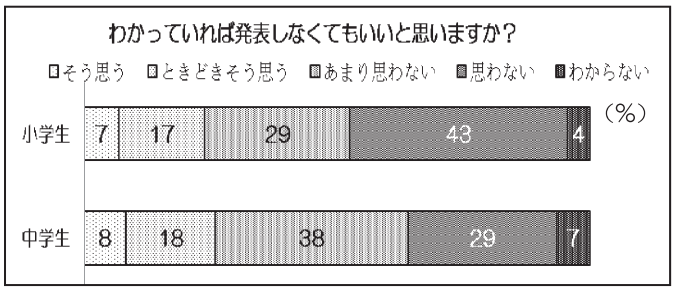
反対意見を言われるのが「嫌だと思う」子どもも、「嫌だと思わない」子どももほとんど同じ割合であった。「嫌だと思う」子どもが多いだろうという調査をする前の予想が外れた。また、中学生において「嫌だと思わない」子どもが「嫌だと思う」子どもを若干ではあるが上回ったことも、予想に反した結果だった。「間違っていてもいい、自分の意見を言うことは大事なこと」という指導の成果がこのような数字に表れているのではないか。



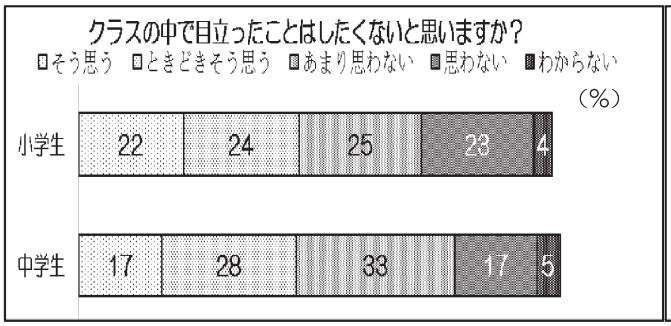
Q26…⑦　自分が分かっていればいいので発表しなくてもいいと思いますか？

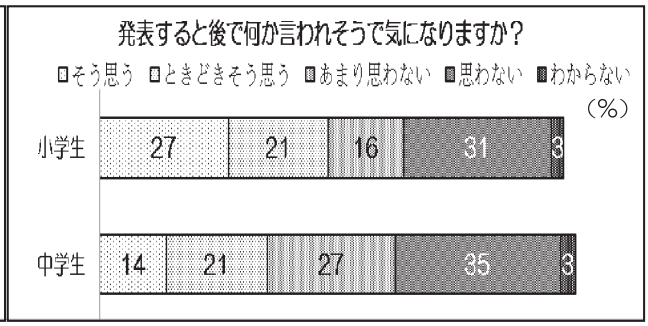
自分が分かっていればいいので発表しないという子は少数

小中学生とも「自分が分かっていればいいので発表しない？」の問いに「そう思う」「ときどきそう思う」と答えた子どもはおよそ 25％であるのに対し、「あまり思わない」「思わない」と答えた子どもは 45％を超えている。中学生になれば「自分が分かっていれば…」という意識が強くなることを予想していたが、むしろ中学生になると「自分が分かっていればいいので発表しない」を選択した子どもが少なくなるという傾向が見られた。



Q26…⑧　クラスの中で目立ったことはしたくないと思いますか？
　　⑨　発表すると、後で何か言われないかと気になりますか？





授業中の発表について何か言われることは、あまり気にしない

「目立ったことはしたくない」と答えた子どもと「そう思わない」と答えた子どもがほぼ同数であった。特に、中学生において「そう思わない」と答えた子どもが小学生の数値を上回っていた。

発表したことに対し「後で何か言われる」ことを気にする子どもは、小学生では Q26⑧と同様の傾向を示しているが、中学生では「気にしない(62%)」と答えた子どもが「気にする(35%)」と答えた子どもを大きく上回った。

授業中や学級の中の話し合いでは「空気を読む」ことにとらわれていない

子どもたちが「自我関与を避けたり、一定の距離を保ちながら友人関係を維持したりすることによって『空気を読みながら』人間関係のトラブルを避ける」という言説により、「浮かないように、目立つことを避ける」ことが強く意識されていると予測していたが、調査結果「そう言いきれない」ことを示している。「目立ったことはしたくない」と答えた子どもも「そう思わない」と答えた子どももほぼ同数であった。特に、中学生において「そう思わない」と答えた子どもが小学生の数値を上回ったことは、予想外の結果であった。「目立ったことはしたくない？」という問ではなく「目立つことを気にしない」という問であったら、さらに「目立つことを気にしない」に傾いた結果になることも考えられる。

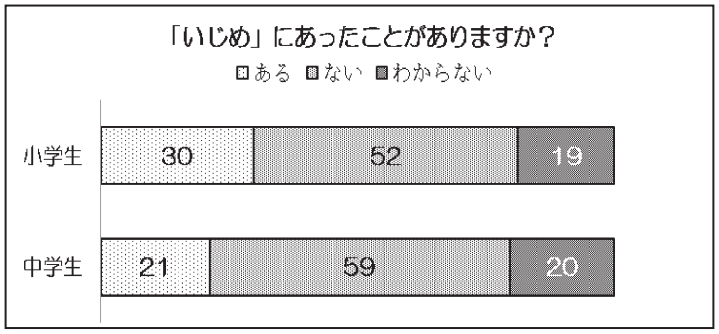
この傾向は、Q26⑨に対する回答結果では更に明らかである。友人関係がますます微妙になる中学生において「後で何か言われる」ことを気にする子どもが減っていることは注目すべきことだと考える。

授業中や学級の話し合いは「意見を交換」することも目的の一つと位置づけられ、教員という第三者が常に介在している。このような場面の結果を、子どもたちの人間関係（友人関係）全体に当てはめて考えることはできないと思うが、少なくとも授業や学級での話し合いの場では、子どもたちは「空気を読む」ことにとらわれず、自分の考えを述べ合うことが保障されていると言えるだろう。

（4）「いじめ」について教えてください

①「いじめ」にあった経験や、「いじめ」への不安

Q27　あなたは「いじめ」にあったことがありますか？

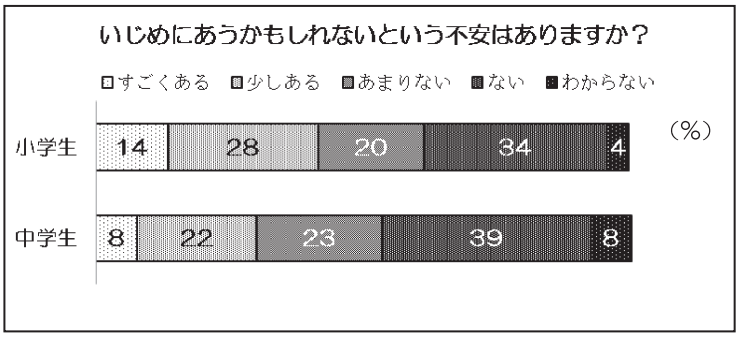


「いじめ」にあったことがある…２割超

小学生の 30%、中学生では 21%の子どもが「いじめ」を受けたことがあると答えている。また、「わからない」と答えた小学生は 19%、中学生は 20%だった。質問の中に「いじめ」についての定義がなかったので多少の揺れが含まれていると思うが、かなり高い数値だと言えるのではないか。

Q28　今、自分が「いじめ」にあうかもしれないという不安や心配がありますか？

小学生に多い「いじめ」にあうかもしれないという不安

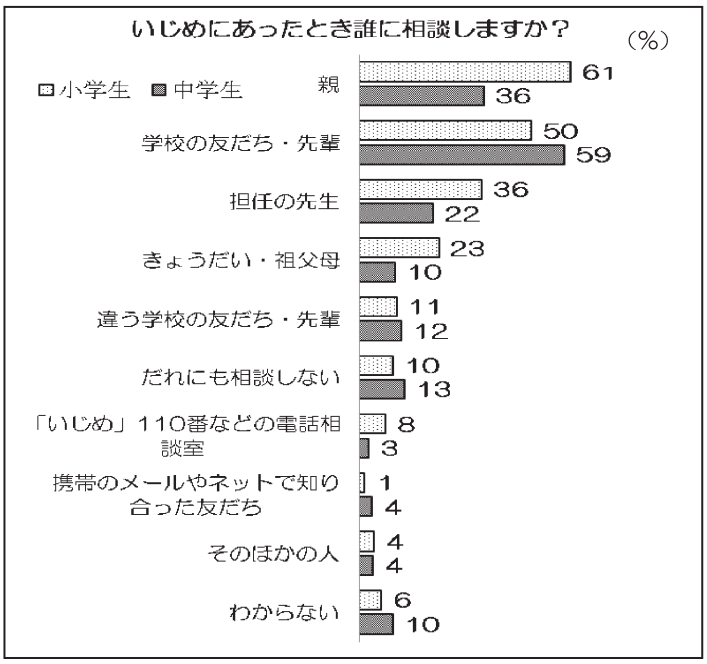


「いじめ」にあうかもしれないという不安をもっている小学生は 42%、中学生は 30%だった。これは、Q27 で「いじめ」にあったことがあると答えた数を 10%近く上回っている。小学生に比べ中学生の数値が下がっている理由として、「いじめをしてはいけない」といった指導が定着していったことや、自分で「いじめ」を回避することができるようになったことが原因として考えられる。

「いじめ」にあった経験のある子どもについてはもっと高い数値を示すことが考えられるが、その分析についてはクロス集計結果の分析の項にゆずる。

②「いじめ」にあった時の相談相手

Q29　あなたは「いじめ」にあったとき誰に相談しますか？



「いじめ」にあった時の相談相手は、
友だち、親、担任の先生、親以外の家族

相談相手として最も多く選ばれたのは「友だち」で、小学生の50%、中学生の59%が選んでいる。中学生で「友だち」を選んだ数が増えているのは、友人関係が単なる仲良しから、悩みなど相談できる関係に深まっていることをうかがわせる。逆に、中学生に比べ小学生が多く選んだのは、親(25%)、担任(14%)、親以外の家族(13%)であった。

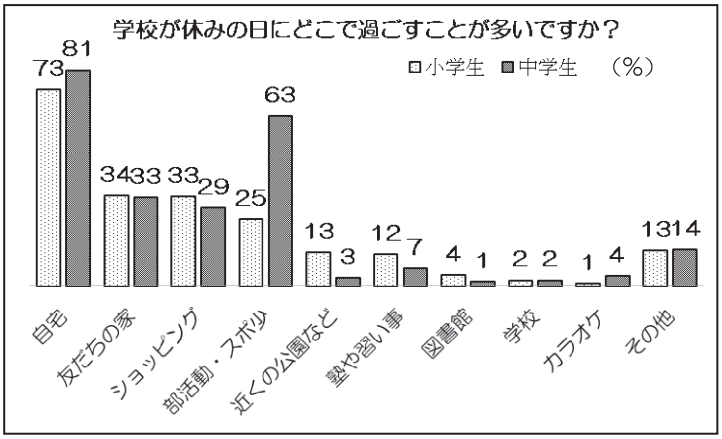
相談相手の選択数は自由としたが、小学生、中学生とも１つを選択した子どもが最も多かった。２つ以内を選択した子どもは小学生で66%、中学生で79%になっている。「いじめ」のような深刻な問題を相談する相手はごく限られたものであることがわかる。

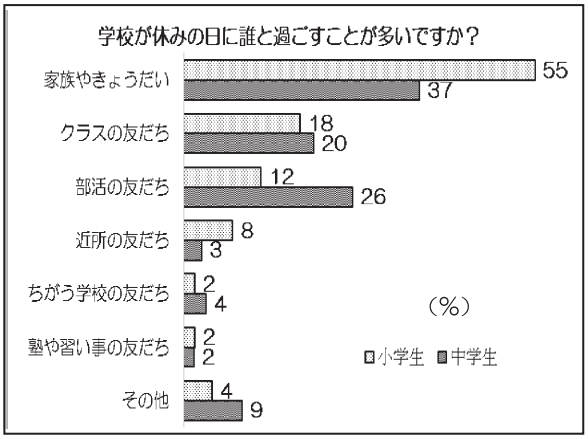
「誰にも相談しない」を選んだ子どもが小学生で10%、中学生で13%いる。相談できる友だちがいないのか、それとも相談せずに自分で解決しようとしているのか、今回の調査からは明らかにすることはできなかった。指導に当たるとき「誰にも相談しない」子どもが１割以上いることを常に押さえておくことが必要だろう。

(５)学校生活以外のことについて教えてください

①休日の過ごし方

Q30　あなたは学校が休みの日にどこで過ごすことが多いですか？
Q31　あなたは学校が休みの日に誰と過ごすことが多いですか？





休日の過ごし方、最も多いのは「自宅で家族と過ごす」

休日に過ごす場所として、小学生の７割、中学生の８割が自宅をあげている。また、中学生の６割以上が学校(部活)をあげている。

休日に一緒に過ごすことが多い人については、小学生は家族(55%)、クラスの友だち(18%)、スポ少や部活の友だち(12%)、近所の友だち(8%)の順で、中学生では家族(37%)、スポ少や部活の友だち(26%)、クラスの友だち(20%)となっている。

Q33　あなたは学校が休みの日、何をして過ごすことが多いですか？

休日に何をして過ごすかについて、自由記述で回答を求めた。小学生 233、中学生 159 の回答があった(詳細は巻末の表)。小学生では「遊ぶ」「ゲームをする」「スポーツをする(スポ少を含む)」「宿題や勉強(読書を含む)をする」という答えが回答数の 10%を超え、中学生では、「遊ぶ」「ゲームをする」「スポーツをする(部活を含む)」「ぼーっとする・寝る」という答えが回答数の 10%を超えていた。

男女差については、小中学生とも「ゲームをする」という回答は男子に多く見られた。「手伝いをする」という答えは、小学生で３、中学生で１あった。

戸外で遊ばなくなった子ども

子どもの遊びについて 1980 年に教育研究所が調査したレポートがある（ 所報『教研しずおか』№45：子どもの遊びの現状と対策 ）。当時、子どもたちが戸外（ 自然の中 ）で遊ばなくなってきていることを踏まえて実態調査が行われた。その中の「教員から見た子どもの放課後や休日の過ごし方」について次のような結果が報告されている

・よく戸外で遊んでいる…小学校 36.7%、中学校 12.9%
・戸外で姿を見かける…小学校 55.4%、中学校 58.2%
・ほとんど戸外で姿を見かけることがない…小学校 7.9%、中学校 29.9%

小学校を対象にした「季節にあわせて（ 子どもたちは ）自然の中に出ていますか」という項目については、次のような結果が示されている。

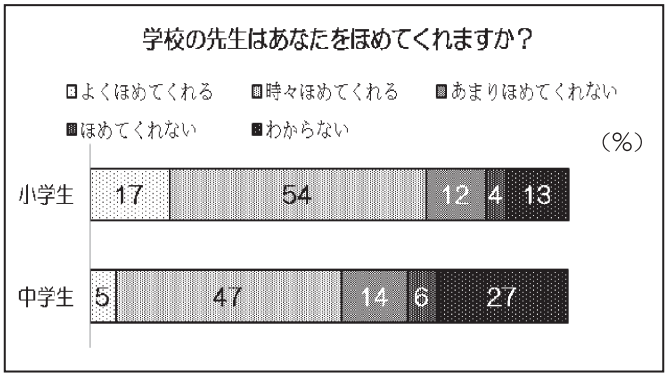
・自然の中にいる…13.2%
・低中学年の子どもはよく見かける…52.2%
・自然に触れることは少ない…34.6%

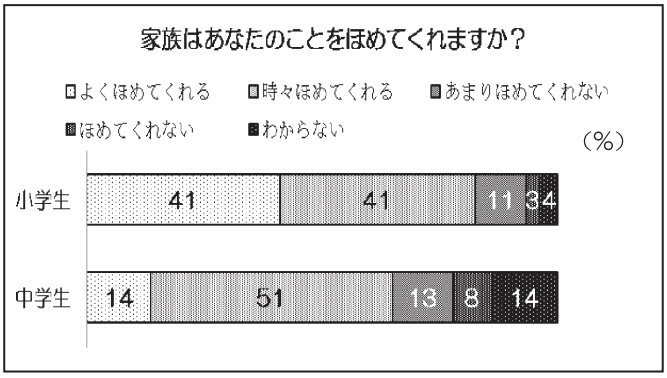
調査方法や調査項目も異なるので直接数字を比べることはできないが、30 年の間に子どもたちの放課後や休日の過ごし方は、大きく変わったと言える。また、1980 年６月の調査では「子どもたちがよく遊んでいる遊び」について、「ボールを用いた遊びが多く、ドッジボール・ポートボール・ソフトボール等、集団での遊びではあるが同年齢の子どもたちの遊びが多い。用具を使わずに遊ぶことが少なくなり、何かがないと遊べなかったり、物がなくて友だちが作れなかったりする現状があるようだ」と分析されている。

（6）あなたを支えてくれる人のことについて教えてください

①家族や先生

Q33　学校の先生はあなたのことをほめてくれますか？
Q34　家族はあなたのことをほめてくれますか？



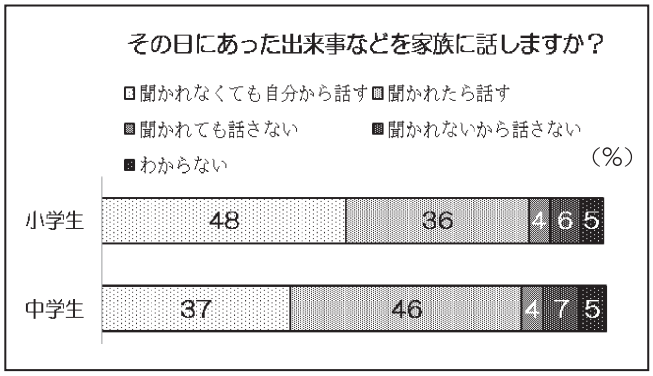


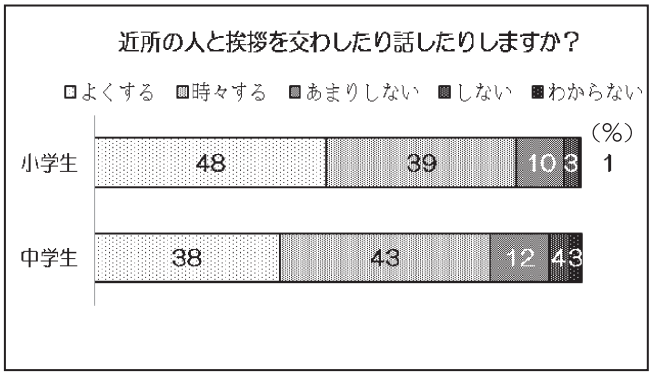
家族や学校の先生はよくほめてくれる

総数の 61%の子どもが学校の先生からほめられていると答え、73%の子どもが家族からほめられていると答えている。小学生と中学生の回答の差として、小学生が「よくほめてくれる」「ときどきほめてくれる」と答えた数が、それぞれの問いで中学生を上回った。また、中学生になると「わからない」と答えた数が増えていることがあげられる。

②家族や近所の人とのコミュニケーション

Q35　あなたはその日にあった出来事などを家族に話しますか？
Q36　あなたは近所の人と挨拶をしたり話したりしますか？





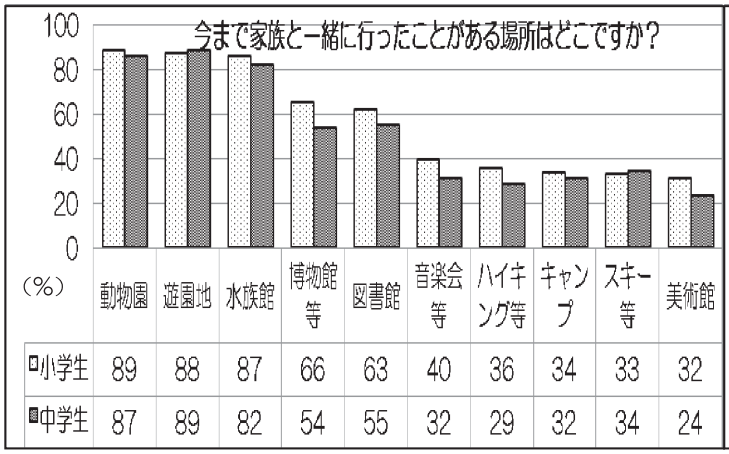
多くの子どもたちが、家族や近所の人とコミュニケーションしている

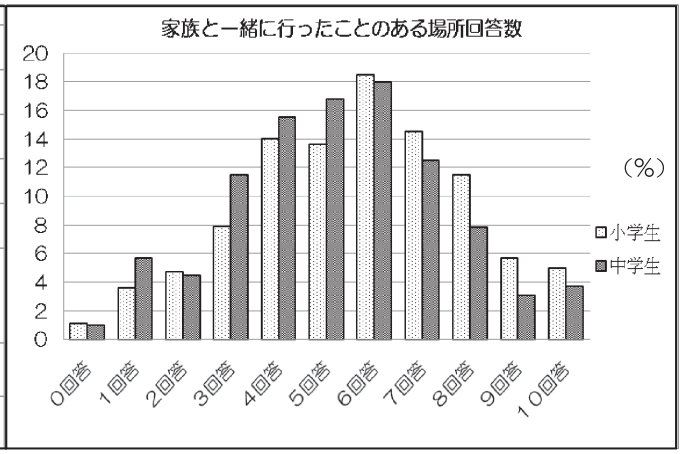
小学生で48%、中学生でも37%の子どもが、その日にあった出来事を家族に「聞かれなくても自分から話す」と答えている。「聞かれたら話す」と答えた子どもを加えると、小・中学生とも80%を超える子どもたちが、その日の出来事について家族とのコミュニケーションをもっている。コミュニケーションの内容がどのようなものか、コミュニケーションの時間はどれくらいかということは、今回の調査からは明らかにできなかったが、８割を超える子どもたちが家族との日常的なコミュニケーションを維持しているという結果は、調査前の予想を上回る結果であった。また、近所の人との挨拶や会話についても、家族とのコミュニケーションと同じような数字が示された。

中学生になると家族や近所の人とのコミュニケーションは大きく減ることを予想していたが、中学生で「よくする」を選択した割合が少なかったものの、「時々する」を加えると大きな差が認められなかった。

③家族と一緒に行ったところ

Q37　次の中で、今までに家族と一緒に行ったことがある場所はどこですか？





動物園・遊園地・水族館は８割を超えている。音楽会・キャンプ・美術館などは３割

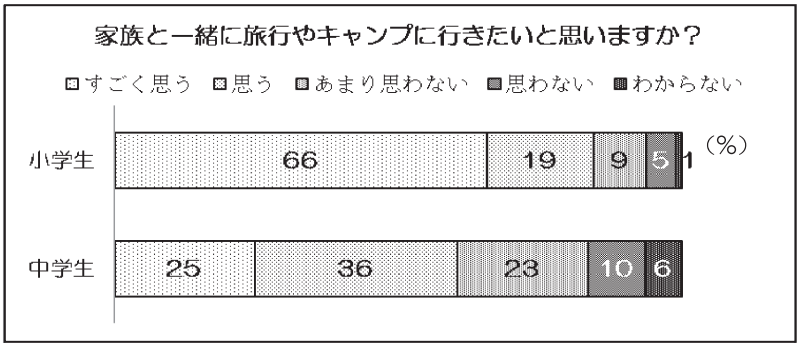
選択肢として、①行楽遊興の場所、②学校での勉強に関係する場所、③教養や趣味に関する場所から、動物園・水族館・遊園地、図書館・博物館・科学館、美術館・音楽会(コンサート)・スキーなどについて聞いた。その結果、①については80～90%、②については50～70%、③については30～40%という階層的な分散が見られた。

一人の選択数については、小中学生とも６個を選択した子どもが最も多く小学生で19%、中学生で18%いた。０(どこにも行ったことがない)を選択した子どもは小中学生とも１%であった。

Q38　あなたは家族と一緒に旅行やキャンプに行きたいと思いますか？

小学生の 85%が、家族と一緒に旅行やキャンプに行くことを希望している

85%の小学生が「旅行やキャンプに家族と一緒に行ってみたい」と答えているのに対し、中学生では 61%と減少する。中学生になると人間関係が、家族から友だちへと拡大している様子がうかがえる。特に「すごく思う」は 66%から 25%へと激減している。



動物園・博物館・美術館などに家族で出かけることは子どもへの教育的な投資？

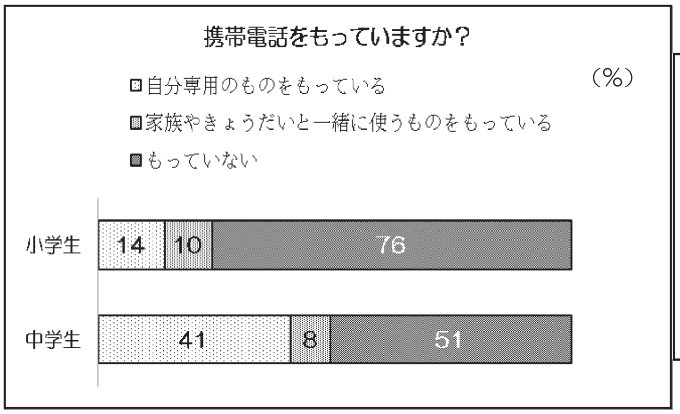
家族で動物園や博物館・美術館に行くことは、子どもへの教育的な投資と見ることもできる。このような子どもへの投資が子どもの自己肯定感の形成や、人間関係の拡張にどのような影響を与えているかについては、第２部でクロス集計結果の分析から見ていきたい。また、家族で一緒に動物園や博物館・美術館に行くことは、家庭の経済状況にも左右されると考えられるが、経済状況の指標とするには慎重な検討が必要だと思われる。

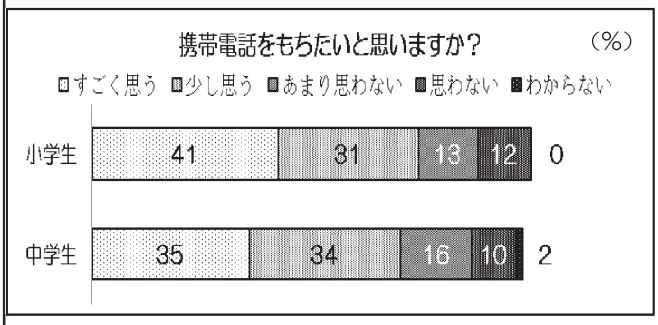
（7）携帯電話について教えてください

①携帯電話の所持について

Q39　あなたは携帯電話をもっていますか？

Q40　あなたは携帯電話をもちたいと思いますか？　（Q39 で「もっていない」と答えた人）





中学生の 41%は自分専用の携帯電話をもっているが、もちたいと思わない子も 16%

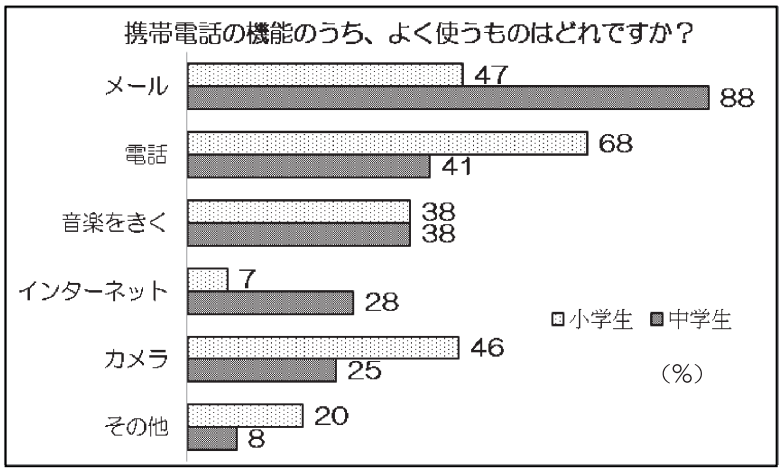
中学生になると、携帯電話をもっている子の割合が急に増える。部活や塾などで帰宅時間が遅くなる場合の安全確保のために、親がもたせることもあるだろう。しかし、子どもにとって友だちとのコミュニケーションを随時、自分の管理の下で行えるということが大きな魅力になっているのだろう。中学３年生になると所持率は 50%を超えると考えられる。

携帯電話をもっていない子どものうち、携帯電話を「もちたいと思わない」「あまり思わない」と答えた中学生が 26%いた。これは調査対象の中学生の 13%に相当する。

注：ここからの問いは、携帯電話をもっている子のみの回答

②携帯電話の利用

Q41　携帯電話の機能のうち、よく使うものはどれですか？

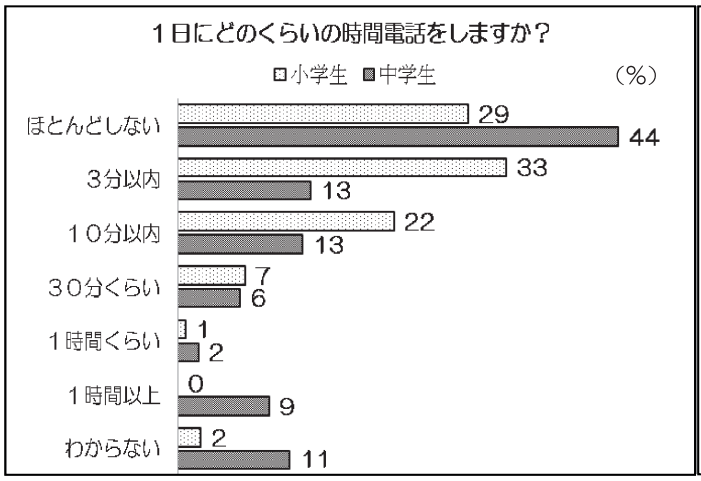


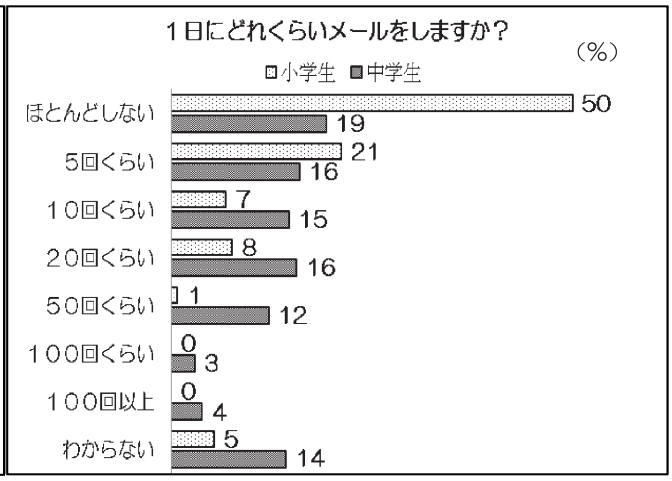
中学生では電話よりメールを利用。
音楽を聴くツールとしても

小学生と中学生の携帯電話の使い方に大きな差が見られる。小学生が電話やカメラといった携帯電話に備え付けられた機能を中心に使っているのに対し、中学生になるとメールやインターネットなど外へのアクセスするためのツールとして使っている。この傾向は年齢がすすむにつれますます強くなっていくと考えられる。

③携帯電話の利用…電話は１０分以内(携帯をもつ子のうち小学生８割、中学生７割)。

Q42　１日にどのくらいの時間電話をしますか？
Q43　１日にどのくらいメールをしますか？（送信の回数で）





電話の利用、中学生は二極化の傾向。中学生になると増えるメールの利用回数

携帯電話の電話機能の利用について、10 分以内と答えた子どもは小学生で 84%、中学生で 70%だった。小学生の場合、利用時間が増えにしたがって該当者が減っていくのに対し、中学生では「ほとんどしない」と答えた子どもが 44%いる一方、１日「１時間くらい」「１時間以上」利用すると答えた子どもが 11%いた。中学生の場合、電話利用に二極化の傾向が見られる。

メールについては小学生の半数が「ほとんどしない」と答え、「20 回くらい」までにほとんどが収まっているのに対し、中学生では「ほとんどしない」から「50 回くらい」までにほぼ均等に分散している。

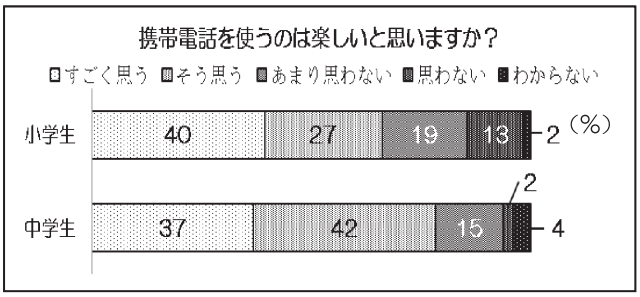
中学生になると増えるケータイメール

中学生になると増えるメールの利用は、Q41「携帯電話のどの機能をよく使うか」の調査結果と整合している。携帯電話の利用が、電話からメールに、更にインターネットへと広がり、子どもたちがつながる空間が拡大していく。ケータイメールの「危険性」が問題になり、リテラシーの向上が求められているが、リテラシーに関する指導については小学校高学年が重要な時期にあると考えられる。

④携帯電話について…子どもたちの考え

Q44　あなたは次のことについてどう思いますか？
①　携帯電話を使うのは楽しいと思いますか？

携帯電話をもっているほとんどの子どもたちが「携帯電話を使うことが楽しい」と答えている(小学生 67%、中学生 79%)。



携帯電話を使うことが楽しい理由

いつでも、どこでも、特定の相手にピンポイントでつながり、時間と話題を共有できるという携帯電話の特性が「つかうことが楽しい」ということにつながっていると考えられる。さらに、携帯電話で共有した話題は当事者間に閉じているという、ある種の秘密性をもつことも、子どもたちにとって魅力となっているのではないか。

中学生になると、メールやインターネット機能の利用が増える。このことは、通話による当事者間の閉じた情報の共有（秘密性をもった情報の共有）から、メールのやりとりやインターネットのサイトを通したグループによる情報の共有への広がりを示している。特定の情報を共有する親密さを「楽しい」と感じたり、親密なグループに所属しているという「安心感」が好まれたりしているのではないか。

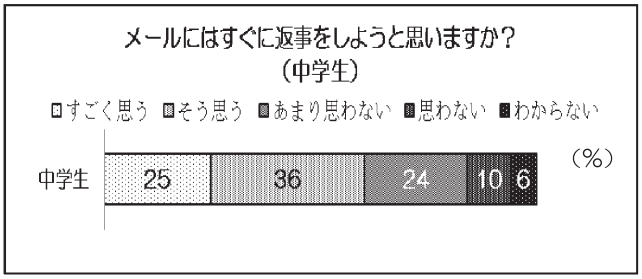
小学生に比べ中学生がより「楽しい」と答えていることは、携帯電話で使う機能の拡大と関係していると考えられる。

Q44…②　メールにはすぐに返事をしようと思いますか？

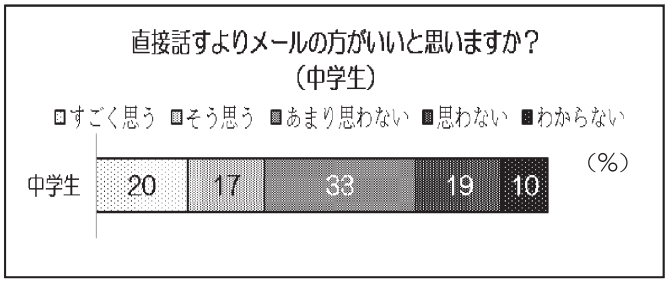
メールが来たらすぐに返事をしようと思う中学生…約６割

「すごく思う」「思う」を選んだ子どもは、中学生 61%と、「あまり思わない」「思わない」を選んだ子ども、中学生 34%を大きく上回った。「分からない」を選んだ子どもは、中学生 6%だった。

「すごく思う」「思う」を選んだ子どもが、小中学生ともほとんど同じだったのに比べ、「あまり思わない」「思わない」を選んだ子どもについては、中学生が小学生を 10 ポイント以上も上回っていた。



Q44…③　直接話すよりメールの方がいいと思いますか？



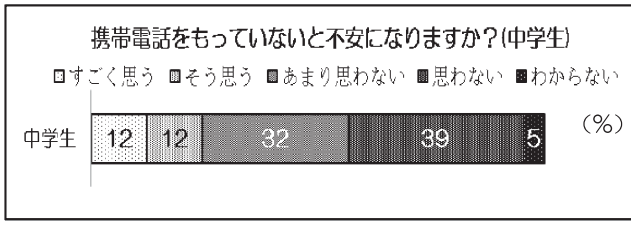
メールより直接話す方がいい

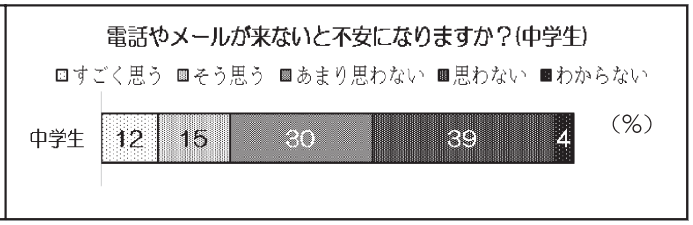
「あまり思わない」「思わない」を選んだ中学生は、「すごく思う」「思う」を選んだ中学生を 15 ポイント上回る結果となった。話す内容によって使い分けをしているということもあるだろう。

子どもたちはコミュニケーションの手段を使い分けている

一般的に、相手に何かを伝えるとき、「面と向かって直接話す」ことより「電話で話すこと」の方が、「電話で話すこと」より「手紙やメール」の方が、ストレスが少ないといわれている。つまり、直接話すことよりメールの方が、快・不快、賛成・反対、興味・無視、共感、怒りなどの相手の反応にさらされなくてすむということである。メールは、自我関与をすることなく相手にメッセージを送ることができる。逆に、相手の意見を求めたり、悩みごとを相談したりする場合には、メールは適当な手段とは言えない。子どもたちは「メッセージとして何を発信するか」によってメールが「いいかどうか」判断したのではないか。今回の調査では「話す内容」についての条件を示さなかったため「メールのほうがいい」という評価が 37%と多くなったと考えられる。子どもたちがメールというコミュニケーション手段を場合によって使い分けていることがうかがえる。

Q44…④　携帯電話が手もとにないと（もっていないと）不安に思いますか？
⑤　電話やメールが来ないと不安に思いますか？





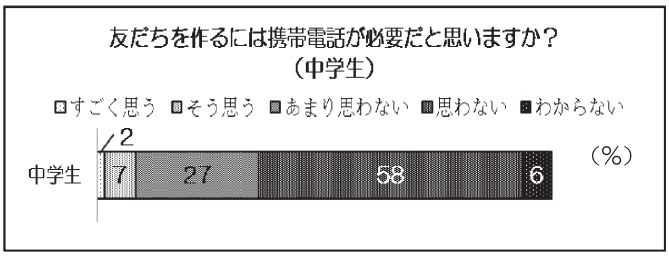
携帯電話への依存は…

携帯電話をもたなかったり、メールなどがなかったりすると不安になるという、携帯電話への依存を危惧する声がある。今回の調査では「不安になる？」という問いに対し、ともに12%の子ども（中学生）が「すごく思う」と答えている。この数字を「依存」と受けとめるべきなのか、判断が難しい。「依存」と言われる状態がどのようなものをさすのか、「すごく思う」と答えた子どもがどのような状況にあるのかを摺り合わせ、慎重に判断する必要がある。

Q44…⑥　友だちをつくるには携帯電話が必要だと思いますか？

友人関係のメンテナンスに使われる携帯電話

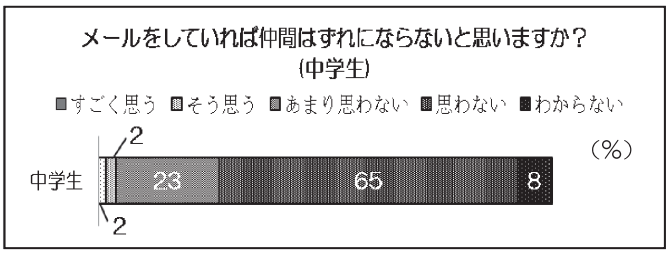
友だちをつくるのに携帯電話が「必要だと思う」と答えた中学生は 9%に対し、「そう思わない」という答えは84%だった。携帯電話は、友だちをつくるためのツールというより、友人関係をメンテナンスするツールとして使われている。



Q44…⑦　友だちとメールをしていれば仲間はずれにならないと思いますか？

メールをしていれば仲間はずれにならない？

メールをしていれば仲間はずれにならないと答えた子どもは４％と非常に少数だった。友人関係を維持するためにメールを返信することは意識しているが、友人関係がメールのやり取りによって構成されるものではないという認識がある。



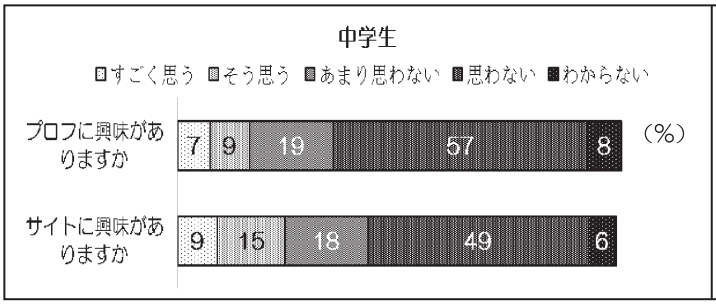
15 分ルールという言説

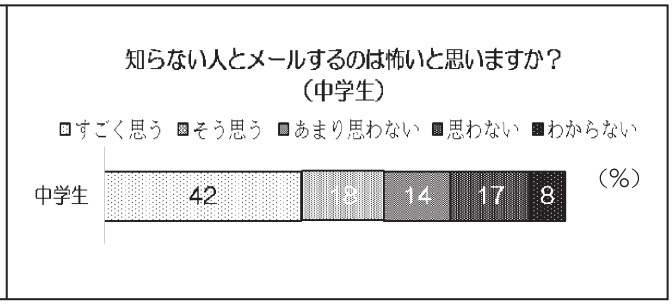
「ケータイ依存」や「携帯電話によるいじめ」に危機感を感じている人から「メールが来たら 15 分以内に返事をしないと、 仲間はずれやいじめの対象になる」といった、 いわゆる「15 分ルール」の言説がある。

今回の調査結果の「メールが来たらすぐに返事をするようにしている」という問いに対し、「すごく思う」「そう思う」と答えた子どもを（61％：中学生 ）を「15 分ルール」と結びつけることは適当でないと考える。 子どもたちの「すぐに返事を返す」という答えには、「言葉をかけられたら言葉を返す」というコミュニケーションのごく初歩的なルールによるものが多く含まれていると考える。 直接、 顔を合わせていれば、 改めて言葉にしなくとも表情や所作などで済ますことができることも、 メールだと文字にして返さなくてはならない。 61％の中には、 その程度のことを指しているものも多いのではないか。

仮に「15 分ルール」が深刻な状態にあれば、Q44⑦の問いに対し「そう思う」と答える子どもの数はずっと大きなものになっていたと考えられる。

Q44…⑧　プロフに興味がありますか？
⑨　サイトに興味がありますか？
⑩　知らない人とメールをするのは怖いと思いますか？





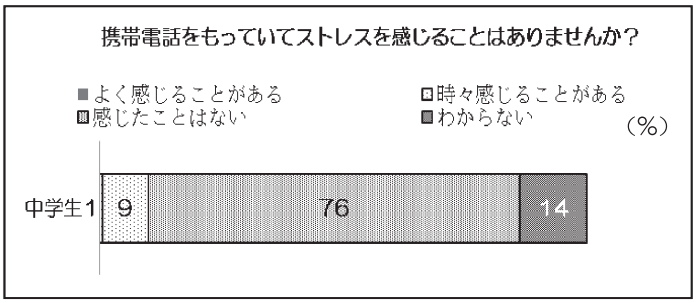
プロフや裏サイト興味はあるが怖い

子どもたちはプロフや裏サイトに一定の興味や関心を抱いているが、６割の子どもは、知らない人とメールなどすることに怖さを感じている。（Q44⑩の問いに対する「すごく思う」「思う」と答えたもの60%）

同時期に行われたベネッセ教育研究開発センターの調査によれば、70%の子どもが「怖い」と答えている。静岡県の子どもは危機意識が低いのか、いたずらに危機意識を煽ることは問題だが、メール交換やインターネット上のサイトへのアクセスなどのリテラシーを高めることを引き続き行う必要があるだろう。

Q45　携帯電話によって友だちとの間で問題になったことがありますか？（小学生に対する質問）
携帯電話をもっていてストレスを感じることはありませんか？（中学生に対する質問）

携帯電話によるトラブルやストレス



問題やストレスを感じたことがあるという答えは、小学生で3%、中学生で10%あった。

「携帯電話によって友だちとの間で問題になったこと」「携帯電話をもつことによるストレス」などについて聞いたが、「問題」や「ストレス」がどのようなことを想定しているのか回答者にわかりにくかったのではないか。「メールを返信するのがめんどうだと感じたことはないか？」など、具体的な質問の方が答えやすかったのではないか。

column

教育研究所では、2009年10月に「ケータイと子どもたち」というテーマでミニシンポジウムを行った。その時にお招きした荻上チキさん（批評家）から「親の役割・教育の役割」ということで次のような話があった。

「親の役割、教育の役割ということですが、僕も、ここまで先生がやる必要があるのかと思います。しかし、個別の家庭の教育に返してしまうと、家庭の差がケータイのリテラシーに反映されてしまいます。一方ではリテラシーをどんどん高めていくのに、正しいリテラシーを身につけることなく犯罪などに巻き込まれてしまう子どもが出てくる。そういう家庭間の教育格差をなくすというということが公教育の役割です。学校教育である程度底上げをするための方法論を、共有していかなくてはならないと思います。その目安になるのが、小学６年生までに検索リテラシーを身につける、中学３年生までに運営リテラシーを身につける、つまり削除したり、通報したり、段階に応じて対応ができるようになることだと思います。」

「ケータイと子どもたち」報告書は、研究所ホームページでご覧いただけます。（http://www.stu.jp/）

第２部　子どもたちの人間関係づくり～クロス集計の結果から～

第２部では、クロス集計（個々の質問項目をかけ合わせて集計したデータ）から、子どもたちの人間関係や意識などについて分析・考察をする。なお、ここにあげたデータは統計学的検定を通して、相関が認められるものに限った。また、第１部と同様、グラフの数値はすべてパーセンテージを示している。パーセンテージは読みやすさを考慮し、小数第１位を四捨五入し整数で表した。

調査結果の概要

（１）自己肯定感を育むもの

P. 25

＊子どもたちの自己肯定感は、友だち・親・祖父母・きょうだい・学校の先生など周りの人々に認められることと強い相関がある。特に、小学生では「友だち」、中学生では「親」、そして両者に共通して「学校の先生」が自己肯定感を育てるキーパーソンであることがわかる。

＊子どもたちの自己肯定感は、友人の数や友人関係の深さとも関係している。自己肯定感の高まりと、友人関係の広がりや深まりの間には強い相関がある。また、友人関係だけでなく、家族や近所の人とのつながりが子どもたちの自己肯定感に大きな影響を与える。

（２）自己肯定感と自立した人間関係

P. 32

＊自己肯定感が高まるほど、クラスメイトなど周りの人の視線を気にすることなく自分の意見を述べたり、学級活動や生徒会などの活動に参加したりと自立した人間関係をつくることに積極的な姿勢が見られた。

＊自己肯定感の高まりは、授業や友人とのかかわりの中での積極的な自己表現につながり、自分の思いを伝えられたという充足感はさらに自己肯定感を高めることにつながる。

（３）いじめ

P. 37

＊いじめにあった経験のある子のうち、約６割は「いじめにあうかもしれない」という不安をもっている。また、「いじめにあうかもしれない」という不安をもっている子どもには、クラスメイトなど周りの人の視線を気にして自己表現を控える傾向が認められる。

（４）子どもたちの友人関係

P. 40

＊子どもたちの友人関係づくりには、男女による違いが認められる。悩みを相談できて気をつかわずに話せる友だちを望む傾向は、男子に比べ女子の方が、小学生に比べ中学生の方が強い。女子は男子に比べ、話したくても話せないことがあると回答する割合が高いこと、クラスメイトからどう見られているかを気にする傾向が強いことなど、友人関係への感度の高さが見られる。

＊クラスメイトからの視線を気にする子は、授業の発表などをためらう傾向があるものの、視線を気にするあまり学校生活の中で委縮しているとは言えない。

＊友人関係を維持するために男女とも「秘密や約束を守ること」に気をつけている。また友人関係を修復することについては、手紙を出すなど女子の方が丁寧で、男子の方がそうした気づかいや行動が少ない。

（５）子どもたちの友人関係とケータイ

P. 44

＊友人の多い子ほどメールを利用する回数が多く、メールを利用する回数が多いほどすぐに返事をしようとする傾向がある。また、携帯電話が手元にないと不安と答えた子どもは、男子に比べ女子に多い。

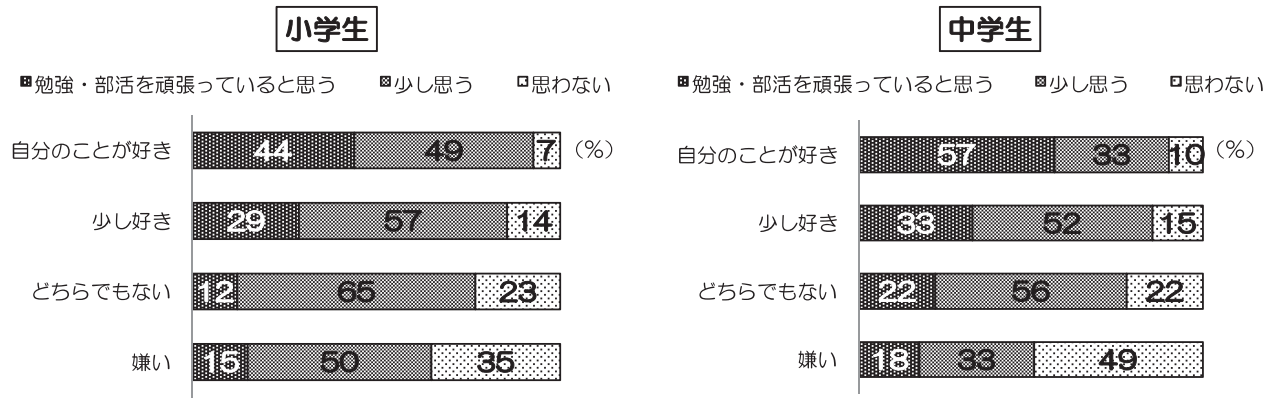
（1）自己肯定感を育むもの

「自己肯定感」とは、自分が価値ある人間であり、自分の存在を大切に思う気持ちである。子どもたちは自分のことをどう捉えているのだろうか。「第１部　子どもたちの意識と行動」でも、明らかであったように、今回の調査では、小学生、中学生ともに、自己肯定感が比較的高いという結果が読み取れた。ここでは、自己肯定感を育むものが何であるかを、他者とのかかわりという観点から探る。

◇◆子どもたちの自己肯定感の実態

最初に子どもたちの自己肯定感を図る指標とした問いについて少し詳しく見ておく。子どもたちの自己肯定感の指標として考えた問いは「自分のことが好き？」「勉強や運動などをよく頑張っていると思う？」二つである。この二つの問いには、以下のような相関があった。グラフは、小学生を例にすると、「自分のことが好き」だと回答した子のうち 44％が「勉強・運動など頑張っていると思う」を選択し、49％が「少し思う」、７％が「思わない」を選択していることを示している。

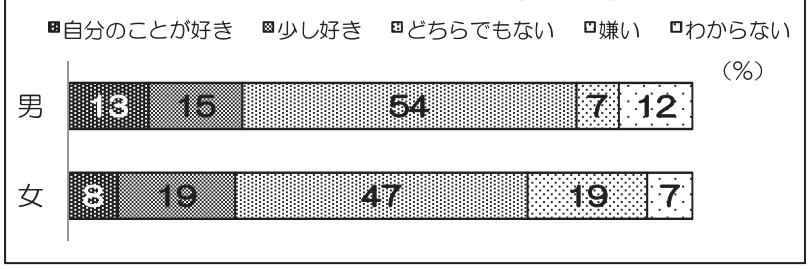
「自分のことが好き」と「勉強や運動を頑張っている」との相関



小学生も中学生も同様の傾向がみられる。自分のことを「好き」・「少し好き」と回答している子は勉強や運動・部活動に対して「よく頑張っている」と自己評価する割合が高い。反対に自分のことが「嫌い」と回答している子は「頑張っていると思わない」と否定的な評価をしている割合が高い。この二つの問いは、「子どもたちの自己肯定感」を捉える上で、子どもたちが「感覚的に自分をどう見ているか」と「客観的に自分をどう評価しているか」の両面から探ることができるものといえよう。

次に、自己肯定感に対する男女の違いを見る。小学生については、男女の差は小さかったが、中学生については若干の違いが認められた。自己肯定感に限らず、小学５年生から中学２年生にかけて性別による違いが現れてくる時期だと言えるだろう。

自己肯定感の男女差（中学生）

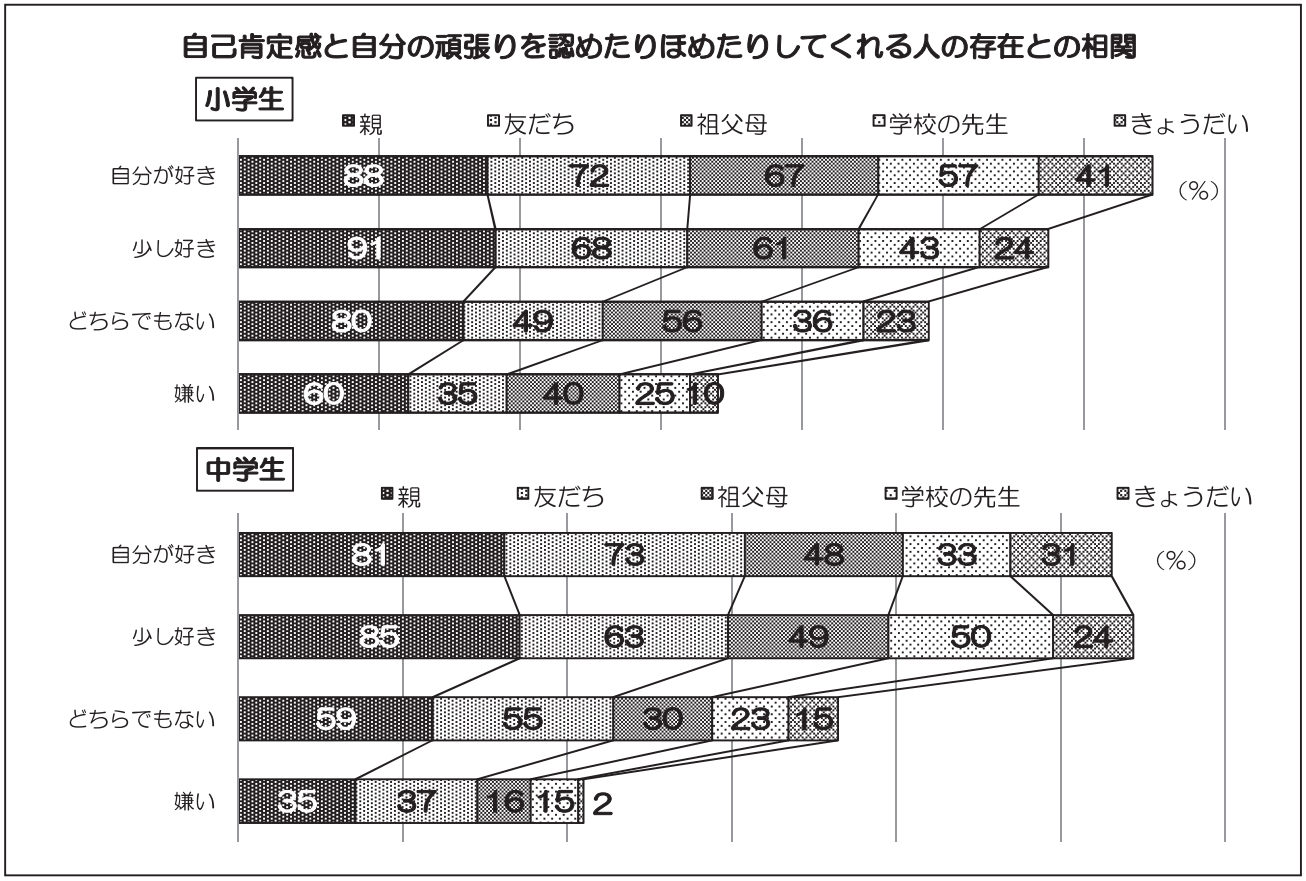


「好き」「少し好き」の割合は男女ともほぼ同じだが、「どちらでもない」「わからない」とあいまいに回答する傾向は男子に強く、自分のことが「嫌い」と明確に回答する傾向は女子に強かった。

◇◆自己肯定感は、家族・友だち・教職員などとのかかわりによって高められる

子どもにとって周りの人とのかかわりは、人間形成にとって重要である。自己肯定感も身近な人とのかかわりによって育つことが今回の調査でも明らかになった。

次のグラフは、自己肯定感と自分の頑張りを認めたりほめたりしてくれる人の存在との相関関係を示したものである。小学生を例にすると、頑張りを認めてくれる人として「親」を選択しているのは、「自分のことが好き」と回答した子のうちの 88%、「少し好き」と回答したうちの 91%、「どちらでもない」と回答したうちの 80%、「嫌い」と回答したうちの 35%と少なくなっている。以下、同じように自分のことを「好き」「少し好き」「どちらでもない」「嫌い」と答えた子どもそれぞれが、自分の頑張りを認めてくれる人として誰を選んでいるか、選んだ割合を積み重ねて表示してある。



小学生も中学生も、自己肯定感の高い子ほど多くの人から自分の頑張りを認められていると感じていることがわかる。つまり、友だち、家族、学校の教職員など子どもたちの周りの人々に認められ、ほめられることが自己肯定感を高めることの要因となっていることがはっきりとわかる。

◇◆小学生は「友だち」、中学生は「親」が自己肯定感を伸ばすキーパーソン …そして、両者にとって大きい存在を示す「学校の先生」

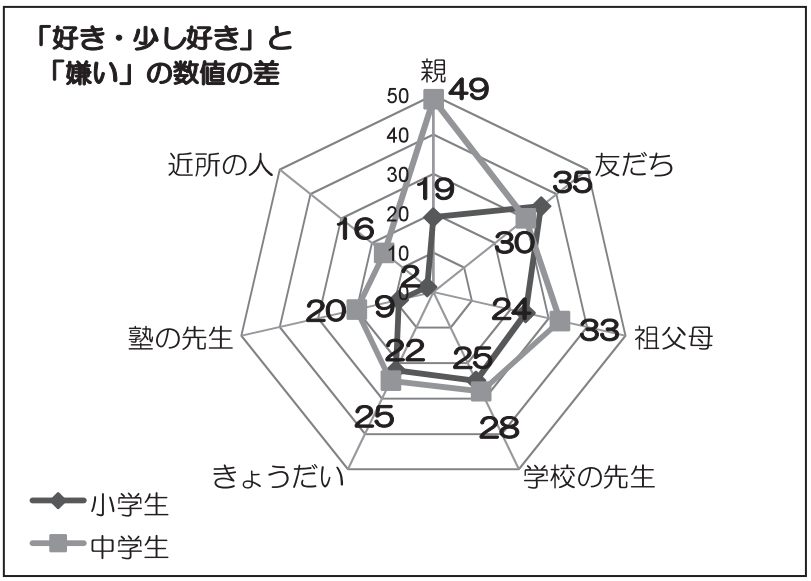
上のグラフで注目してほしいのは、「好き」「少し好き」と「嫌い」の数値の差である。この差が大きい選択肢ほど、子どもたちの自己肯定感の育成に大きく関与していることを示している。

「好き」と「少し好き」を合算して割合を算出し直したものと、「嫌い」の数値の差を比較してみると、次ページのようなグラフになる。小学生で言えば「友だち」の差が最も大きく、35 ポイント差。続いて「学校の先生」が 25 ポイント差。ちなみに「親」は 19 ポイント差である。

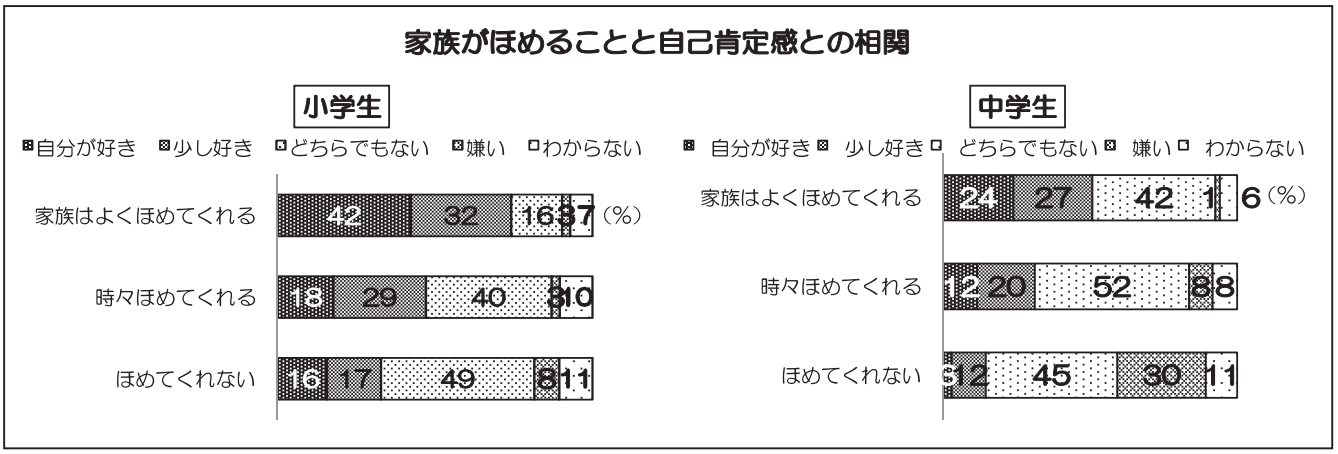
一方、中学生では「親」が 49 ポイントと最も高く、小学生ではトップだった「友だち」は 30 ポイント差、「学校の先生」は 28 ポイントである。自己肯定感を伸ばすキーパーソンとして小学生では「友だち」、中学生では「親」、そしてどちらにも欠かせないのは「学校の先生」だといえよう。

また、全体的に中学生のポイント差が大きいことにも注目したい。ポイント差が大きいということは、それだけ自己肯定感に大きく影響しているということである。この時期において周りの人から認め、ほめられることが自己肯定感を大きく伸ばすことが考えられる。

反抗期、思春期である中学生の時期には、一般的に「親」に対して反抗的な態度をとりがちである。そういう中において、今回の調査では「親」が最も高いポイント差を出していることは興味深い。反抗的な態度をとっていても、「親」から認め、ほめられることは中学生の自信、自己肯定感の形成に大きく影響していることを物語っている。



また、「親」「祖父母」「きょうだい」を含めた「家族」から認め、ほめられることが自己肯定感に大きく関与していることは次のデータからも言えるが、「家族がほめてくれない」と回答している中学生の約30%が自分のことを「嫌い」と回答していることには注目しておきたい。中学生であっても家族から「認められたい」「ほめられたい」という思いは存在する。



「学校の先生」がほめることについては、小学生も中学生も自己肯定感の育成に深く関与している部分である。年齢が上がるに従ってほめなくなる傾向があるものの、日常的な子どもたちとのかかわりの中で十分にそのことを念頭において指導にあたっていくことが望まれる。

認め励まそうとするまなざし

頑張りを認められることによって自己肯定感が育つのか、自己肯定感をもっている子が頑張りを認められる機会を多くもつのか、その因果関係は今回の調査だけでは断定はできないが、両者には強い相関関係があることがわかる。

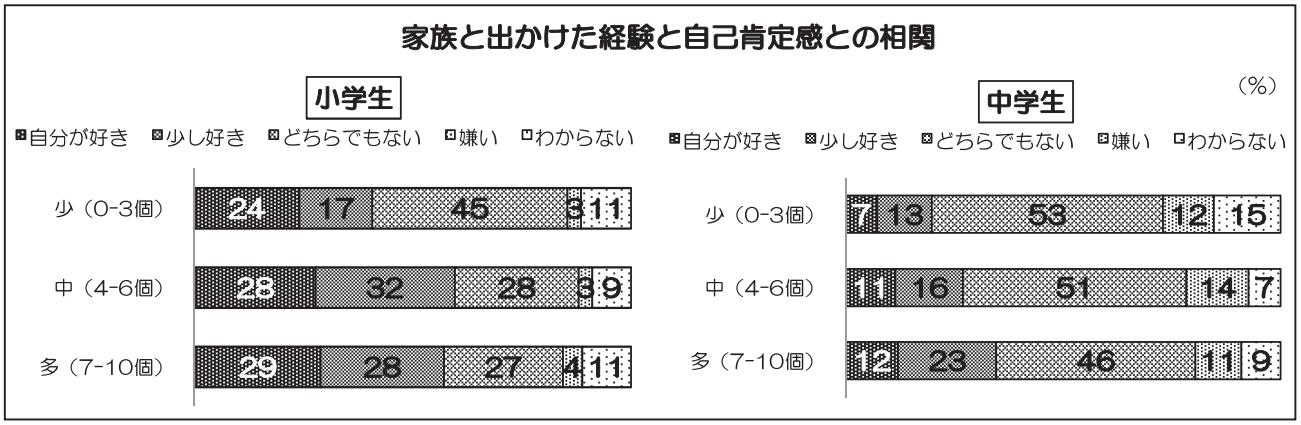
自己肯定感が育つには、「認められるような行為や努力」と「認め励まそうとするまなざし」の両方が必要である。「ほめさえすればいいのか」、必要なのは「ほめ言葉」ではなく、「認め励まそうとするまなざし」から生まれる「ひと言」だろう。たとえ、些細なことであっても、認められ励まされることによってそれは大きなものに育っていく。自己肯定感は「評価の対象」としてあるのではなく、「育てる価値」としてある。

◇◆自己肯定感を高める家族と一緒に過ごした体験

子どもと他者のかかわりが重要であることは、先述したとおりだが、両親が共働き、片親などの理由により、子どもと向き合う時間がなかなか生み出せない家庭では、自己肯定感を高めることができないのだろうか。

「ワーク・ライフ・バランス」という言葉が、最近浸透しつつあり、多忙ながらも家族とともに過ごす時間を大切にし、旅行やキャンプなど家族イベントを企画する家庭も多い。家族が同じ時間、同じ場所を共有する中でかかわりをもつことと自己肯定感の育成の相関について考えてみる。

下のグラフは、動物園・水族館・遊園地、図書館・博物館・科学館、美術館・音楽会(コンサート)・スキーなど、家族と一緒に行ったことのあるものの選択数と自己肯定感との相関を探った結果である。



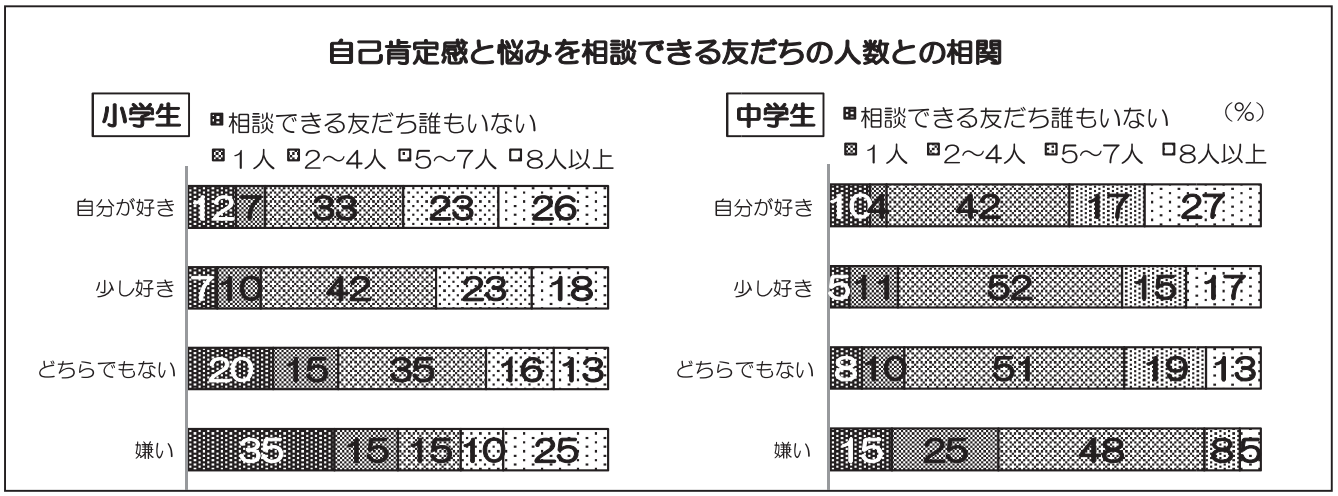
選択数が３個までのグループ、４～６個までのグループ、７個以上のグループに分けて自己肯定感との相関を探ってみた。選択数が多いグループほど「自分のことを好きだ」「少し好きだ」の割合が多くなっている。家族と一緒に出かけたり過ごしたりする経験が自己肯定感の育成に関与していることがわかる。単純集計でも述べたが、「少グループ」は動物園・水族館・遊園地などの行楽遊興の施設が中心であり、「中グループ」はそれに加え図書館・博物館などの学校での学習に関係する場所、「多グループ」はさらに科学館、美術館・音楽会(コンサート)・スキーなどといった教養や趣味に関する場所が加わっている。今回の調査では、家族と出かける頻度まで聞いていないが、家族と様々なところに出かけた経験は、子どもたちの遊びに行きたい欲求や知的好奇心を満たすと同時に、家族の一員として大切にされているという思いを満たすのだろう。そうしたことが自己肯定感に結びついていると考える。

◇◆自己肯定感の高さと友人関係の広がり

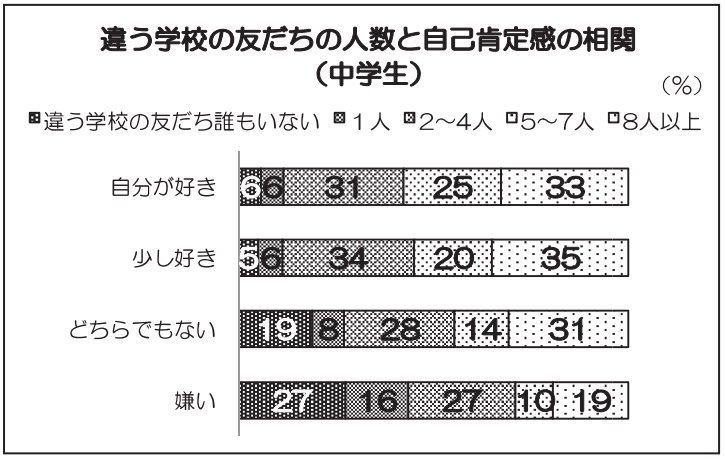
次に、自己肯定感と他者とのかかわりについて検討する。「高い自己肯定感をもつ子は、他者と多く関わっているだろう」という仮説の検証をしてみる。

「同じ学校の友だち」「違う学校の友だち」「悩みを相談できる友だち」「メールをする友だち」の人数と自己肯定感の相関関係を探ってみた。結果としては、「同じ学校の友だち」と「メールをする友だち」については関連が見られなかったが、「悩みを相談できる友人の人数」「違う学校の友人の人数」との間には関連が見られた。

自己肯定感と「悩みを相談できる友だちの人数」との相関については、小中学生とも同じような傾向がみられた（次ページグラフ)。「自分のことが嫌い」な子は、悩みを相談する友だちが「だれもいない」とする割合が増え、小学生で「自分のことが嫌い」と回答した子の 35%が悩みを相談する友だちが誰もいないとしている。中学生では、小学生に比べるとその割合が減るが、相談できる友だちが１人と回答する割合が増えている。自己肯定感の高い子ほど悩みを相談できる友だちが多い。



違う学校の友だちの人数については、中学生に相関関係が見出せる。上の中学生のグラフと見比べると、「友だちがだれもいない」あるいは「１人」と回答した子の割合が似通っており、自己肯定感の高い子の方が、違う学校にまで友だち関係を広げることができていることがわかる。

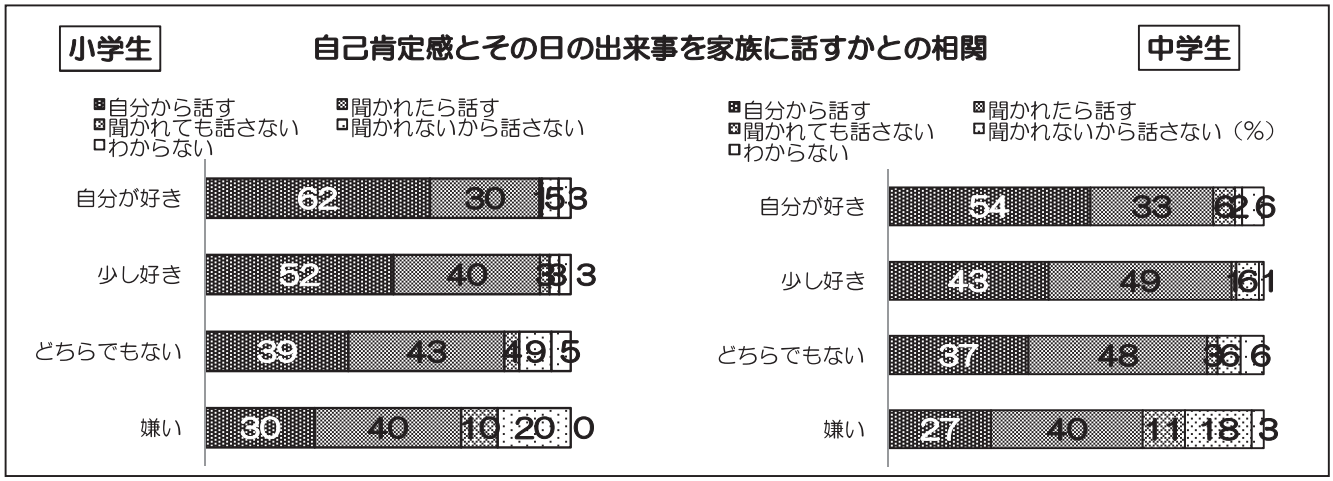


本当に子どもたちは「内向き」傾向にあるのか？

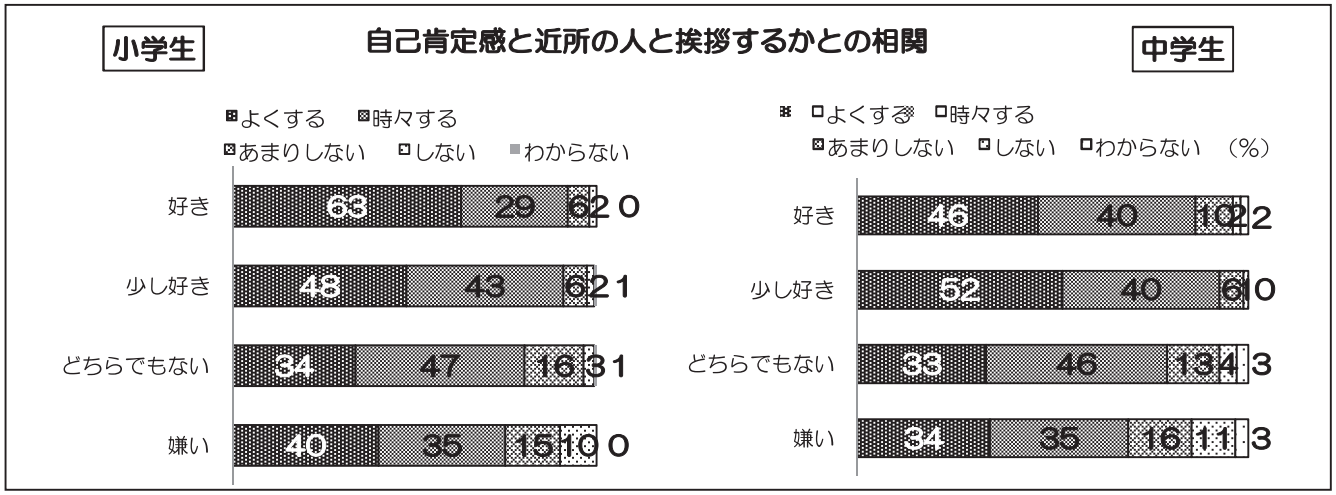
最近の子どもたちは「内向き」だと言われているが、本調査では、違う学校にいる友だちが８人以上いると回答した子が、小中学生ともに３割いるという結果を得た。スポーツ少年団や習い事、塾や部活動などで学校以外の友だちの存在というものが広がっているのだろう。現状では極端な「内向き」傾向にあると感じられない。上のグラフからわかるように自己肯定感の高い子は、より友だちとのかかわりを広げている。より多くの友だちとのかかわりがあると、そこで自分の存在が認められ、さらに自己肯定感を高めていく。子どもたちが「内向き」であることを心配するより、学級、学年、学校を超えて、さらには市町、県、国を超えて、子どもたちが様々な人とかかわり合う場をつくり出す機会やきっかけを与えたり、保障したりすることが必要なのではないか。

◇◆自己肯定感の高い子の家族や地域の人とのかかわり方

子どもたちとその家族とのかかわり方について見る。「自分のことを好き」と「その日の出来事を家族に話す」との相関を探った。小学生も中学生もその日のことを家族によく話している。特に、「自分のことが好き」な子のうち小学生で62%、中学生で54%が「自分から話す」を選択している。自己肯定感の高い子ほどその日の出来事などをすすんで家族に話そうとする傾向が強いことがわかる。



次に、「近所の人とのかかわり方」と「自己肯定感」との相関関係について見ると、自分のことが好きだという子のほうが近所の人と挨拶をする割合が高いことがわかる。



高い自己肯定感をもつ子は、多くの人（友人・家族・近所の人など）とかかわり合いをもつことができると言える。子どもたちの自己肯定感を育てることは、子どもたちが子どもたちの世界で人間関係を築き上げるときの、そして大人になってから様々な人と人間関係を結んでいくときの基盤づくりをすることだと言えよう。

家庭を“子どもたちがありのままの自分をさらけ出せる”場所に

家族とのかかわりを見たときに、「自己肯定感の高い子ほどその日の出来事などをすすんで家族に話そうとする傾向が強い」とまとめたが、「自己肯定感が高いから家族と積極的なかかわりをもつ」とも「これまでも家族と積極的にかかわりをもってきたから自己肯定感が高まった」とも言えるのではないだろうか。

子どもが家族の顔色を見て行動するのではなく、学校で失敗したことも安心して話せる家族がいることは自己肯定感を育むことにつながっている。子どもたちがありのままの自分をさらけ出せる雰囲気を家庭の中につくっておくことはわたしたち大人の役割であろう。

column

国際比較から見た日本の子どもたちの自己肯定感

国内外の青少年の意識などを調査・研究している財団法人「日本青少年研究所」の国際調査（2002年）では「私は他の人々に劣らず価値のある人間である」との問いに「よくあてはまる」と回答した中学生が、アメリカ51.8%、中国49.3%だったのに比べ、日本は8.8%と極端に低かった。

その他の項目でも

●「計画を立てたら、それをやり遂げる自信がある」…日本9.8%、アメリカ54.2%、中国32.8%

●「私は自分に大体満足している」……日本9.4%、アメリカ53.5%、中国24.3%

●「私は人並みの能力がある」……日本15.6%、アメリカ56.5%、中国49.3%

との結果がある。ここでは「日本の中高生は自分の能力に対する信頼や自信に欠けている」と述べている。

また、同じ「日本青少年研究所」の国際調査「高校生の心と体の健康に関する調査」（２０１１年２月）では、次のようなデータが掲載されている。

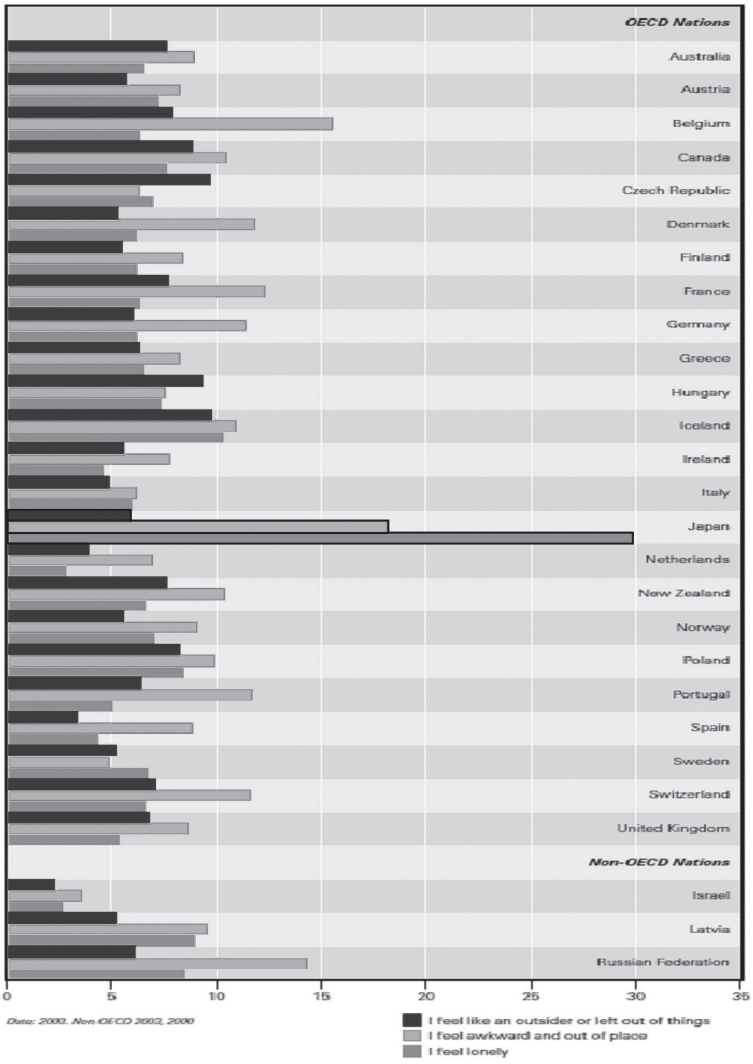
●「私は価値のある人間だと思う」……日本7.5%、アメリカ57.2%、中国42.2%、韓国20.2%

●「自分を肯定的に評価するほう」……日本6.2%、アメリカ41.2%、中国38.0%、韓国18.9%

●「私は自分に満足している」……日本3.9%、アメリカ41.6%、中国21.9%、韓国14.9%

●「自分が優秀だと思う」……日本 4.3%、アメリカ 58.3%、中国 25.7%、韓国 10.3%

Figure 6.3b Percentage of 15 year-olds agreeing with specific negative statements about personal well-being



2007 年、ユニセフが発表した、先進国の子どもたちに関するレポートでは、OECD 加盟国の 15 歳を対象にした調査で、「孤独を感じる」と答えた子どもの割合が、日本は 29.8%で最も多かったのだ。２番目のアイスランドでさえ 10.3%であり、日本はアイスランドの３倍もの割合で、突出していたのである。平均は 7.4%であり、最も低かった国はオランダで、2.9%であった。その他の項目でも「自分は居心地が悪く場違いだと感じる」割合も、日本は 18.1%と全ての調査国で最も高く、続いてベルギー15.6%、フランス 12.3%と続く。平均は 9.8%で、最も低いのはスウェーデンの 4.9%であった。

日本の１５歳の子どもたちは、自己の存在を肯定する感情が低くて２割近くが居心地の悪さを感じており、３人に１人が孤独を感じている。子どもたちが孤独を感じている割合は、日本は世界の先進国と比べて飛び抜けている。

これらの調査結果をわたしたちはどう捉えたらよいのだろうか。日本人ならではの「謙虚さ」は美徳だと捉えて「よし」とするのか？これを契機に日本の子育てを見直すほうがよいとするのだろうか？

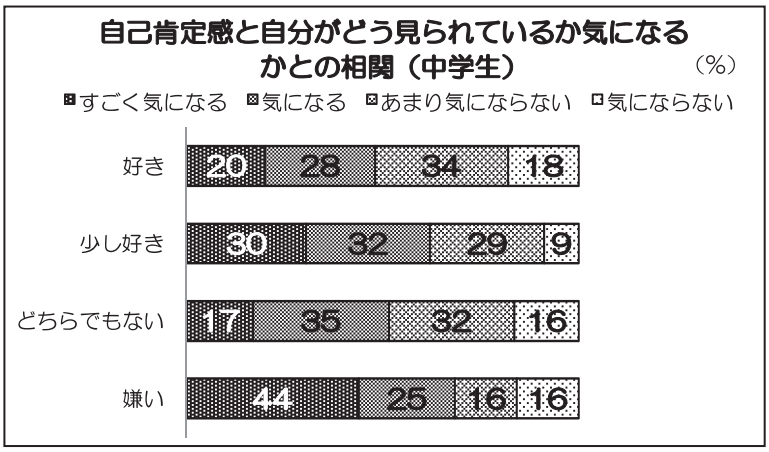
（2）自己肯定感と自立した人間関係

子どもたちの身の回りには様々な世界がある。家庭、地域、学校、さらに言えば、教室、部活動、スポーツ少年団、塾や習い事など子どもたちは様々なステージで人間関係を広げていく。それぞれのステージで異世代、同世代、異年齢、同年齢とその場に合った人間関係を築いている。

ここまで「自己肯定感」の形成要因を探ってきたが、ここからはその「自己肯定感」は子どもたちが築く人間関係にどんな影響を与えているのか、学校における人間関係、同じクラスの中での友人関係に焦点を当てて詳しくみていく。

◇◆子どもたちの積極性・自主性を阻むもの

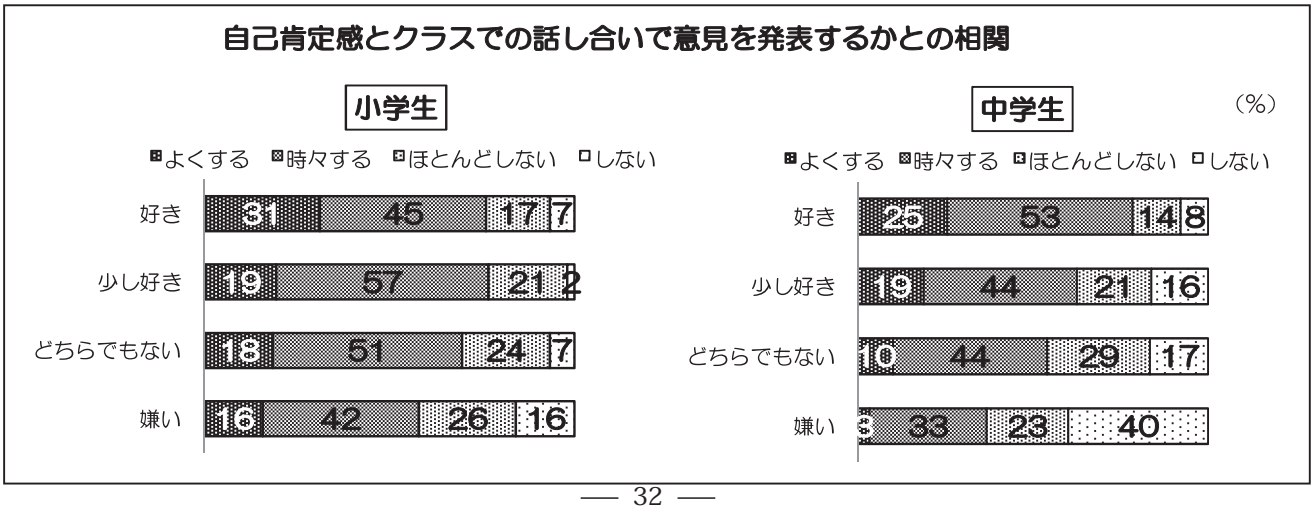
自己肯定感と「クラスメイトから自分がどう見られているか気になるか」との相関を探った。中学生では以下のような相関関係が認められた。自分のことが「好き」と答えた子は、20%が友人の視線がすごく気になると答えているのに対し、「嫌い」と答えた子では44%が「自分がどう見られているのかすごく気になる」と答えている。「すごく気になる」「気になる」と合わせるとその割合は約７割にもなる。自己肯定感の低い子は自分がどう見られているのかを気にする傾向が強いと言えるだろう。周りの友だちの視線を気にすることが授業中の発表や生活態度、自治的活動への参加などを消極的にさせているという言説もある。



◇◆自己肯定感に左右される「授業中の発表」に対する意識

「自己肯定感の高い子ほど授業中に積極的に意見を発言したり、クラス代表や児童会・生徒会といった自治的活動の役員などに積極的にとりくんだりするのではないか」という仮説の検証をする。

まず、クラスの話し合いで意見を発表すること（Q25）と自己肯定感との相関を見る。発表の頻度については子どもたちの自己評価だが、下のグラフを見ると自己肯定感との相関関係はあると考えられる。小学生の段階で自分のことを「好き」だと答えた子のうち「発表をよくする」を選択した子は 31%、逆に「嫌い」と答えた子では「発表をよくする」を選択した子は 16%にとどまっている。中学生段階では25%に対し３%と差が開いている。また、自分のことが「嫌い」を選択した子のうち「発表しない」を選択した小学生は16%、中学生で 40%である。子どもたちの自己肯定感の高さは授業中の発言の頻度にも大きく影響している。

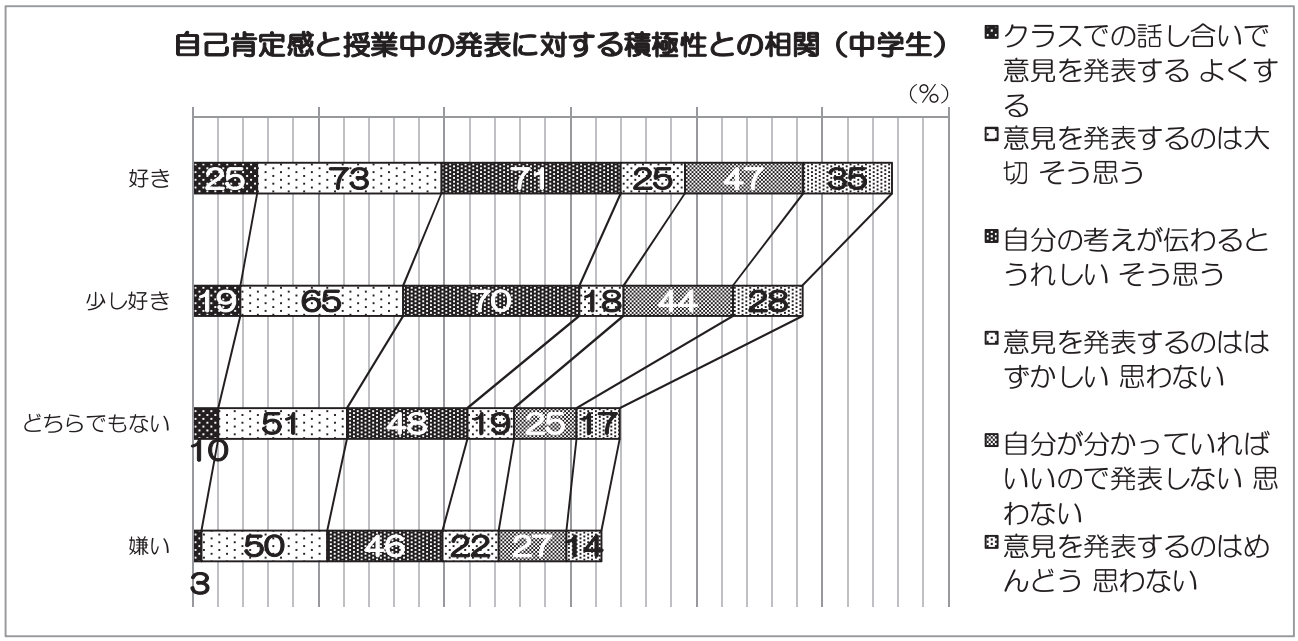


次に、子どもたちの「授業中の発表に関する意識」（Q26）と自己肯定感の相関について見る。特に、中学生において特徴的な結果を得ることができた。

Q26 にはいくつかの問いがあるが、ここでは「積極的な発表」につながる「プラスの意識」についての数値（%）を積算することにより、自己肯定感による違いを見ていく。

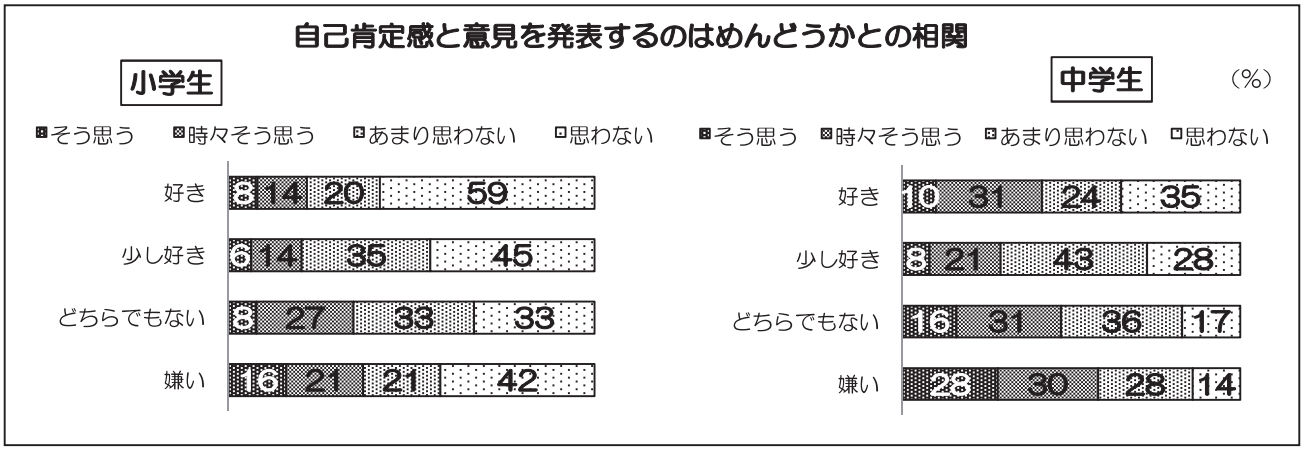
具体的に言うと、Q25「クラスでの話し合いで意見を発表するか」の「よくする」の数値、Q26①「意見を言うことは大切か」の「そう思う」の数値、Q26②「自分の考えが伝わるとうれしいと思うか」の「そう思う」の数値、Q26③「発表するのは恥ずかしいか」の「思わない」の数値、Q26④「発表するのはめんどうか」の「思わない」の数値、Q26⑦「自分がわかっていればいいので発表しなくていいか」の「思わない」の数値をそれぞれ積算すると、以下のようなグラフになる。

（なお、小学生のデータは関連がなかったので掲載していない。）

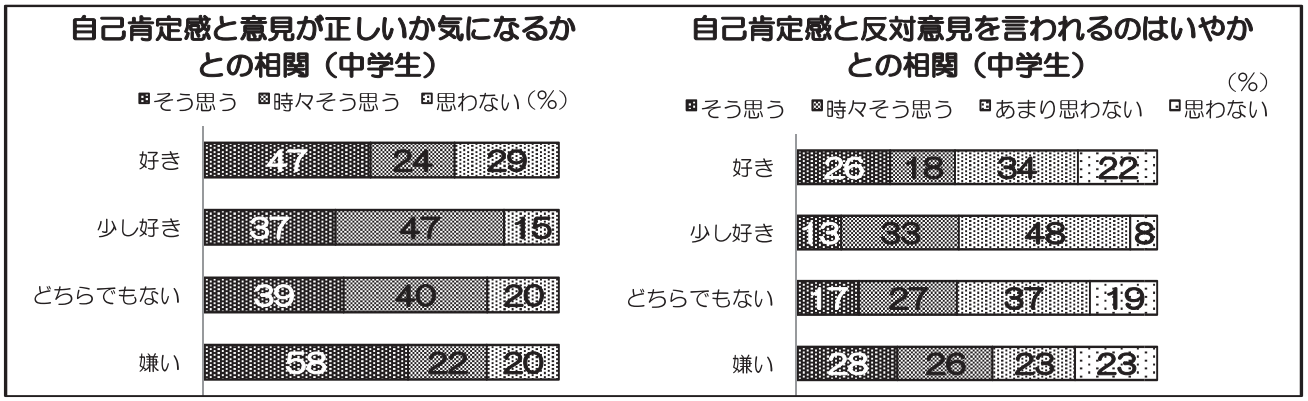


こうしてみると、自己肯定感の高い子は、授業中の発表についてプラスの意識をもっていることが明確になってくる。自己肯定感が高いから授業の発表も積極的に行い、積極的な発表をして自分の意見をわかってもらえることの喜びや満足感を味わい、またさらに自己肯定感が高まっていく。プラスのスパイラルをつくり出していくことが日々の授業には求められる。

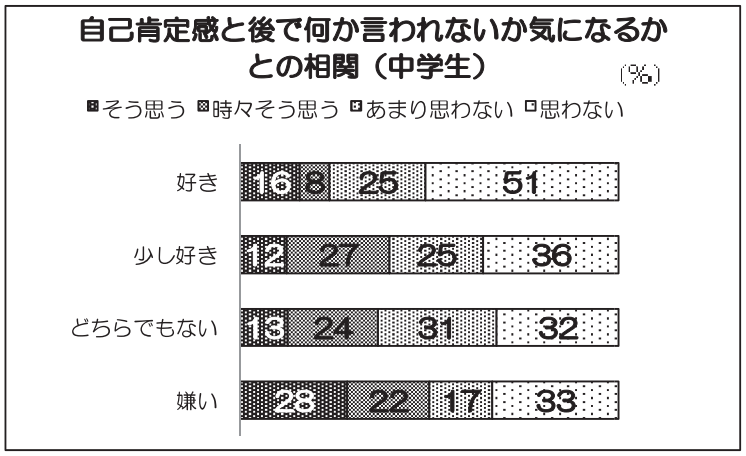
「意見を発表するのはめんどうか」という問いについては、小学生でも相関関係が見られた。小学生の方が発表をめんどうだと思う子の割合が全体的に少ないが、やはり自己肯定感の高い子は、意見の発表をめんどうと思わない傾向が見える。また、中学生になると自分のことを「嫌い」と答えた子が「発表をめんどうだ」と考える傾向は強くなっている。



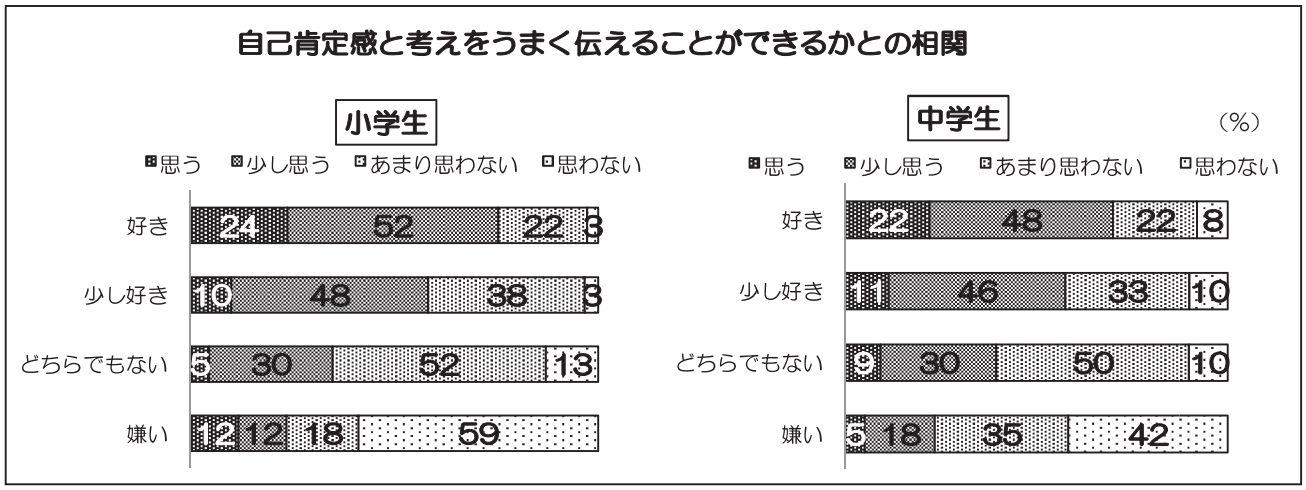
「意見が正しいか気になる」については、自己肯定感に関係なく気にしている様子がみられる。同様に「反対意見を言われるのは嫌か」についても、自己肯定感との強い相関関係は認められなかった。



それに対し、「発表した後で何か言われないか気になる」と自己肯定感の間には相関関係が認められた。自分のことを「好き」と回答している子は「気にならない」が５割を超え、「あまり気にならない」と合わせると約 75%になる。自己肯定感の高い子は自分の発言について後で何か言われることをあまり気にせず、自分の意見を積極的に話すことができるのではないか。逆に自己肯定感の低い子は「気になる」「時々気になる」の選択が５割を超える。



自分への自信と行動について、「自分の考えをうまく相手に伝えることができている」と自己肯定感の相関を見てみる。下のグラフを見ると、小中学生ともに、自己肯定感が低い子については、「うまく相手に伝えられていると思わない」と回答する割合が極めて高くなっていることがわかる。コミュニケーションがうまくとれないために自己肯定感が低くなっているのか、自己肯定感が低いからコミュニケーションがうまくとれないのかはここでは明らかにできないが、コミュニケーションのスキルを上げることによって自信をもたせ、自己肯定感を高めることができるのではないだろうか。コミュニケーション能力を高める学習はこれからさらに重要視されるのではないだろうか。



誰もが安心して発言できる授業づくりを

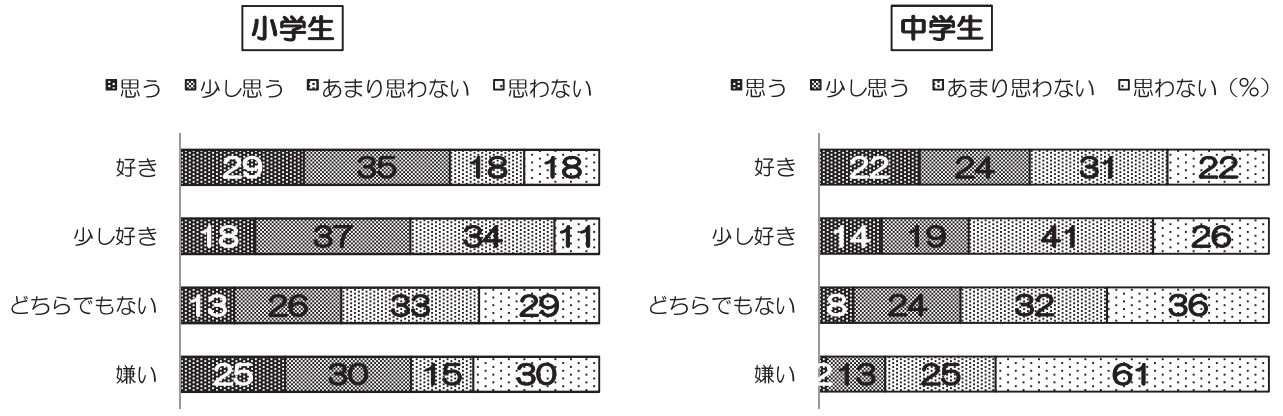
自己肯定感の強い子ほど、まわりの視線に対し過度に神経質にならず積極的に発表し、授業にも意欲的に参加する傾向があるということがデータから読み取れる。「自分の意見が正しいのか」「反対の意見を出されるのではないか」という不安はどの子にもあるものだが、それを乗り越えて発言する自信を子どもたちにはもたせたい。そのためには、子どもたちの自己肯定感を高めるような声かけ、働きかけをすると同時に、子どもたちが安心して授業で発言できる雰囲気をつくり出し、意見を出し合うことのよさを味わわせるとともに、自分を表現するスキルや相手の考えをよく聞く態度を育てることが必要だと言えるだろう。

◇◆ 学級役員、児童会・生徒会役員など自治的活動に対する意識と自己肯定感

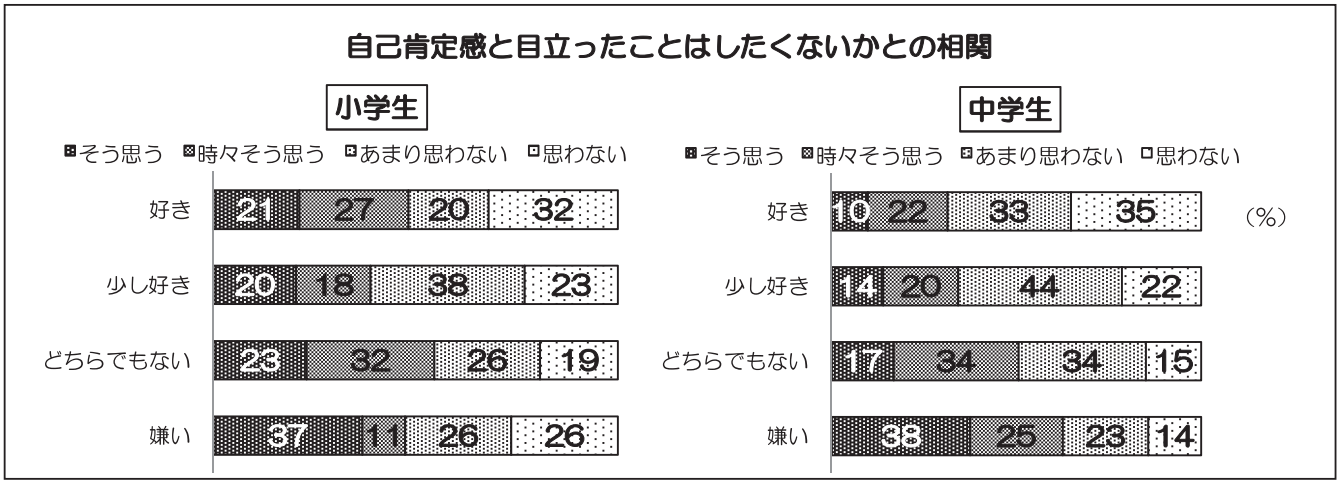
学校生活の中で何事にも積極的な子と消極的に見える子がいる。単なる性格や気質の違いとするのでなく、自己肯定感という視点から考えてみたい。「自己肯定感の高い子ほど、授業中の発表だけでなく学級役員、児童会・生徒会役員などクラスや学年、学校の『代表』となることに対しても積極的である」という仮説のもと、子どもたちの自治的活動に対する意識を探った。

「学級の役員などすすんでやりたい」と「自己肯定感」の相関についてみると、小学生では自分のことを「嫌い」と回答した子のうち「やりたいと思わない」を選択した子が 30%に対し、「やりたいと思う」を選択した子が 25%いた。「自己肯定感の低い子が自治的活動に消極的だ」とは必ずしも言えない。しかし、中学生になるとこの傾向は一変する。自分のことを「嫌い」と回答した子が役員を「やりたいと思う」「少し思う」を合わせても 15%にしか届かず、逆に「やりたいと思わない」が 61%、「あまり思わない」と合わせると約 85%もの割合となる。

自己肯定感と学級の役員などすすんでやりたいかとの相関



「目立ったことはしたくないか」という問いについては、小中学生とも自己肯定感との相関が見られた（次ページグラフ）。「目立ったこと」というと、授業で目立つのか、休み時間に目立つのか、プラスの意味で目立つのか、マイナスの意味で目立つのか、様々な場面が考えられるが、今回の調査では、「授業やクラスの話し合いで意見を発表することについて」の９項目の質問のうちの一つとして聞いた。つまり、ここでの「目立ったこと」というのは、クラスの中で発言を多くしたり、活躍したりする「プラス」の意味合いをもっている。同じく、クラスの中での役員や児童会・生徒会の役員、つまり積極的に自治的な活動に臨むことも、子どもたちにとって「目立ったこと」に位置付くのではないかと捉えた。



いずれも自分のことを「嫌い」と回答した子は「目立ったことはしたくない」と思う傾向が強いことがわかる。自己肯定感の高い子は、発表を積極的にして授業で活躍すること、学級の役員などになって目立つことに対して抵抗を感じないが、自己肯定感の低い子は抵抗を感じている。小学生に比べ、中学生の方がこの傾向がはっきりしてくる。

自己肯定感を育て自分のもつ「よさ」を発揮できる子に

一般的に小学校では３年生ごろから「学級委員」などとして自治的活動に徐々にかかわり始め、５年生から「委員会活動」「児童会活動」など、どの子も自治的活動にかかわる機会が増える。さらに、中学生になり、「専門委員会」「生徒会活動」などがより活発になっていく。そうした中で「成功経験」「失敗経験」を積み重ね、子どもたちは自分の能力や向き不向きを感じ、「代表」として人前に立って活躍したいと思う子と「代表」でなくとも地道にコツコツ活動したいと思う子が生まれてくるのだろう。全員が「人前に立つような人」である必要はないが、自分のもつ「よさ」を学級や学校の中で、更には社会の中で発揮できる子にしていきたいものである。

column

「めんどくさい」こととどう向き合うか

子どもたちの自己肯定感は「とにかくほめていれば高まっていく」ものだろうか？本調査での調査項目にもあった「意見を発表するのはめんどう」という問いに対し、「そう思う・ときどきそう思う」の合計が小学生の26%であるのに、中学生になると44%にはね上がる。発表だけにとどまらず、ここで取り上げた「学級役員や児童会・生徒会役員などになること」、行事などの練習、宿題、掃除、挨拶…様々なところで子どもたちからは「めんどう」という言葉が発せられる。「めんどくさい」という気持ちをもちながらそれを乗り越えるか、あるいは「めんどう」だからやめてしまうのかでは大きな違いである。自己肯定感は、困難を乗り越えたときに達成感や満足感を味わうことでも高められる。

生活が大変便利になっている今の世の中で生きている子どもたちに対し、わたしたちは「めんどう」なことにどう向き合わせたらよいのだろうか…。

（3） いじめ

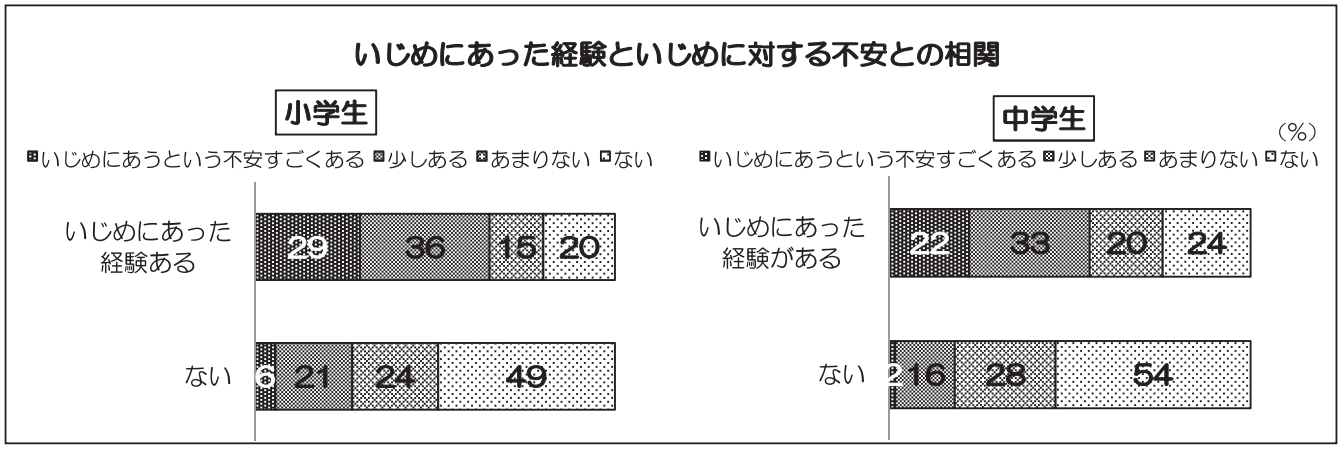
2010年９月に発表された文科省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、「小・中・高・特別支援学校における、いじめの認知件数は約７万３千件と、前年度（約８万５千件）より約１万２千件減少している」と公表されたものの、痛ましい「いじめによる自死」の報道が後を絶たない。

「いじめ」のない学校、「いじめ」の起こらない子どもたちの人間関係づくりがなされることを願って、分析した結果を報告する。

◇◆自己肯定感を壊す「いじめ」

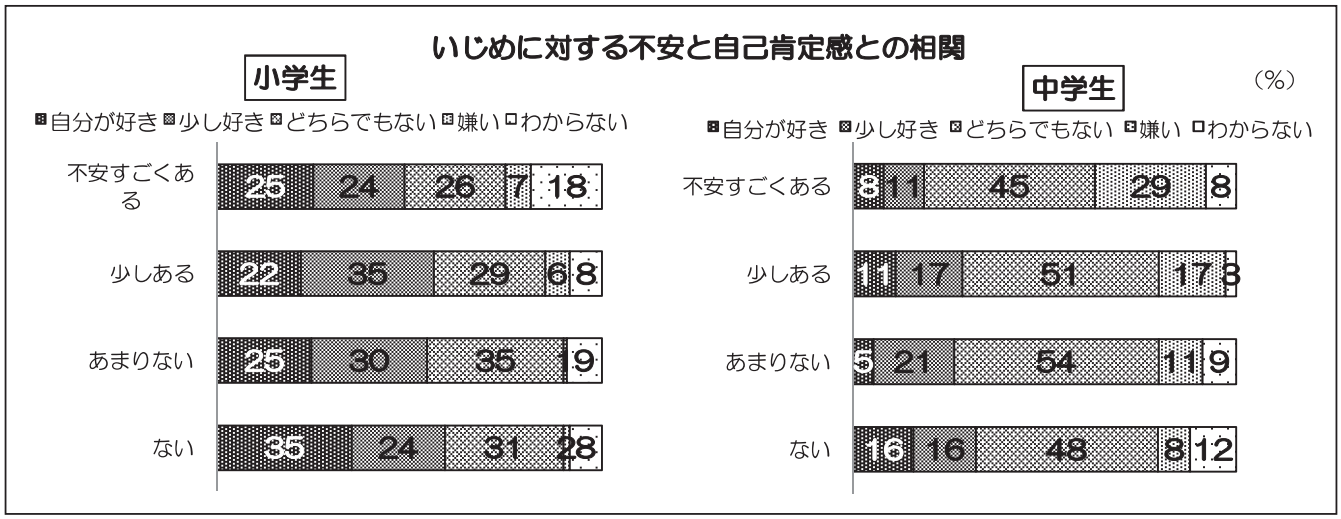
今回の調査では「いじめ」に対する定義付けをせずに調査を行った。子どもたちが「いじめ」と捉えているものを実態としてとりあげることとする。

まず、「いじめにあった経験」と「いじめにあう不安」との相関関係を探る。小学生、中学生とも「いじめにあった経験のある子」の５割以上が「いじめにあう」不安を感じている。逆に、「いじめ」にあったことのない子の７～８割が不安は「ない」「あまりない」と回答している。



「いじめにあうこと」と「自己肯定感」の間には関連があるのだろうか。「いじめにあうという不安」と「自己肯定感」との相関を見てみる。自己肯定感の高い子はいじめにあう不安を感じている子が少なく、自己肯定感が低い子ほど不安が大きい傾向にある。

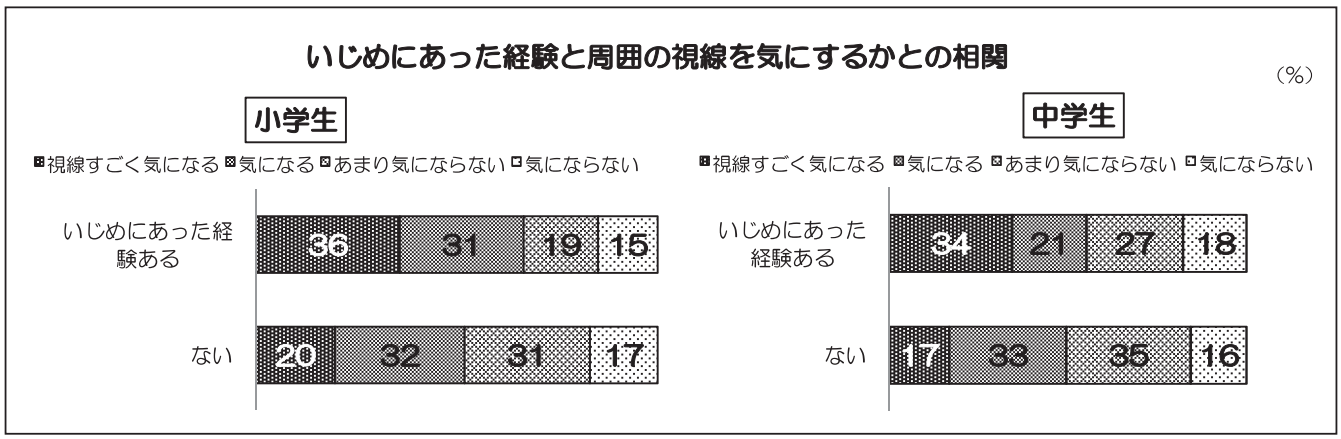
また、上のグラフと下のグラフ、双方に言えることだが、中学生の方がいじめにあう「不安がない」を選択する割合が大きくなっている。中学生は様々な経験を経て、「いじめ」に対する対処の仕方や「いじめ」に発展しないように人間関係をメンテナンスする方法が身についてきたとも考えられる。



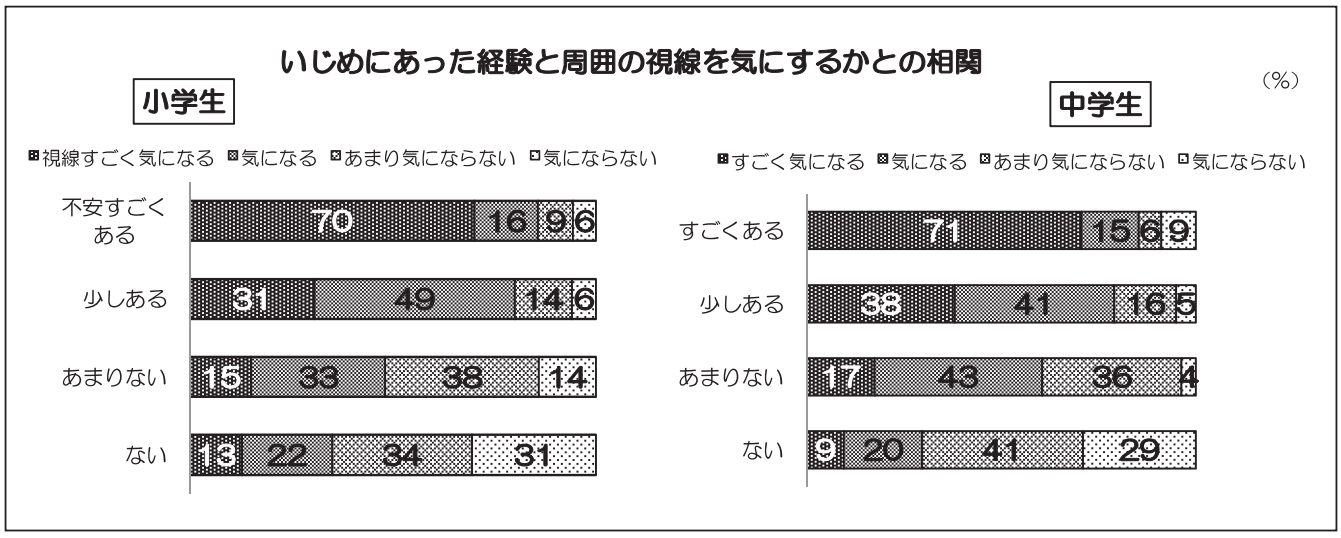
◇◆「いじめ」の影響

「いじめ」が子どもたちの心に与える影響は大きい。「いじめは周囲の視線に神経質になったり、友人関係づくりを消極的にさせたりするであろう」という仮説のもと、「いじめ」と「友人関係づくり」の関係を探ってみる。

「周囲の目を気にしすぎる子が増えている」とよく言われるが、そうしたことと「いじめ」には相関関係があるのだろうか。いじめられた経験と「自分が同じクラスの人からどのように見られているか気になりますか」の問いのクロス集計からは、小中学生ともにいじめられた経験のある子はない子に比べ「どう見られているかすごく気になる」の選択が倍近く増えていることがわかる。

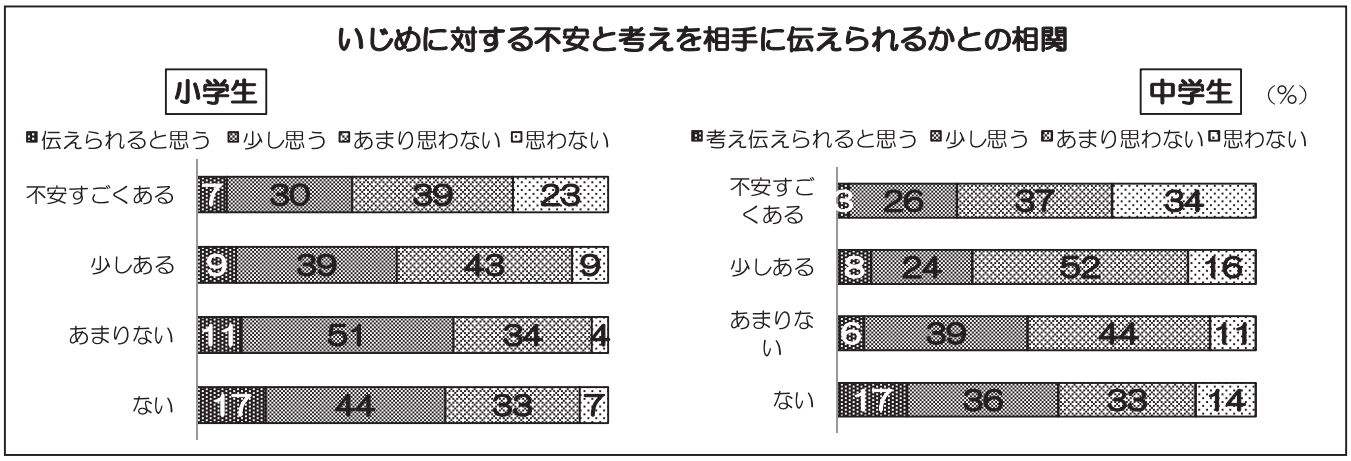


次に、「いじめられるかもしれないという不安」と「周囲の視線が気になるか」との相関を見てみる。「いじめられる不安がすごくある」と回答した子の７割以上が周囲の視線を「すごく気になる」を選択している。両者には極めて高い相関があることがわかる。

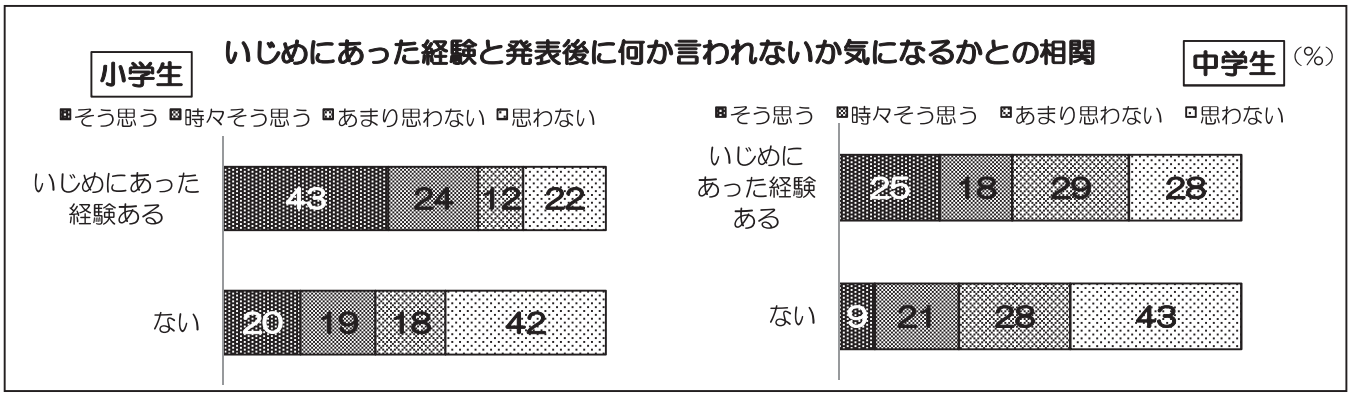


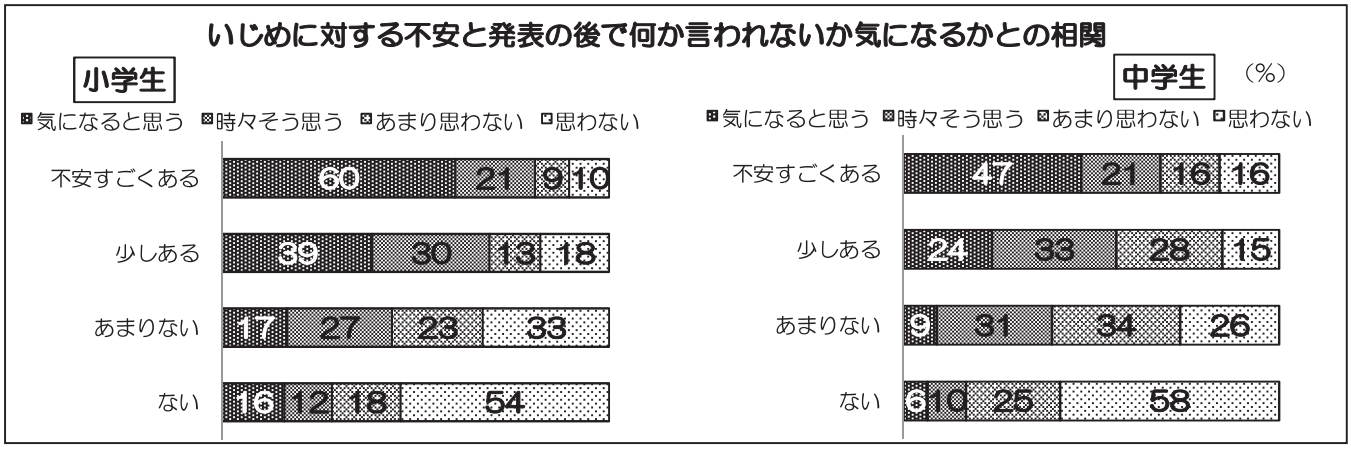
では、いじめに対する不安はどこから生まれてくるのだろうか。それを探る手がかりとして、次のページのようなデータが得られた。「コミュニケーション力、表現力」と「いじめに対する不安」との相関を見てみる。

いじめに対する不安が「ない」「あまりない」と回答している子のうち、小学生で約６割、中学生で約５割が自分の考えを相手に伝えることが「できる」と答えている。つまり、うまく相手に自分の思いを伝えられている子は、いじめに対する不安が少ないという傾向がつかめる。子どもたちのコミュニケーション力や表現力を育成していくことの重要性は、こういった側面からも言えるのかもしれない。



反対に、いじめに対する不安やいじめにあった経験は、どのような影響を与えているのだろうか。「いじめに対する不安」や「いじめにあった経験」は、意見表出を抑え込むのではないかという仮説のもと相関関係を探った。下のグラフを見てほしい。いじめにあった経験よりもいじめにあう不安の方がより影響が大きいことが読み取れる。





何でも言える雰囲気づくり、学級づくりを普段から…

新学習指導要領においても各教科・領域を貫く「言語活動の充実」がうたわれているが、以前からすでにわたしたちは「授業」において、子どもたちの表現力を育てることに力を注いでいる。子どもたちが安心して授業の中で発言するには、やはり「何でも言える雰囲気」のある学級づくりがその基盤であることはいうまでもない。子どもたちの発言意欲を妨げる原因として様々なことが考えられるが、発言後に「クラスメイトから何か言われるかもしれない」という不安からくるものもあるだろう。「発表後に何か言われるのではないか」という不安と「いじめられた経験」、「いじめにあうかもという不安の強弱」との間には、明確な相関関係が認められる。いじめられた経験のある子も、不安を感じている子も、周りから何か言われることを不安に思う割合が高い。あらためて「何でも言える雰囲気づくり、学級づくり」の大切さを強調したい。

（4） 子どもたちの友人関係

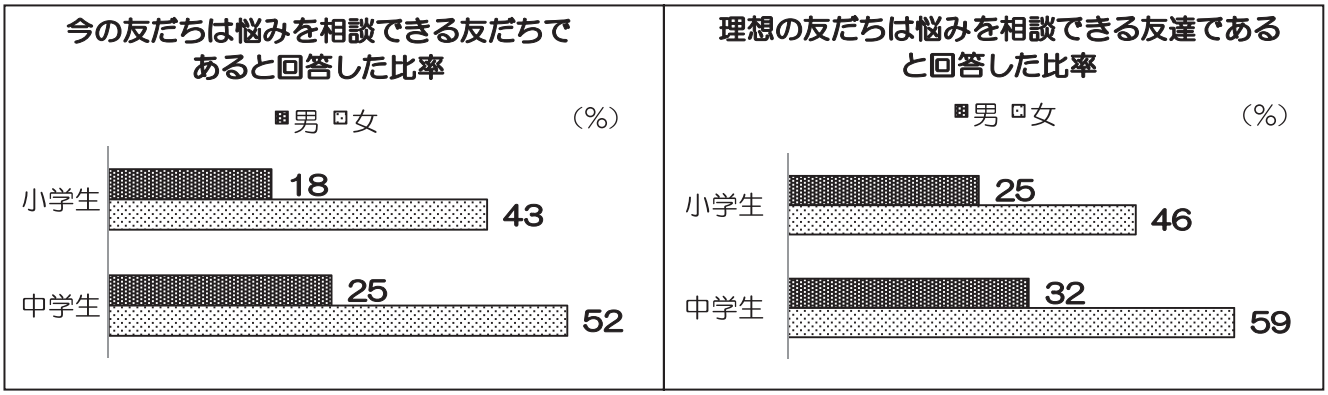
普段楽しそうに過ごしている子どもたち。しかし、子どもたちの視線や言葉のやりとりから微妙な友人関係のきしみをのぞかせる瞬間がある。子どもたちが日々楽しく過ごし、社会的に成長していくために友人の存在は欠くことができない。子どもたちは「友人を大切にしたい」、「ひとりになりたくないから」という思いをもち、友人関係を維持するために様々なことに気を配っているのではないだろうか。子どもたちの友人関係について探る。

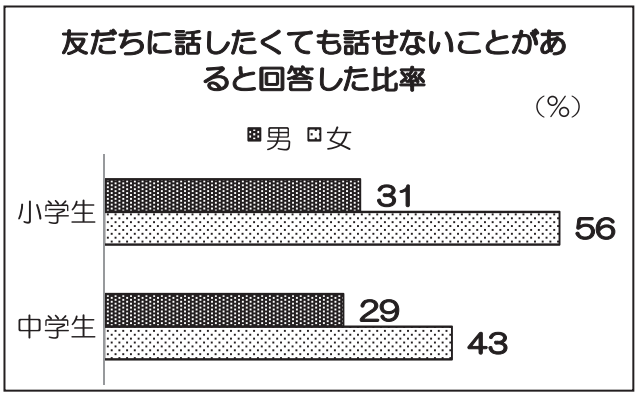
◇◆子どもたちにとって「友だち」とは…？

第１部で子どもたちの友だち観を概観したとき、小学生・中学生問わず、子どもたちが「悩みを相談できる」「やさしい」「気をつかわず話せる」の３つを重視していた。ここでは男女別による集計をもとにもう少し詳しく分析する。

◇◆悩みを相談できる友だちを望む子どもたち

特に「悩みを相談できる」という点については男女の違いが認められた。男子に比べ、女子の方が「悩みを相談できる友だち」を望む友だちを選択する傾向が強いと言える。女子にとって「自分の悩みを相談できる友だち」をつくることが重要なのである。





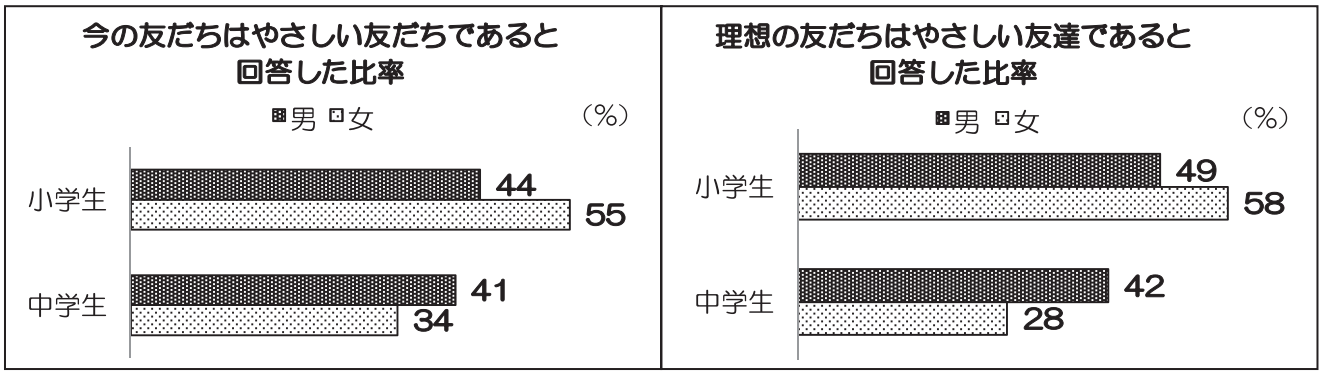
別の問いに、友だちに「話したくても話せないことがあるか」があるが、この割合についても男女によって違いが見られた。女子は男子と比べ、「話したくても話せないことがある」と答えた割合が高い。

小学生女子の 56%に比べ、中学生女子の 43%と割合が下がっていることは、中学生は「悩みを相談できる友だち」を実際に選んでいることとつながっている。小学生のうちは話せなかった悩みなども、中学生になってより深い友人関係を結ぶことによって話せるようになるということだろう。ただ、女子の約半数が「今の友だちは悩みを相談できる友だち」としながら、「話したくても話せないことがある」と答える子どもも 40%以上いることはどういうことなのだろう。今の友だちは相談できる友だちではあるが、全てを打ち明けられるほどではない、あるいは相談したいという思いを十分満たしているとは言えない、ということだろうか。

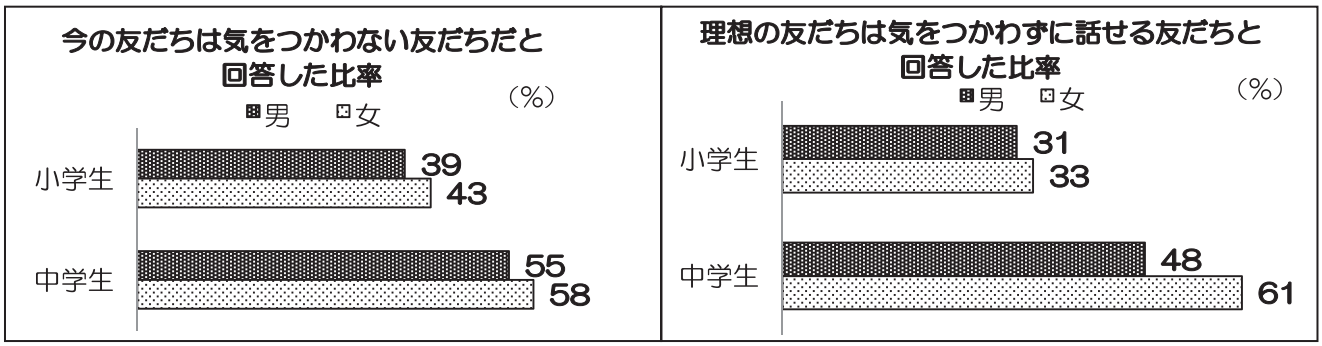
◇◆悩みは「聞いてもらう」より「自分から話したい」女の子たち

分析している中で、気になるデータが出てきた。（下図）「今一番仲良しの友だちはどんな友だちですか」の問いで「やさしい友だち」を選択した子の割合は、男子は小中共にそれほど大きな差がない中が、女子は小学生が 55%に対して中学生が 34%と大きく減少する。

また、「理想の友だちはどんな友だちですか」の問いに「やさしい友だち」を選択した子の割合も同様に、男子に比べ女子は、小学生 58%に対して中学生 28%と 30 ポイントも差がある。中学生になると「やさしい」といった情緒的なものより「相談できる」「気をつかわない」など、より評価しやすい具体的な選択肢を選ばせたのだろうか。それとも、女子の場合中学生になると友だちに「やさしさ」だけを求めなくなるのだろうか。



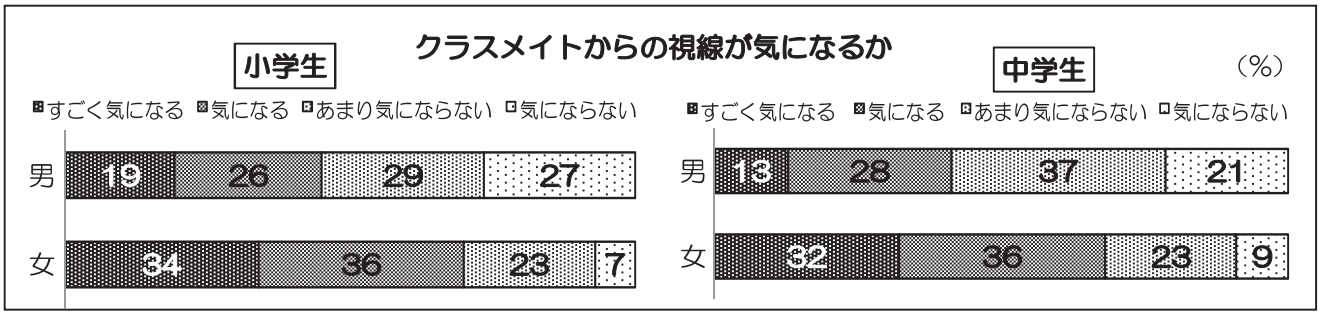
一方、理想の友だちは「気をつかわずに話せる友だち」だと回答した比率は、男女ともに中学生で高くなっている。ここでも女子は男子に比べ、小学生女子 33%に対し、中学生女子は 61%と大きな増加が見られる。小学生よりも中学生の方が「気をつかわない相手」を望み、その傾向は女子に強いこともわかる。



悩みを相談できる友だちや気をつかわずに話せる友だちを望みながら、やさしさを重視しなくなる…そんな微妙な女子の心理状況がうかがえる。中学生になると単なる「やさしい友だち」より、自分を受け止めてほしい時に受け止めてくれる相手（友だち）を必要としているのかもしれない。

◇◆クラスメイトからどう見られているのか気にする女の子たち

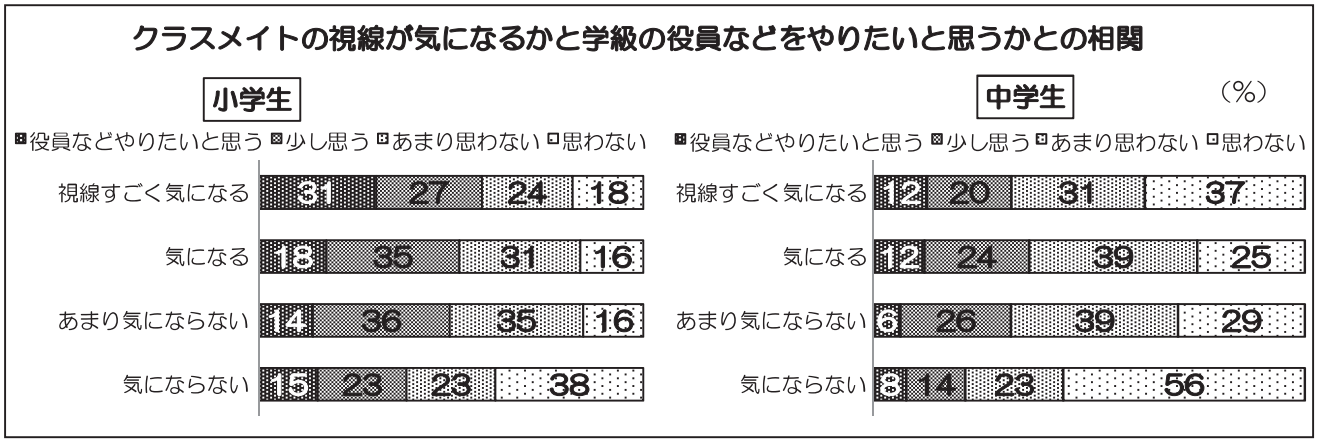
クラスメイトからどう見られているのか気にする傾向については先にも触れたが、もう少し詳しい分析をしたい。まず次ページの男女別のデータを見てほしい。小学生、中学生ともに同じ傾向がみられるのだが、「すごく気になる」「気になる」の合計で男子が 40%なのに対して、女子は 66%と男子を大きく上回っている。クラスメイトの視線を気にすることは「空気を読み」周りに合わせたり、グループに所属することによって自分が傷つくことを回避したりすることにつながるのではないだろうか。



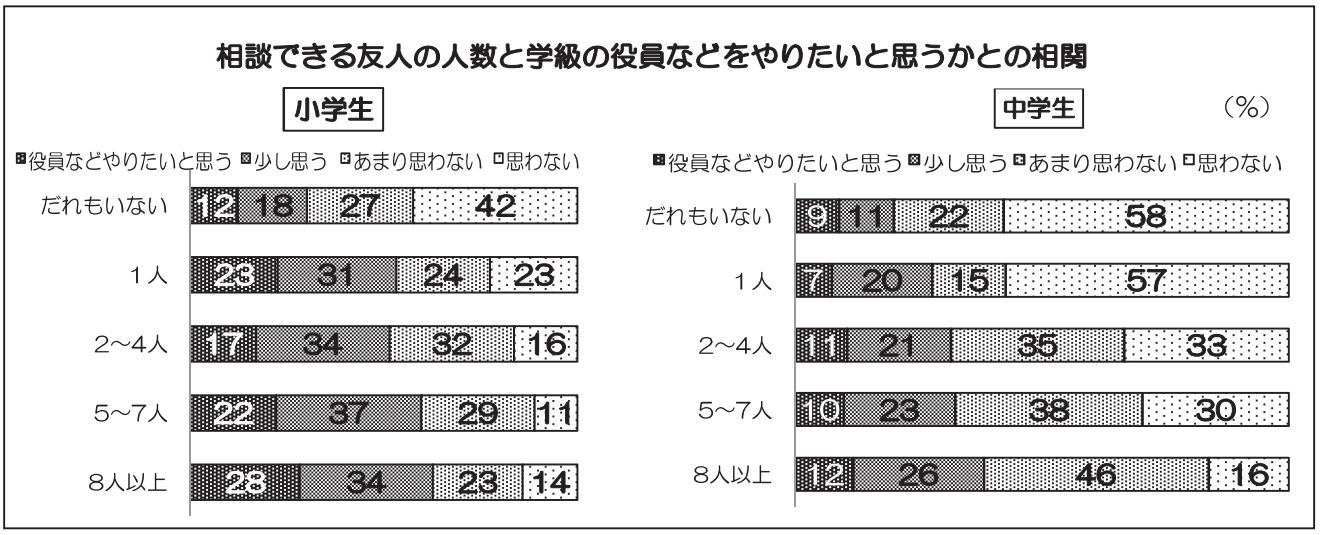
◇◆目立った行動を避けようとする子どもたち！？

「クラスメイトの視線が気になる」子どもたちは、自分の発言や行動を自制するということはないだろうか。例えば、「発表ばっかりしていい子ぶっている」とか「役員になって目立とうとしている」などの中傷を受けないようにするには、目立たないように学校生活を送ることが無難な選択だから。授業中の発表や学級委員や児童会・生徒会役員になることについて詳しく見ていきたい。

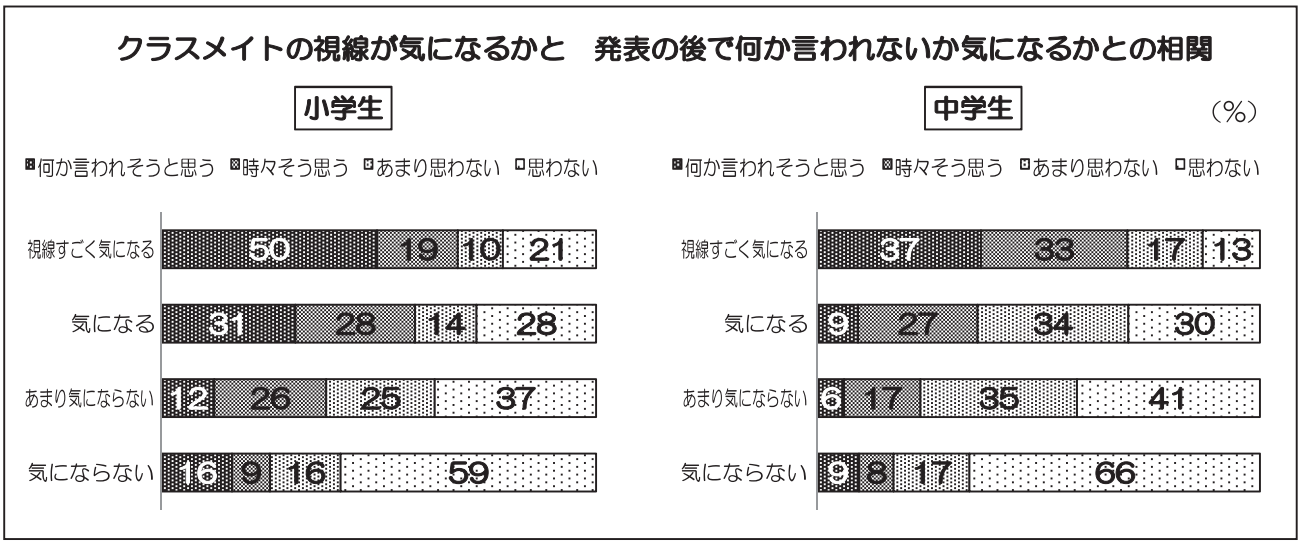
次のグラフを見てほしい。「クラスメイトの視線が気になる」と「学級の役員などをすすんでやりたいと思う」のクロス集計結果である。「クラスメイトの視線が気になる子ほど役員などをやりたいと思わない」という仮説を立てたが、データを見る限り必ずしもそうとは言えない。小学生では、視線がすごく気になるという子が役員をすすんでやりたいと思う割合が高い。小中学生ともに、視線が気にならないという子も役員などやりたくないと思っている割合も高い。



「相談できる友人が多い子」ほど「学級の役員などすすんでやりたい」と思う傾向が見られる。小学生では、「８人以上相談できる子がいる」と答えた子の 62%が「やりたいと思う」「少し思う」と答えている。自分の心を開いて話せる友人の存在は、学校生活を送る上での自信となり、周りからどう見られているのかを気にせず、自分を表現したり、自主的・積極的に学校での活動にとりくんだりすることができるのだろう。また、そのような子どもだから友人の人数も多いということなのだろう。



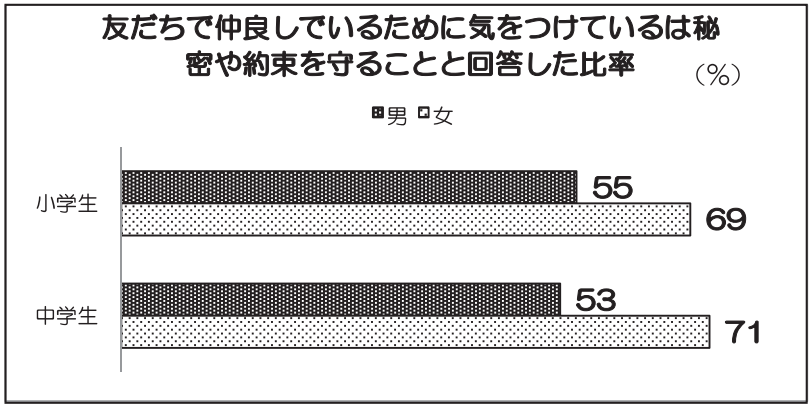
クラスメイトの視線が気になる子は、小学生・中学生問わず授業中の発表についてもためらっている様子がうかがえる。

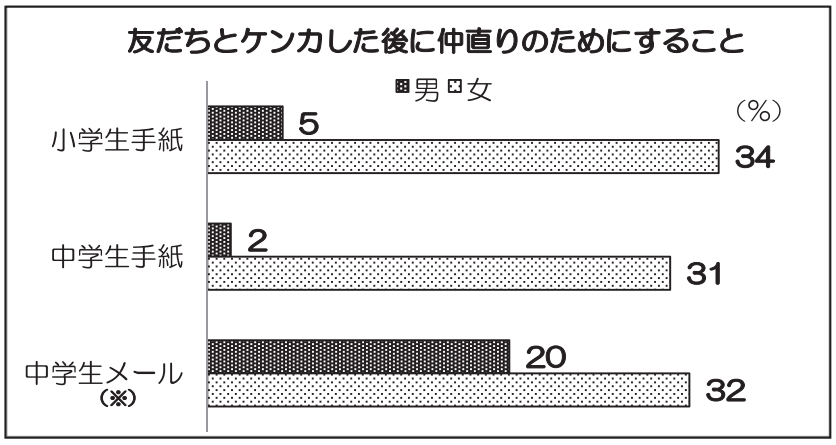


◇◆友人関係をメンテナンスする子どもたち

友人関係を維持するためのメンテナンスについては第１部において概観したが、友人関係を維持するための方策として「秘密や約束を守ること」「悪口を言わない」の二項目が圧倒的に支持されている。いずれも友人関係を維持するためだけでなく、社会生活を営む上での要件である。子どもたちが身につけている感覚は非常に健全だと言える。ここでは、性別による違いを見ておく。友人関係を維持するために気をつけていることとして「秘密や約束を守ること」と回答した男女の比率を見ると、女子の回答が小・中学生共に男子を大きく上回っている。先に述べたように、「悩みを相談する友だちを望む傾向」と「友人関係維持には秘密を守ることが必要と考えること」にはつながりが見られる。

友人関係を維持するためのメンテナンスだけでなく、友人関係を修復するためのメンテナンスも必要である。友だちとケンカした後に仲直りするために行う手段として、女子は手紙を書くことが多いことがデータからわかる。手紙に替わりメールが使われることも増えているのだろう。





仲直りするために「特別なことはしない」と回答した比率は、全体的に低いが、女子はさらに低い比率となる。多くの子どもたちは何かしら手段を選んで、関係を修復しようとする。

（※）中学生のうち携帯電話をもっている子の中での割合

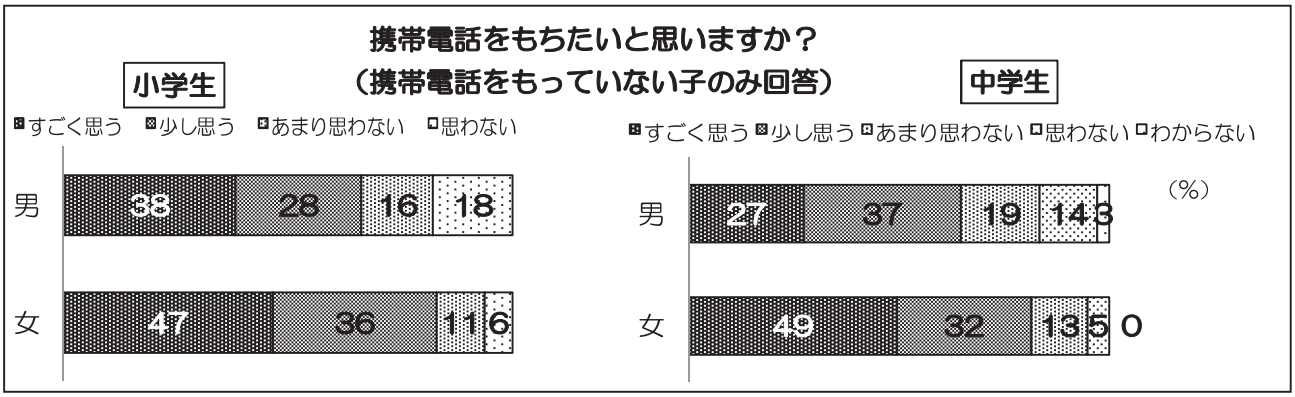
（5）友人関係とケータイ

携帯電話が急激に普及した。2010 年内閣府「消費動向調査」では携帯電話の世帯普及率は 92.4％となっている。こうした状況は小中学生にも大きく影響を与えている。ベネッセ教育開発センターの「子どものＩＣＴ利用実態調査報告書」（2009 年）では中学生の携帯電話所有率は約６割、小学生高学年でも約３割となり、今後新たな端末が出てこない限り、子どもたちの携帯電話所有率が減少することはないであろうと考えられる。携帯電話は様々な機能をもつ大変便利なツールである一方、子どもたちに与える影響についても常に問題になっている。子どもたちは「ケータイ」を友だちとのコミュニケーションツールとしてのどのように使っているのだろう…。静岡の子どもたちの実態を探る。

◇◆今どきの静岡っ子のケータイ事情

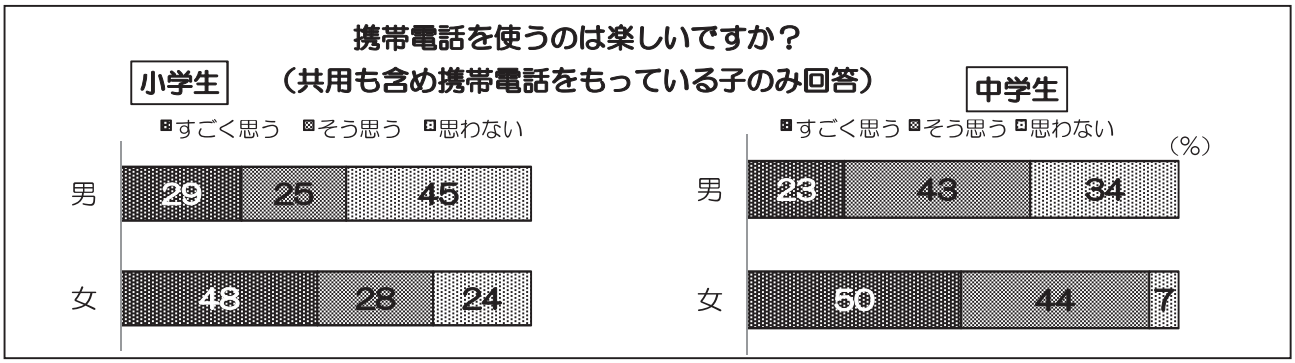
静岡の子どもたちのケータイ所持率（自分専用＋共用）は小学５年で 24％、中学２年で 49％であることは先に述べた。上述したベネッセの調査（2009 年）では小学５年 31％、中学２年 48％となっている。全国平均と比べて、やや所持率が低い結果が出ている。子どもたちのケータイに対する思いや使い方の実際はどんなものなのだろうか。

まず、ケータイをもっていない子たちのケータイに対する「憧れ」を見てみる。小中学生とも、女子の方がケータイをもちたいという気持ちは強く、約５割の子がケータイを「すごくもちたいと思う」と答えている。「少し思う」も含めると８割にものぼる。



次に既にケータイをもっている子の満足度を見る。男女別、小中別に見ると興味深いことが見えてくる。「ケータイを使うのは楽しいか」の問いに対し、「すごく楽しい」「楽しい」を含めると小学生女子で 76％、中学生女子で 94％、一方で男子は小学生 45％、中学生 34％が「楽しいと思わない」「あまり楽しいと思わない」を選択している。女子の方がケータイに対する満足度は圧倒的に高い。コミュニケーションのとり方の違いがうかがえる。

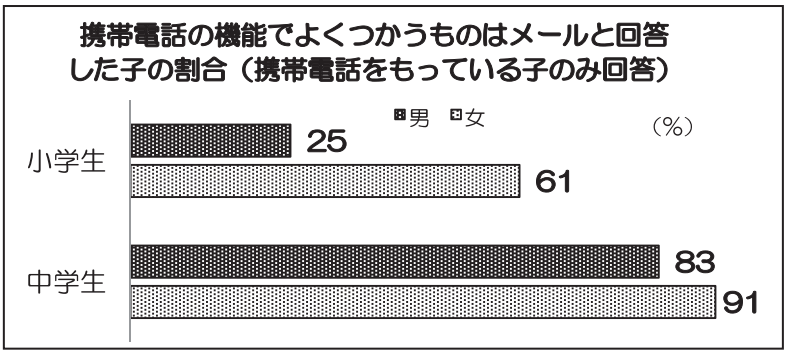
中学生男子の「すごく楽しい」を選択した割合が小学生よりも減少するということも興味深い。男子はケータイの他にゲーム、パソコンなど別のアイテムが存在し、そこでのコミュニケーションがあることがその要因なのかもしれない。

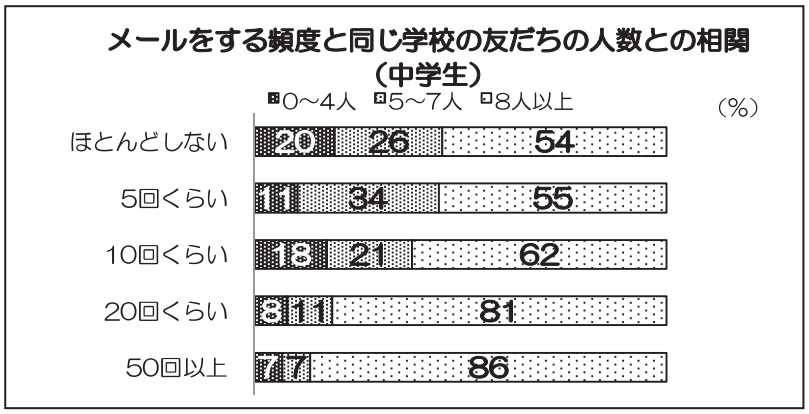


◇◆中学生はケータイメールに夢中！？

次に、子どもたちのケータイの使い方について、第１部では見えてこなかった側面からみてみたい。

携帯電話の機能の中でよく使われるものは「メール」が圧倒的に多いのだが、男女別、小中別に見るとそれぞれの違いも見えてくる。女子について見ると、小学生の段階からメールをよくつかう子は、携帯電話をもっている子のうちの約 60%、その後中学生で約 90%と伸びる。男子については、小学生では携帯電話をもっている子のうちの 25%だが、中学生になると 83%と一気に高くなる。





次のグラフからは、友だちの人数とメールの回数との関係が見える。メールを送信する回数が多い子ほど友だちの人数が多いことがわかる。友だちが多いからメールの回数が増えているとも解釈できるだろう。

ケータイによって友だち関係が広がるのであるならば、歓迎すべきだが…。

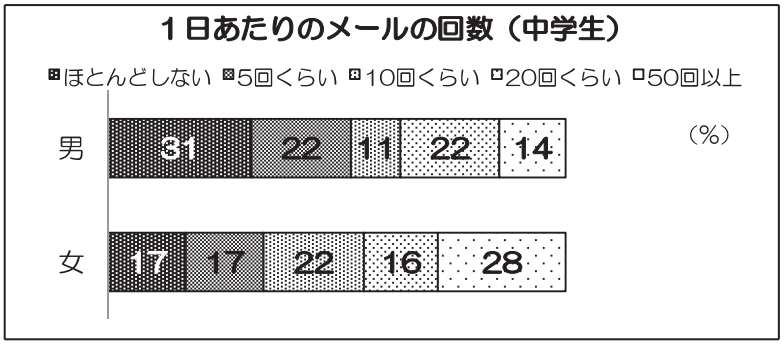
「ケータイをもたせる・もたせない」の議論から一歩前に

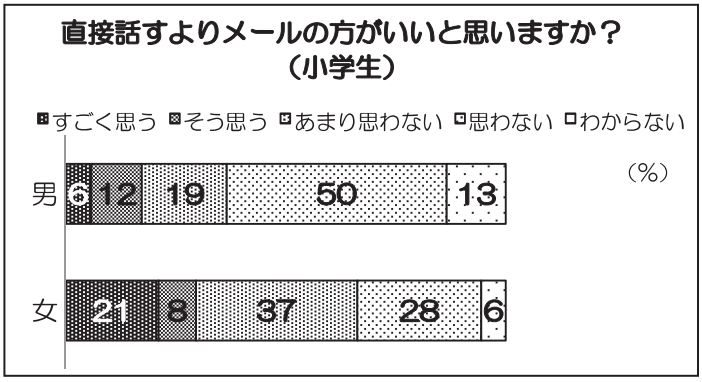
ケータイでインターネットを活用する割合も女子が高く、中学２年生で 36%となっている。今のところ高い数値とは言えないが、今後が気になる。ケータイの機能の中でよく使うものとして「インターネット」を選択した子は、単なるインターネットでの情報の検索をしているだけとは考えにくい。「プロフィールサイト（プロフ）」「デコレーションメール（デコメ）」「リアルタイムブログ、リアルタイム日記（リアル…ツイッターの中高生版）」「学校裏サイト」「ゲームサイト」（詳しくは 2010 年３月に発行した本研究所の「ケータイと子どもたち」P.8 ～ 10 を参照）など幅広い活用をしていることが予想される。ケータイは、友だちとのこれまでになかった新たなコミュニケーションツールとして、子どもたちの友だち関係の広がりをつくり出すことも可能であるが、いろいろなメディアで警鐘が鳴らされてきたようにケータイから事件に巻き込まれる可能性もあるが、これだけ普及し、保護者も教職員もケータイを活用している時代に、「ケータイをもつな・もたせるな」と「臭いものにはふたをして」も、この問題は解決していかないであろう。

子どもたちのケータイの使い方には十分留意していきたい。学校でも早い段階で、よりよいケータイとのつきあい方とともに「ケータイのもつ危険性」を教えていく必要があるだろう。家庭でも、使い方やルールを話し合ってからケータイをもたせる必要があるだろう。

◇◆ 子どもたちにとって「大切なもの」ではあるが「絶対のもの」ではない？

中学生はどれくらい頻繁にメールしているのだろうか。中学生男子の 64%、女子の 56%が１日あたりのメールの回数は 10 回以内である。しかし、女子で 50 回以上と答えた子が 28%いることは大変気になる数字である。

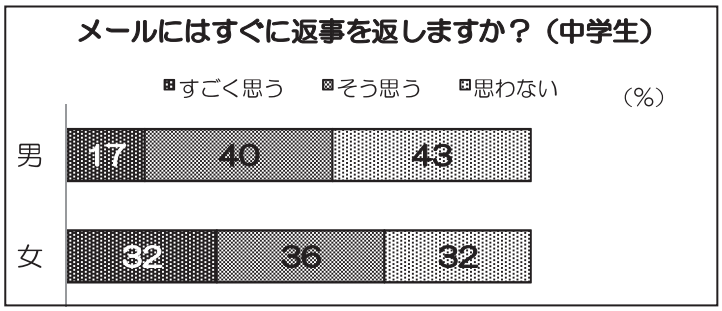


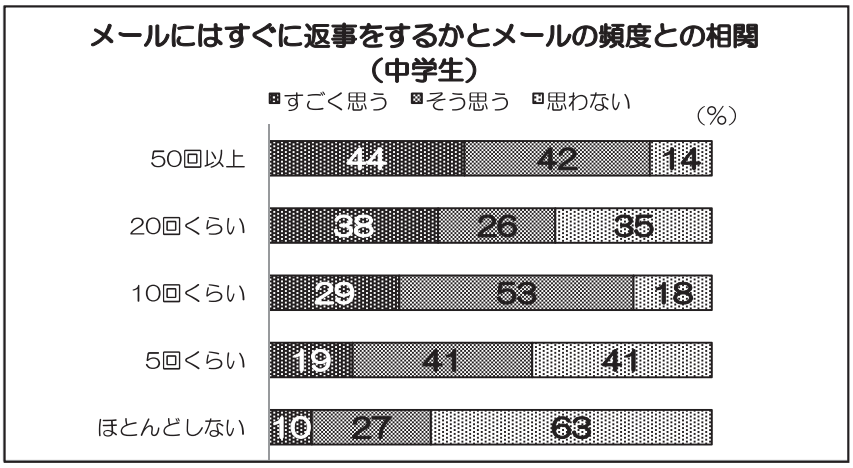


子どもたちはメールについてどのように考えているのだろう。

「直接話すよりメールの方がいいと思いますか」の質問に対する答えを男女別で見ると、男子においては80%、女子においては69%の子が「そうは思わない」「あまり思わない」と回答している。やはり直接話すことの方が自分の思いが相手に伝わると感じているのだろう。

子どもたちは、メールの返信に過剰な神経をつかっているのだろうか。メールにはすぐに返事を返しますかの問いに対し、「すごく思う」「思う」と回答した子は男子で57%、女子は68%にものぼる。ただし、全員に「すぐに返信しなければ」という意識があるわけではないようである。

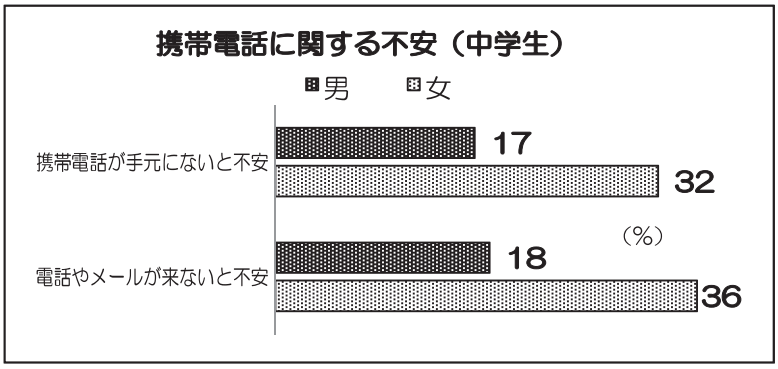




もう少し詳しく見てみよう。左図はメールをする頻度とのクロス集計である。すぐにメールを返そうと「すごく思う」に回答した子の比率がメールをする頻度に比例して増えている。中学生のメールの頻度は各項目で 10%～20%である（単純集計 P. 20 参照）ことから考えると、実際に返信に過敏になって多くのメールを送っている中学生はごく限られた子たちと言える。ただし、1日に50回以上メールをしている子ども（ケータイをもっている中学生全体の19%）のうち、メールに過敏になりすぎている44%の子たちについては大変気になるところである。

さらにケータイに対する子どもたちの心理を、特に中学生にしぼって探ってみたい。

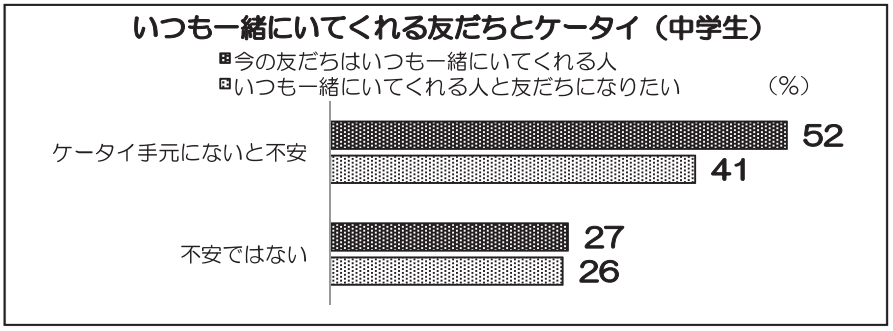
ケータイがないと「不安」「すごく不安」と感じている子については、中学生全体では 24%という結果だったが（単純集計 P. 21 参照）、男女別に見てみると大きく違いが出てくる。男子が 17%であるのに対し、女子は 32%と倍の数値となる。電話やメールが来ないと不安かという問いでもこれと同様の結果が出た。



メールなどを通して友だちどうしでつながりあっていることを実感したいのだろうか。その裏側には、孤独感やさみしさがあるのだろうか。

Q18「今、一番仲良しの友だちはどんな人ですか？」において「いつも一緒にいてくれる人」を選択した子どもたちのうち、ケータイがないと「不安である」と答えた子は52%、「不安ではない」と比較して25ポイントの差がある（次ページグラフ）。

また、Q19「どんな人と友だちになりたいと思いますか」において「いつも一緒にいてくれる人」を選択した子どもたちのうち、ケータイがないと「不安である」と答えた子は 41％で「不安ではない」と比較して 15 ポイントの差がある。いずれも、ケータイがないと不安と感じる子は「いつも一緒にいてくれる人」を欲している傾向にあることがわかる。



子どもたちに“１人ではない”という安心感を…家庭でも、学校でも

ケータイをもつ女子の３人に１人は「ケータイがないことに対する不安」「誰からも連絡がないことに対する不安」をもっていることが調査から明らかになった。ケータイ依存の裏側にはやはり孤独感があるのだろうか。確かにケータイは、機能がたくさんあり便利なツールである。しかし、これまで子どもたちのケータイの使い方をみてきたが、やはり中学生の間では単なる“おしゃれアイテム”“お遊びツール”ではないようである。思春期の不安定な気持ちの中で自分と向き合い、「誰かに支えてほしい」「誰かとつながっていたい」という中学生特有の心理状態を表しているのがこの「ケータイの利用状況」であろうか。先のコラムでもあげたが、日本の子どもたちの孤独感を感じる割合の高さ、自己肯定感の低さのデータとも関連付けて、ケータイと上手に付き合える子どもたちにしたいものである。家庭や学校において、わたしたち大人には何ができるだろうか…。

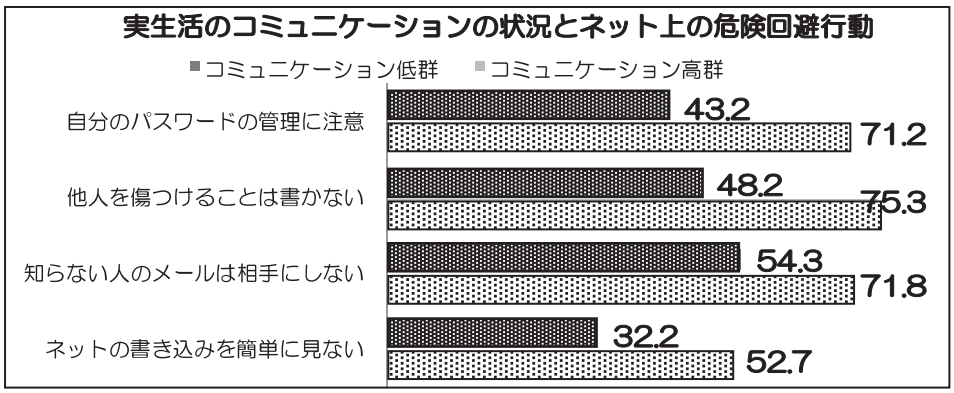
column

情報モラル教育の推進とともに…まずは実生活のコミュニケーションこそ

今回の調査では、静岡県の中学生の携帯電話によるインターネット利用の割合は28％、中学生全体の14％にあたることがわかった。健全な活用を願っているわけだが、携帯電話がもとで事件に巻き込まれるケースは決して少なくはない。2010年度中に出会い系サイトを利用して犯罪被害に遭った児童（18歳未満の者）は全国で254人（前年比-199人）と各種規制の結果減少したものの、コミュニティサイト（非出会い系サイト）を利用して犯罪被害に遭った児童は1239人と前年と比較すると103人増加している。出会い系サイトで被害に遭った児童の98.8％は携帯電話からのアクセスであること、被害者のほとんどが女子であること、コミュニティサイトでは被害者の低年齢化がすすんでいることなども同時に報告されている（2011年2月警察庁）。

2011年度から実施される学習指導要領にも「情報モラル」という文言が並ぶ。教職員は今まで以上に高い意識をもちながら情報モラル教育をすすめていかねばならない。

一方で興味深いデータがある。2009年の警視庁の調査を見ると、保護者や教職員、友人などとのコミュニケーションが良好な場合（コミュニケーション高群）は、そうではない場合（コミュニケーション低群）に比べ、インターネット上の危険性を回避する行動をとっている者の割合が高くなっている。これは、ケータイの問題だけで対処を急ぐ以前に、まずは子どもたちの実生活における人間関係を良好に保つことの重要性を物語っている。わたしたちは子どもたちの人間関係を見守ると同時によりよいコミュニケーション力を育んでいく必要性があるのではないか。



「子どもの人間関係づくりに関する調査」集計結果

・調査結果について校種(小・中学校)別の集計結果を示す。
・表の１行目に選択肢を数字で、２行目３行目に小学生と中学生の回答数を百分率(%)で示した。
　無答や判読ができないものについての集計結果はNAの欄に記載した。
　百分率で表示する際、少数第２位を四捨五入した。そのため回答の合計が100%にならない場合がある。
・ｎは回答者の実数を示した。

Ⅰ　はじめにあなたのことを教えてください。

（1）あなたの性別は？
１：男　２：女

	1	2	NA	n
小学生	49.6	50.2	0.2	558
中学生	51.9	48.1	0.0	489

（2）いっしょに住んでいる家族は何人ですか？(自分も入れて)
１：２人　２：３人　３：４人　４：５人　５：６人　６：７人　７：８人以上

	1	2	3	4	5	6	7	NA	n
小学生	1.4	11.8	33.3	22.0	17.7	8.8	4.5	0.4	558
中学生	1.4	9.8	36.8	21.7	14.7	11.2	4.1	0.2	489

（3）きょうだいは何人ですか？(自分も入れて)
１：１人　２：２人　３：３人　４：４人　５：５人以上

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	14.2	51.3	26.9	5.7	1.4	0.5	558
中学生	9.4	49.1	34.2	5.7	1.4	0.2	489

（4）あなた専用の部屋はありますか？
１：自分だけの部屋がある　２：きょうだいと一緒に使う部屋がある　３：ない

	1	2	3	NA	n
小学生	41.6	42.5	15.8	0.2	558
中学生	65.4	24.3	10.2	0.0	489

（5）家にインターネットが使えるパソコンがありますか？
１：ある　２：ない　３：わからない

	1	2	3	NA	n
小学生	76.7	16.5	6.5	0.4	558
中学生	83.4	14.5	2.0	0.0	489

（6）塾や習い事・スポーツクラブに行っていますか？
１：行ってる　２：行っていない　３：わからない

	1	2	3	NA	n
小学生	81.7	16.7	1.4	0.2	558
中学生	71.2	27.2	1.4	0.2	489

（7）あなたは自分のことが好きですか？
１：好き　２：少し好き　３：どちらでもない　４：嫌い　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	27.4	28.0	30.8	3.6	10.2	0.0	558
中学生	10.6	16.8	50.3	12.7	9.6	0.0	489

（8）あなたは勉強や部活などをがんばっていると思いますか？
１：思う　２：少し思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	25.8	53.6	13.3	2.9	4.3	0.2	558
中学生	26.4	46.4	17.4	4.9	4.9	0.0	489

（9）あなたのがんばりを認めたり、ほめたりしてくれるのは誰ですか？　(当てはまるもの全部に○)
１：友だち　２：親　３：祖父母　４：きょうだい　５：学校の先生　６：塾の先生　７：近所の人
８：その他の人　９：だれもいない　10：わからない

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	NA	n
小学生	60.9	83.7	59.1	28.5	43.7	26.0	23.5	9.5	2.0	3.8	0.0	558
中学生	54.2	61.6	32.7	16.0	27.0	18.8	11.7	8.4	3.7	14.9	0.0	489

(10) あなたはどんなことをほめられるとうれしいと感じますか？　（当てはまるもの３つ以内に○）
１：手伝いや生活態度　２：勉強や部活・習い事などの努力　３：テストや試合の結果　４：性格
５：家族や友だちへの接し方　６：容姿や服装のセンス　７：他の人に役立つ行動　８：その他　９：特にない
10：わからない

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	NA	n
小学生	33.0	69.2	48.9	12.4	14.3	10.6	23.5	2.7	6.3	2.5	2.3	558
中学生	17.6	48.3	43.1	20.4	9.6	13.5	20.0	4.7	10.0	7.2	3.3	489

(11) 自分の将来を考えるとき、どんなことが大切だと思いますか？　（当てはまるもの３つ以内に○）
１：経済的に豊かである　２：友だちがたくさんいる　３：趣味を楽しむ　４：家族と仲良くくらす
５：一流の大学や企業(会社)に入る　６：時間の余裕をもってのんびりとくらす　７：人のために役立つ活動をする
８：やりがいのある仕事をする　９：その他　10：わからない

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	NA	n
小学生	17.4	55.2	26.3	48.2	9.1	7.3	43.4	49.6	2.7	0.9	1.4	558
中学生	34.2	30.5	40.7	27.4	7.2	20.0	30.1	40.5	2.2	5.5	4.7	489

(12) 将来、やってみたい仕事がありますか？
１：ある　２：ない　３：考えたことがない　４：わからない

	1	2	3	4	NA	n
小学生	74.2	7.3	9.5	8.8	0.2	558
中学生	55.2	11.5	10.8	22.3	0.2	489

＊「ある」と答えた人は、どのようなことをやってみたいと考えていますか？(結果は54～55ページに掲載)

(13) 将来、仕事以外で(趣味やボランティアなど)やってみたいことありますか？
１：ある　２：ない　３：考えたことがない　４：わからない

	1	2	3	4	NA	n
小学生	31.0	20.6	29.0	18.5	0.9	558
中学生	19.2	19.6	34.4	26.0	0.8	489

Ⅱ　あなたの友だちのことを教えてください。

(14) あなたには、次のような友だちは何人ぐらいいますか？　（当てはまる番号に○）
①同じ学校で仲のよい友だち
１：１人　２：２～４人　３：５～７人　４：８人以上　５：だれもいない(０人)

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	2.5	9.3	17.7	65.6	3.2	1.6	558
中学生	1.4	11.7	17.8	67.3	1.2	0.6	489

②違う学校で仲のよい友だち
１：１人　２：２～４人　３：５～７人　４：８人以上　５：だれもいない(０人)

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	9.1	28.7	17.0	31.9	10.6	2.7	558
中学生	9.0	29.0	15.1	30.3	15.7	0.8	489

③なやみごとなど相談できる友だち
１：１人　２：２～４人　３：５～７人　４：８人以上　５：だれもいない(０人)

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	11.6	34.1	18.6	17.9	14.2	3.6	558
中学生	11.0	48.5	15.7	14.3	9.6	0.8	489

④メールをよくする友だち
１：１人　２：２～４人　３：５～７人　４：８人以上　５：だれもいない(０人)・メールをしない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	5.4	5.0	1.6	2.2	81.7	4.1	558
中学生	3.7	21.5	11.2	21.1	41.7	0.8	489

(15) あなたが友だちとよく話すこと(直接会って話すこと)はどのようなことですか？
(メールについては次の質問で行います)　（当てはまるもの全部に○）
１：友だちのこと　２：先生のこと　３：遊びのこと　４：テレビのこと　５：塾のこと　６：服装のこと
７：持ち物のこと　８：異性のこと　９：勉強のこと　10：スポーツ少年団や部活のこと　11：学校のこと
12：家族のこと13：特にない　14：その他(どのようなことか自由に書いてください)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	NA	n
小学生	49.6	21.0	76.9	68.5	31.4	18.5	27.8	15.6	29.2	23.5	42.8	23.8	2.3	13.8	0.5	558
中学生	58.5	23.1	71.0	64.6	16.4	17.0	15.7	31.1	33.7	62.4	39.5	13.7	2.5	8.6	0.6	489

(16) 友だちとメールでやりとりするのはどのようなことですか？　（当てはまるもの全部に○）
1：友だちのこと　2：先生のこと　3：遊びのこと　4：テレビのこと　5：塾のこと　6：服装のこと
7：持ち物のこと　8：異性のこと　9：勉強のこと　10：スポーツ少年団や部活のこと　11：学校のこと
12：家族のこと　13：特にない　14：メールはしない　15：その他(どのようなことか自由に書いてください)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	NA
小学生	4.8	0.4	7.3	5.6	2.7	2.3	3.6	1.4	2.9	3.4	5.0	1.6	3.9	78.5	1.3	2.9
中学生	28.6	4.7	37.8	20.4	12.1	9.0	14.9	20.9	13.7	34.2	23.7	2.7	2.2	38.2	4.9	2.0

(17) 友だちに話したくても話せないことがありますか？
1：ある　2：ない　3：わからない

	1	2	3	NA	n
小学生	37.1	46.6	16.1	0.2	558
中学生	35.6	38.7	25.6	0.2	489

(18) 今、一番仲良しの友だちはどんな人ですか？　（当てはまるもの３つ以内に○）
1：やさしい人　2：悩みを相談できる人　3：秘密を守る人　4：勉強ができる人　5：考えや趣味が似ている人
6：自分に注意してくれる人　7：気をつかわず話せる人　8：いつも一緒にいてくれる人　9：その他
10：仲良しの友だちはいない

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	NA	n
小学生	49.6	30.8	25.8	14.5	30.8	8.2	41.2	37.1	6.8	0.5	2.0	558
中学生	37.4	38.0	19.6	9.2	33.5	8.2	56.4	27.0	5.9	1.2	4.7	489

(19) どんな人と友だちになりたいと思いますか？　（当てはまるもの３つ以内に○）
1：やさしい人　2：悩みを相談できる人　3：秘密を守る人　4：勉強ができる人　5：考えや趣味が似ている人
6：自分に注意してくれる人　7：気をつかわず話せる人　8：いつも一緒にいてくれる人　9：その他
10：わからない

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	NA	n
小学生	53.2	35.7	36.0	10.6	31.2	11.8	32.1	31.9	5.6	2.0	2.2	558
中学生	35.2	45.0	28.0	5.5	27.0	12.9	54.2	25.6	4.5	5.7	4.7	489

(20) 友だちと仲良しでいるために、どのようなことに気をつけていますか？　（当てはまるもの３つ以内に○）
1：悪口を言わない　2：秘密や約束を守る　3：相手の意見に合わせる　4：何でも話す
5：メールをすぐに返す　6：できるだけ一緒の行動をする　7：欠点や間違いを指摘しない
8：自分の意見をはっきりと言う　9：気をつけていることはない　10：その他

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	NA	n
小学生	54.3	61.6	14.5	19.0	1.8	23.7	10.0	17.7	8.6	2.5	0.7	558
中学生	46.4	59.9	8.8	22.9	3.7	12.5	3.9	25.6	13.9	2.7	3.3	489

＊「その他」と答えた人は、どのようなことか、書いてください。（結果は別ページに）

(21) 仲良しの友だちとけんかした後、仲直りするためにどんなことをしますか？　（当てはまるもの　３つ以内に○）
1：直接会って話す　2：電話で話す　3：手紙を書く　4：メールを送る　5：相手からの連絡を待つ
6：親に助けてもらう　7：別の友だちに思いを伝えてもらう　8：先生に助けてもらう　9：何もしない
10：その他

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	NA	n
小学生	69.0	14.7	19.9	2.3	6.5	4.3	8.1	2.3	11.1	9.9	0.0	558
中学生	66.1	10.2	15.5	25.8	8.2	1.6	7.4	1.2	11.0	7.2	1.0	489

＊「その他」と答えた人は、どのようなことか、書いてください。（結果は別ページに）

(22) あなたは自分が同じクラスの人からどのように見られているか気になりますか？
1：すごく気になる　2：気になる　3：あまり気にならない　4：気にならない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	25.1	29.2	24.4	15.6	5.4	0.4	558
中学生	20.7	29.4	27.6	13.9	8.0	0.4	489

Ⅲ　クラスや授業中のあなたのことを教えてください。

(23) あなたは、自分が思っていることや考えを相手にうまく伝えることができると思いますか？
1：思う　2：少し思う　3：あまり思わない　4：思わない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	10.8	38.0	34.2	8.4	8.6	0.0	558
中学生	9.6	30.5	37.6	13.7	8.4	0.2	489

(24) あなたは学級の役員（学級委員など）や児童会や生徒会の役員などをすすんでやりたいと思いますか？
１：思う　２：少し思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	18.8	29.9	26.7	19.2	5.4	0.0	558
中学生	9.4	19.6	31.3	33.3	6.1	0.2	489

(25) あなたは授業やクラスでの話し合いなどで、反対意見を発表（発言）しますか？
１：よくする　２：時々する　３：ほとんどしない　４：しない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	21.9	49.5	20.8	6.3	1.3	0.4	558
中学生	11.9	42.5	25.2	17.4	2.9	0.2	489

(26) 授業やクラスでの話し合いなどで意見を発表することについて、どのように思いますか？　（当てはまる番号に○）

①自分の意見を発表するのは大切なことだ
１：そう思う　２：ときどきそう思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	51.6	31.2	10.0	2.0	3.8	1.4	558
中学生	53.8	30.7	8.6	3.1	3.7	0.2	489

②相手に自分の考えが伝わるとうれしい
１：そう思う　２：ときどきそう思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	59.0	24.2	9.3	3.9	2.2	1.4	558
中学生	51.3	27.0	12.1	5.1	3.7	0.8	489

③意見を発表するのは、はずかしい
１：そう思う　２：ときどきそう思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	17.9	31.9	21.1	21.5	4.8	2.7	558
中学生	19.2	31.7	24.9	19.0	4.7	0.4	489

④意見を発表するのは、めんどう
１：そう思う　２：ときどきそう思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	7.0	17.9	26.3	40.1	5.7	2.9	558
中学生	14.5	28.8	32.5	18.8	4.3	1.0	489

⑤自分の意見が正しいかどうか気になる
１：そう思う　２：ときどきそう思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	45.7	30.3	11.5	8.1	2.5	2.0	558
中学生	39.9	35.8	14.3	5.9	3.5	0.6	489

⑥反対意見など言われるといやな気持ちになる
１：そう思う　２：ときどきそう思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	25.3	22.9	23.7	22.9	2.5	2.7	558
中学生	17.4	24.7	35.0	17.4	5.1	0.4	489

⑦自分が分かっていればいいので発表しない
１：そう思う　２：ときどきそう思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	6.6	16.5	28.0	41.8	4.3	2.9	558
中学生	8.2	17.6	38.0	29.2	6.5	0.4	489

⑧クラスの中で目立ったことはしたくない
１：そう思う　２：ときどきそう思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	21.5	23.8	25.1	22.9	3.9	2.7	558
中学生	17.0	27.6	32.5	17.0	4.7	1.2	489

⑨発表すると、後で何か言われないかと気になる
１：そう思う　２：ときどきそう思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	27.1	20.8	15.9	31.0	2.5	2.7	558
中学生	14.1	21.1	26.8	34.6	3.3	0.2	489

Ⅳ　「いじめ」について教えてください。

(27) あなたは「いじめ」にあったことがありますか？
１：ある　２：ない　３：わからない

	1	2	3	NA	n
小学生	29.6	51.4	18.6	0.4	558
中学生	21.1	58.7	20.2	0.0	489

(28) 今、自分が「いじめ」にあうかもしれない、という不安や心配がありますか？
１：すごくある　２：少しある　３：あまりない　４：ない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	13.6	28.0	19.7	34.2	4.1	0.4	558
中学生	7.8	22.3	23.3	39.1	7.6	0.0	489

(29) あなたは「いじめ」にあったとき、だれに相談しますか？　（「いじめ」にあったことのない人も「あった場合を考えて」答えてください）（当てはまるもの全部に○）
１：担任の先生　２：学校の友だち・先輩　３：違う学校の友達・先輩　４：親　５：きょうだい・祖父母
６：携帯のメールやネットで知り合った友だち　７：「いじめ」110番などの電話相談室　８：だれにも相談しない
９：そのほかの人　10：わからない

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	NA	n
小学生	35.5	49.8	10.9	61.1	23.1	1.4	7.7	9.7	4.3	6.3	0.0	558
中学生	21.5	59.3	12.3	36.2	10.4	3.7	2.7	13.3	4.1	9.8	0.2	489

Ⅴ　学校以外の生活のことについて教えてください。

(30) あなたは学校が休みの日にどこで過ごすことが多いですか？　（当てはまるもの３つ以内に○）
１：自分の家　２：近くの公園など　３：学校　４：友だちの家　５：じゅくや習い事　６：スポ少や部活動
７：ショッピング　８：カラオケ　９：図書館　10：その他

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	NA	n
小学生	73.3	12.5	2.0	33.7	11.6	24.9	33.2	0.9	3.8	13.1	0.5	558
中学生	80.6	2.9	2.0	33.1	6.5	63.4	29.0	3.5	1.4	13.5	1.0	489

(31) あなたは学校が休みの日にだれと過ごすことが多いですか？
１：クラスの友だち　２：近所の友だち　３：スポ少や部活動の友だち　４：塾の友だち　５：ちがう学校の友だち
６：家族やきょうだい　７：その他

	1	2	3	4	5	6	7	NA	n
小学生	15.4	6.5	10.2	1.4	1.4	46.6	3.8	14.7	558
中学生	13.1	1.8	17.0	1.0	2.2	23.7	5.9	35.2	489

(32) あなたは学校が休みの日、何をして過ごすことが多いですか？

Ⅵ　あなたを支えてくれる人のことについて教えてください。

(33) 学校の先生はあなたのことをほめてくれますか？
１：よくほめてくれる　２：時々ほめてくれる　３：あまりほめてくれない　４：ほめてくれない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	16.5	53.6	12.4	4.3	13.1	0.2	558
中学生	5.3	47.2	13.7	6.1	27.4	0.2	489

(34) 家族はあなたのことをほめてくれますか？
１：よくほめてくれる　２：時々ほめてくれる　３：あまりほめてくれない　４：ほめてくれない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	41.0	41.4	10.8	2.9	3.9	0.0	558
中学生	13.7	51.1	12.9	8.2	14.1	0.0	489

(35) あなたはその日にあった出来事などを家族に話しますか？
１：聞かれなくても自分から話す　２：聞かれたら話す　３：聞かれても話さない　４：聞かれないから話さない
５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	48.4	36.2	4.1	6.1	4.5	0.7	558
中学生	37.4	45.8	4.3	7.0	5.3	0.2	489

(36) あなたは近所の人とあいさつをしたり、話したりしますか？
１：よくする　２：時々する　３：あまりしない　４：しない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	47.5	39.1	9.7	3.0	0.5	0.2	558
中学生	38.0	43.1	12.1	4.1	2.7	0.0	489

(37) 次の中で、今までに家族と一緒に行ったことがあるところはどこですか？　（当てはまるもの全　　部に○）
１：動物園　２：水族館　３：遊園地　４：図書館　５：博物館・科学館　６：美術館　７：音楽会・コンサート
８：スキー・スノボー　９：ハイキング・山登り　10：キャンプ

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	NA	n
小学生	88.7	86.6	87.6	62.5	65.6	31.5	40.1	33.3	36.2	34.2	1.1	558
中学生	86.5	82.4	88.8	55.4	54.0	23.7	31.5	34.4	29.0	31.5	1.0	489

(38) あなたは家族と一緒に旅行やキャンプに行きたいと思いますか？
１：すごく思う　２：思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	64.9	18.5	9.3	5.0	1.1	1.3	558
中学生	24.5	35.4	22.9	10.0	6.3	0.8	489

Ⅶ　携帯電話について教えてください。

(39) あなたは携帯電話をもっていますか？
１：自分専用のものをもっている　２：家族やきょうだいといっしょに使うものをもっている　３：もっていない

	1	2	3	NA	n
小学生	14.0	9.9	75.8	0.4	558
中学生	40.5	8.4	50.7	0.4	489

(40) (39) で３と答えた人に聞きます。（(39) で１・２を選んだ人は (41) に進んでください）
あなたは携帯電話をもちたいと思いますか？
１：すごく思う　２：少し思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	41.1	31.0	13.0	11.6	0.2	3.1	423
中学生	34.7	33.5	15.7	9.7	1.6	4.8	248

＊ここから先は、携帯電話をもっている人だけに聞きます。もっていない人への質問はすべて終わりました。ありがとうございました。

(41) 携帯電話の機能のうち、よく使うものはどれですか？　（当てはまるものに○を付ける）
１：電話　２：メール　３：インターネット　４：カメラ　５：音楽をきく　６：その他

	1	2	3	4	5	6	NA	n
小学生	67.7	46.6	6.8	45.9	37.6	19.5	6.0	133
中学生	41.0	88.3	28.0	25.1	37.7	8.4	0.8	239

(42) １日にどのくらいの時間電話をしますか？
１：ほとんどしない　２：３分以内　３：10分以内　４：30分くらい　５：１時間くらい　６：１時間以上
７：わからない

	1	2	3	4	5	6	7	NA	n
小学生	29.3	33.1	21.8	6.8	0.8	0.0	2.3	6.0	133
中学生	44.4	13.4	12.6	6.3	2.1	9.2	11.3	0.8	239

(43) １日にどれくらいメールをしますか？　（送信の回数で答えてください）
１：ほとんどしない　２：５回くらい　３：10回くらい　４：20回くらい　５：50回くらい　６：100回くらい
７：100回以上　８：わからない

	1	2	3	4	5	6	7	8	NA	n
小学生	49.6	21.1	6.8	7.5	0.8	0.0	0.0	5.3	9.0	133
中学生	19.2	15.9	14.6	15.5	12.1	2.9	3.8	14.2	1.7	239

(44) あなたは次のことについてどう思いますか？　（当てはまる番号に○）
①携帯電話をつかうのは楽しい
１：すごく思う　２：そう思う　３：あまり思わない　４：思わない　５：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	36.8	24.8	18.0	12.0	1.5	6.8	133
中学生	36.4	41.0	15.1	2.1	4.2	1.3	239

②メールにはすぐに返事を返すようにしている
1：すごく思う　2：そう思う　3：あまり思わない　4：思わない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	31.6	24.8	9.0	12.8	13.5	8.3	133
中学生	24.3	35.1	23.4	10.0	5.9	1.3	239

③直接話すよりメールの方がいい
1：すごく思う　2：そう思う　3：あまり思わない　4：思わない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	13.5	9.0	27.1	34.6	8.3	7.5	133
中学生	20.1	16.7	33.1	18.8	10.0	1.3	239

④携帯電話が手もとにないと(持ってないないと)不安になる
1：すごく思う　2：そう思う　3：あまり思わない　4：思わない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	14.3	12.0	15.0	48.9	2.3	7.5	133
中学生	12.1	12.1	31.8	38.1	4.6	1.3	239

⑤電話やメールが来ないと不安になる
1：すごく思う　2：そう思う　3：あまり思わない　4：思わない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	8.3	11.3	15.8	54.9	2.3	7.5	133
中学生	11.7	15.1	29.7	38.1	4.2	1.3	239

⑥友だちをつくるには携帯電話が必要だ
1：すごく思う　2：そう思う　3：あまり思わない　4：思わない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	6.8	2.3	8.3	70.7	4.5	7.5	133
中学生	1.7	6.7	26.8	57.3	6.3	1.3	239

⑦友だちとメールをしていれば仲間はずれにならない
1：すごく思う　2：そう思う　3：あまり思わない　4：思わない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
小学生	3.8	4.5	11.3	66.9	6.8	6.8	133
中学生	1.7	2.1	22.6	64.9	7.5	1.3	239

⑧プロフに興味がある(中学生にだけ質問)
1：すごく思う　2：そう思う　3：あまり思わない　4：思わない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
中学生	7.1	8.8	18.8	56.5	7.5	1.3	239

⑨裏サイトに興味がある(中学生にだけ質問)
1：すごく思う　2：そう思う　3：あまり思わない　4：思わない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
中学生	8.8	15.1	18.4	49.0	6.3	2.5	239

⑩知らない人とメールなど交換するのは怖い(中学生にだけ質問)
1：すごく思う　2：そう思う　3：あまり思わない　4：思わない　5：わからない

	1	2	3	4	5	NA	n
中学生	42.3	17.6	14.2	17.2	7.5	1.3	239

(45) 携帯電話によって友だちとの間で問題になったことがありますか？(小学生への質問)
1：ある　2：ない　3：わからない

	1	2	3	NA	n
小学生	3.0	82.0	6.8	8.3	133

携帯電話を持っていて、ストレスを感じることはありませんか？(中学生への質問)
1：よく感じることがある　2：時々感じることがある　3：感じたことはない　4：わからない

	1	2	3	4	NA	n
中学生	0.8	9.2	75.3	13.4	1.3	239

(47) (46)で1や2を選んだ人はどのようなことが問題なったか(ストレスを感じたか)教えてください。

将来やってみたい仕事　小学生408人

＊Q12の自由記述の集計。複数書いてあるものについては最初に書かれたものだけ集計した。

専門技術職(205人：50.2%)	度数	%	主な職業と希望した人数(度数)
学者・研究者	3	0.7	
機械・電気技術者	5	1.2	
建築・土木技術者	3	0.7	
情報処理技術者	6	1.5	プログラマー(1)　ゲーム設計(5)
医師・歯科医・獣医・薬剤師	18	4.4	医師(10)　歯科医師(1)　獣医(3)　薬剤師(4)
保健士・看護士	4	1.0	看護士(4)
医療技術者	1	0.2	臨床検査技師(1)
その他の保険医療技術者	1	0.2	栄養士(1)
社会福祉の専門職	23	5.6	保育士(21)　介護士(2)
裁判官・弁護士	0	0.0	
教員	8	2.0	幼稚園教員(3)　小中学校教員(5)
文芸・記者・編集者	2	0.5	作家(2)
美術家・デザイナー	29	7.1	画家(2)　デザイナー(19)　イラストレーター(2)　漫画家(6)
音楽家・舞台芸術家	7	1.7	音楽家(4)　声優(1)　ダンサー(1)　バレリーナ(1)
個人教師(ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ)	5	1.2	ピアノ教師(3)　スポーツインストラクター(2)
スポーツ選手	81	19.9	野球(35)　サッカー(28)　バスケット(3)　陸上(3)　水泳(3)
動物訓練士	3	0.7	盲導犬訓練士(1)
アナウンサー	5	1.2	アナウンサー(5)
その他の専門技術者	3	0.7	気象予報士(1)　宇宙飛行士(1)
サービス職(62人：15.2%)			
生活衛生	24	5.9	理容・美容師(19)　ネイルアーティスト(2)
飲食物調理	3	0.7	調理師・コック(3)
娯楽施設の接客	4	1.0	テーマパーク(4)
接客・給仕の職業	6	1.5	キャビンアテンダント(2)
テレビタレント	23	5.6	歌手(10)　芸人(4)
その他のサービス職	2	0.5	トリマー(2)
運輸・通信職(4人：1.0%)			
鉄道運転の職業	1	0.2	新幹線の運転手(1)
自動車運転の職業	2	0.5	
船舶・航空機の運転の職業	1	0.2	パイロット(1)
その他の運輸の職業	0	0.0	
事務職(1人：0.2%)			
一般事務	1	0.2	
営業販売職(28人：6.9%)			
小売店主	17	4.2	食品(6)　ペットショップ(3)　花屋(7)
飲食店主	3	0.7	蕎麦屋(2)
販売員(店員)	8	2.0	
保安職(6人：1.5%)			
自衛官	2	0.5	
警察官・保安官	1	0.2	警察官(1)
その他の保安の職業	3	0.7	消防官(3)
農林水産業職(11人：2.7%)			
農業・畜産	2	0.5	畜産(2)
漁業	1	0.2	
その他の動物飼育	8	2.0	動物園水族館の飼育員(7)
生産・労務職(51人：12.5%)			
輸送機器(自動車)の組立製造	4	1.0	
食品等の製造	35	8.6	パティシエ(35)
大工・左官	3	0.7	大工(3)
その他の生産労務職	9	2.2	食品サンプル製造(1)　機械整備(1)　板金塗装(1)
その他(24人：5.9%)			
○○関係の仕事という答	6	1.5	動物関係(3)　ファッション関係(1)　福祉関係(1)　医療関係(1)
その他	18	4.4	
分類不能(14人：3.4%)			
分類不能	14	3.4	人の役に立つ仕事(8)　皆が幸せになる仕事(1)　喜ばれる仕事(1)

将来やってみたい仕事　中学生267人

＊Q12の自由記述の集計。複数書いてあるものについては最初に書かれたものだけ集計した。

専門技術職(124人：46.4%)	度数	%	主な職業と希望した人数(度数)
学者・研究者	3	1.1	
機械・電気技術者	2	0.7	
建築・土木技術者	1	0.4	
情報処理技術者	4	1.5	プログラマー(1)　ゲーム設計(2)
その他の技術者	1	0.4	
医師・歯科医・獣医・薬剤師	11	4.1	医師(4)　獣医(4)　薬剤師(3)
保健士・看護士	7	2.6	看護士(7)
医療技術者	0	0.0	
その他の保険医療技術者	6	2.2	栄養士(2)　作業療法士(2)　鍼灸師(1)　ｶｳﾝｾﾗｰ(1)　ﾏｯｻｰｼﾞ(1)
社会福祉の専門職	23	8.6	保育士(22)　介護士(1)
裁判官・弁護士	1	0.4	弁護士(1)
教員	15	5.6	幼稚園教員(5)　小中学校教員(10)
文芸・記者・編集者	4	1.5	作家(2)　脚本家(1)
美術家・デザイナー	13	4.7	画家・書家(1)　デザイナー(1)　ｲﾗｽﾄﾚｰﾀｰ(6)　漫画家(3)
音楽家・舞台芸術家	0	0.0	音楽家(2)　俳優(1)　声優(6)
個人教師(ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ)	5	1.9	ピアノ教師(1)　ｽﾎﾟｰﾂｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ(2)
スポーツ選手	14	5.2	野球(7)　サッカー(4)　テニス(1)
動物訓練士	1	0.4	盲導犬訓練士(1)
通訳	2	0.7	
その他の専門技術者	2	0.7	ｽﾎﾟｰﾂﾄﾚｰﾅｰ(1)　ｱﾆﾒｰﾀｰ(1)
サービス職(30人：11.2%)			
生活衛生	10	3.7	理容・美容師(8)　ﾈｲﾙｱｰﾃｨｽﾄ(2)
飲食物調理	5	1.9	調理師・コック(5)
娯楽施設の接客	2	0.7	テーマパーク(2)
接客・給仕の職業	8	3.0	ｷｬﾋﾞﾝｱﾃﾝﾀﾞﾝﾄ(1)　ｳｪﾃﾞｨﾝｸﾞﾌﾟﾗﾝﾅｰ(2)
テレビタレント	1	0.4	芸能人(1)
その他のサービス業	4	1.5	トリマー(2)
運輸・通信(1人：0.4%)			
鉄道運転の職業	0	0.0	
自動車運転の職業	0	0.0	
船舶・航空機の運転の職業	0	0.0	
その他の運輸の職業	1	0.4	
事務職(1人：0.4%)			
一般事務	1	0.4	
営業販売職(13人：4.9%)			
小売店主	7	2.6	ペット(1)　花屋(1)
飲食店主	1	0.4	
販売員(店員)	5	1.9	
保安職(10人：3.7%)			
自衛官	4	1.5	
警察官・保安官	4	1.5	警察官(4)
その他の保安の職業	2	0.7	消防官(2)
農林水産業職(6人：2.2%)			
農業・畜産	3	1.1	農業(2)　園芸(1)
漁業	0	0.0	
その他の動物飼育	3	1.1	ブリーダー(2)
生産・労務職(14人：5.2%)			
輸送機器(自動車)の組立製造	0	0.0	
食品等の製造	8	3.0	パティシエ(6)　パン屋(2)
大工・左官	2	0.7	大工(2)
その他の生産労務職	4	1.5	機械整備(3)
その他(49人：18.4%)			
○○関係の仕事という答	42	15.7	音楽関係(9)　動物関係(9)　スポーツ関係(7)　IT関係(3) 美容関係(3)　ﾌｧｯｼｮﾝ関係(2)　テレビ関係(2)　医療関係(1) 食品関係(1)　科学技術関係(1)　演劇関係(1)　飲食関係(1) 書道関係(1)　車関係(1)
その他	7	2.6	
分類不能(19人：7.1%)			
分類不能	19	7.1	人の役に立つ仕事(4)　人を助ける仕事(2)　自分のしたいこと(2)

財団法人 静岡県教職員互助組合

相互扶助を基盤として、"健康支援・経済支援・生きがい支援" を互助組合事業の三本柱に、本人・家族療養費給付や生活習慣病健診などを実施しています。

互助組合 マスコットキャラクター "ごじょ丸"

静岡市葵区駿府町 1-12 静岡県教育会館 2F　TEL 054-254-3626
HP http://www.gojomaru.com/

静岡県教職員生活協同組合

チラシ・カタログによる自主供給＆組織供給を主体とし、巡回供給、ガソリン供給、マンション、指定店など教職員のみなさまの生活をサポートしています。

静岡市駿河区登呂 6-14-27　TEL 054-282-2140
HP http://www.kyousyokuin-seikyo.com/

静岡県学校生活協同組合連合会

STC 学生協は子どもの未来を考えます。

静岡県内の先生がた及び各地区学生協と連携して学用品を企画開発し、供給しています。

静岡市駿河区登呂 6-14-27　TEL 054-282-2166
HP http://www.kyousyokuin-seikyo.com/

社団法人 静岡県出版文化会

平成23年度版小学校新教科書の内容に沿った図書教材研究事業も、まとめの段階に入っています。新年度 4 月からの学習活動を支える図書教材として、ご期待ください。

平成 22 年度『計算の練習』図書教材研究会議

静岡市葵区駿府町 1-12 静岡県教育会館 3F　TEL 054-255-4451
HP http://www.syutubun.com/

静岡県教育事業団体連絡会

教育と生活をサポート

私たち教育事業団体はみなさまのサポーターです

事務局
〒420−0856 静岡市葵区駿府町 1 −12
静岡県教育会館 2 F
（静岡県教職員互助組合内）

財団法人日本教育公務員弘済会静岡支部

「教育研究助成」、「奨学」、「教育文化」、「福祉・福利厚生」、「共済（提携保険）」の 5 つの事業で、子どもたち、先生がた、保護者のみなさまの教育や研究、活動を支援し、生涯の安心をお届けしています。

静岡市葵区駿府町 1-12 静岡県教育会館 4F　TEL 054-205-5130

株式会社 静岡教育出版社

環境・体にやさしい教材づくり

環境や体の安全に配慮した用紙とインキを使用しています。

静岡市駿河区曲金 5-5-38　TEL 054-281-8870
HP http://www.shizedpu.co.jp/

国際観光株式会社

KOKUSAI 修学旅行を手がけて59年。

静岡県の子どもと教職員と教育振興のために、安心と安全を第一として「学ぶ心を広げる価値ある修学旅行」を推進しています。

本社：静岡市葵区伝馬町 6-18 109ビル 5F　TEL 054-251-7220
HP http://www.kokusai-kanko.co.jp/

静岡県住宅建設工業株式会社

住む人の心を癒し、住む人に適し、そして環境への優しさが満たされる健康な家を提案し、教職員の方々の希望に応えられるように最大限努力しています。

静岡市駿河区登呂 6-14-14　TEL 054-281-2277
HP http://www.jukenko.com/

静教組立教育研究所　調査部

所員：（年度）

山梨　隆史：08　（賀茂支部）
梶原　利彦：09〜10（沼津支部）
岩田　良祐：08〜09（志太支部）
河合　勝之：08〜10（浜松支部）
森本　伸二：10　（浜名支部）
神戸　力弥：09〜10（田方支部）
小山　悟：10　（清庵支部）
北島　克己：09〜10（榛原支部）
松山　淳：09　（浜名支部）

共同研究者

渋江かさね（静岡大学准教授）：08〜10
林　拓也（奈良女子大学准教授）：10

事務局

細川　幹太：08〜10　飯沼　裕：08　齋藤　伸子：08　石山　知義：08〜09
平野　恵司：09〜10　大中香代子：10

子どもの人間関係づくりに関する調査

編集・発行　／　静岡県教職員組合立教育研究所　調査部
〒420-0856　静岡市葵区駿府町 1 番 12 号
静岡県教育会館
TEL054 - 251 - 2777
発　行　者　／　教育研究所運営委員長　加藤典男
発　行　日　／　2011 年 3 月

http://www.stu.jp/

最後までお読みいただきありがとうございました。この報告書をお読みになったご意見・ご感想をお聞かせください。皆さんからいただいたご意見・ご感想は、今後の研究活動や成果発信に生かしていきます。

STU Institute of Educational Research
静岡県教職員組合立教育研究所
FAX：**054-255-5110**
Mail：**sier@stu.or.jp**（ご意見専用研究所メールアドレス）

↑こちらのQRコードからどうぞ！